

ハズされ者の幸せ

鶉野千歳

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

楠木 秦は元舞鶴鎮守府の提督だった・

睦は元舞鶴鎮守府所属の艦娘だった・

この二人の親子は、梅雨時期に一人の女性を助ける・

助けたことでこの二人の人生が大きく変わる。

その女性は・・・

これは艦隊これくしょんの二次創作物です。地名人名等は実在のものとは何ら関係ありません。

目次

出会い

大雨の出会い

自己紹介

私の提督

睦の気持ち

鳳翔の処遇

楠木家の一日(前編)

楠木家の一日(後編)

復帰、決定？

睦爆弾

いざ出発！

重なる思い

99

94

83

71

60

46

32

21

11

1

入寮

重なる思い

赤城の思い

辞令

“お母さん”呼び

楠木隊、出撃！

慣熟訓練

慣熟訓練の裏で

闇夜の出撃

航跡は続く

避難

合流

攻撃

240

231

216

209

195

187

171

160

149

136

126

112

ケツコン式	368
帰省　　ゝ義理の息子ゝ	355
帰省　　ゝ実家にてゝ	345
333	
帰省　　ゝ見合い話、秦の決意ゝ	324
“お母さん”の役目	305
睦の友達	293
ケツコンカツコカリ	
二人の先は・・・	
宴ゝささやかな宴ゝ	284
宴ゝ告白事件ゝ	274
帰港	262
臨時指揮権	248

二人の、時間：	379
幸せの前に	389
二人の幸せ	400

出会い

大雨の出会い

20×
×年の梅雨時期。

大都市から列車で1時間離れた町に1組の父娘が住んでいる。

父の名は楠木秦。32歳。

娘の名は楠木睦。11歳。

今日は、台風かと思うほどの大雨と暴風である。

すでにこの地方には、大雨洪水と暴風の警報が出されている。

秦は勤め先から帰宅中である。

警報が発令され、避難勧告が出される前に、会社から帰宅命令が出ていたのだ。

急いで帰りたいが、乗った列車が警報の為、停止と徐行を繰り返しており、なかなか進まないのである。

列車内から家に居るであろう、睦に携帯電話で連絡をする。

朝から警報の為、学校が休校になっているのだ。

普段は、平日に学校が“合法的に”休みになる事なんて滅多にないから嬉しいのだ

が、生憎今日は大雨と暴風で外出する方が危険だ。

何度かの呼び出し音の後、睦が出た。

睦は、秦の娘である。

髪型はショートカットで、ころころと笑うと猫のように思えるのだった。

「睦か？　今、帰宅中の列車の中なんだよ。帰りつくまでには、まだまだ掛かりそうだよ。」

「そうなの？」

「ああ。晩御飯は、昨日の残り物で済ませてもいいからね。」

「ううん。父さんが帰ってくるまで待つてるよ。」

「いいの？」

「うん。」

「分かった。じゃあ、待ってて。」

そう言つて電話を切った。

その後、さらに徐行と停止を繰り返しながら進む。

やっとの思いで最寄駅に到着したが、普段の倍の時間が掛かってしまった。

駅からは徒歩10分くらいで家に着く、ハズが、こう暴風ではなかなか前に進めない。

ゴーゴーと風切り音が凄い！

家に向かって歩き出すが、既に靴の中は雨が入り込んで、ぐしゃぐしゃ言ってる。

ズボンも雨にぬれ、かろうじて傘に隠れる上半身だけが塗れていない状況である。

アスファルトの道が、滝のようになって水が流れている。

(ここは平地だぞ、そんなところを水が勢いよく流れるなんて、どうなってんよ？ 用水路が溢れたかあ?)

そう思いながら家路を急ぐが、ハッと秦の目に黒い物体が映った。

瞬間、足が止まる。

(何だ??)

ジーンと見ると、人、らしい。

なにか、ふらついているような。

(傘も差さずに、ようやるわ．．．ずぶ濡れやないか．．．)

そう思つて横を通り過ぎようとしたとき、バシヤ！と黒い人影が道に倒れた。

!!

「おい！ 大丈夫か？」

と声を掛けるが、反応が、無い。

仕方なく傍によつて身体を起こして、

「大丈夫か？ どうした？」

「う、うう、、、、、」

とうめき声を発したかと思うとぐったりと意識を失ってしまった。

(ええええ? マジかよ?)

と思いつつ、

(どうするか……仕方ねーな、家まで運ぶか……)

秦の上着も既にならず濡れだったので、この際、同じか、と負ぶって帰ることにした。肩を貸すと、軽い。しかも腕にかすかに胸の膨らみがあたる……

(え?! 女性??)

そう。女性だった。体格は秦より一回り以上小さい、小柄な女性だ。

靴も履いていない。

どうやら袴を穿いているようだ。

大雨と暴風の中を負ぶって自宅へ向かう。

濡れ狸になった状態でなんとか家にたどり着いた。

念のため、呼び鈴を押して、自宅の玄関を開け、転がり込んだ。

「父さん? おか…… どうしたの!？」

「ああ、ただいま。悪い、手伝ってくれ。ずぶ濡れなんで、脱衣所まで。」

「うん! バスタオル、いるよね? 持ってくる!」

「すまん。頼む。」

秦も靴、上着を脱ぎ捨て、女性を脱衣所まで運ぶ。

睦が持ってきたバスタオルで女性の顔、頭、髪を拭いていく。

女性の上着は羽織り物と着物だった。

袴、着物はぐつしよりと水を吸っている。

着物と袴、下着まで脱がせ、バスタオルで拭いていく。

(もの凄く、華奢な体つきだ・・・ホントはお風呂に入りたいが・・・)

拭き終わって秦のスウェットを着せる。

睦に手伝ってもらって髪をドライヤーで乾かしていく。

秦もその間に着替えて部屋に布団を敷いた。

女性を布団に寝かせても、意識は戻らない・・・。

呼吸はしているのだが・・・。

「無理に起こす必要もないだろう。」と。

一通りの作業が終わると、ホツとする間もなく、クウウウウ——、つと2匹の腹の

虫が鳴いた。

「はははははっ。晩御飯にするか?」

「うん、お腹すいた〜。」

秦は晩御飯の用意を始めた。

今日のメニューは豚の生姜焼きと豚汁にした。冷蔵庫に買い置きしてあった豚肉を使ったのだ。

台所で用意をしながら、傍に来た睦に、女性の事を話し始めた。

「駅からの帰りの途中でね………」と。

「そうだったんだ……。父さん、きつといいことしたんだよ。」

「そうか？ でも、睦がそう思ってくれるなら、いつか。」

「でも、あの人、綺麗だよね。」

「ああ。結構美人だと思うぞ。」

そう言っている間に晩御飯が出来た。

三人分である。

「あれ？ 三人分？」

「うん。あの人の分。たぶん、お腹すいてると思うよ。」

「そう。じゃ、先に、いただきまーす。」

「頂きます。」

二人は食事を進めていく。

睦はきょう一日、家の中で居て、何もできなかった事を愚痴った。

その愚痴を、眼を細めて秦が「そうか、そうか。」と聞いている。そして……

「あー、美味しかったあ。　ごちそうさまでした。」

「美味しかったか？」

「うん。　グツジョブ！」

食後のお茶タイムを二人でしていると、部屋の方から音がした。

「ん、ん……」

「ん、気が付いたかな？」

彼女が寝ている部屋をのぞき、声を掛ける。

「大丈夫かい？　体は何ともないかな？」

布団の中で、ボーつとしている顔が、コクリと頷く。

彼女の額に手をあてて熱を測ってみる。

「うん、熱くないね。」

俯いたままではあったが、この家の3匹目の腹の虫が鳴った。　くううーつと。

「お腹、空いてるね？　ご飯、出来てるから、食べな。　立てるかい？」

彼女を起こして、テーブルまで移動する。

椅子に座ると、睦がご飯をよそう。

彼女の視線はテーブルの上の食事に向いていたが、

「どうぞ召し上がれ。父さんの手作りだけど、美味しいよ。」

と睦が声を掛けた。

二人は着席するよう促すと、彼女は手を合わせて食事を始めた。

(律儀だねえ)

彼女の食べる音だけが聞こえている。

食べているのを見て、二人はホツとしていた。

「あ、終わったら言つてね。片づけるから。」

そう言つて居間に出て行つた。

居間で気象ニュースを見ていたが、しばらく経つて、カチャカチャと食器が当たる音がして、急いで台所に向かうと、彼女が洗い物をしていた。

「いや、そこまでしなくてもいいから。」

「・・・」

といつているうちに洗い物を終えてしまった。

三人は居間のソファアに座り、話を、聞くことにした。

改めてお茶を入れ直して三人の前に置く。

「では、改めて、私はこの家の主で、楠木泰。で・・・」

「私は睦。よろしくね。」

「わ、わたし………」

その女性は、それ以降、何もしゃべらなかつた。

「まあ、いいわ。とりあえず、元気になってくれれば。今日は、天候がめつちや悪いから、ウチに泊りな。あ、着物はちよつとやそつとで乾かないから、寝間着はそれで我慢してくれるかな。」

家の外は相変わらずの大雨、暴風であつた。

その日は、女性に1部屋を譲り、秦と睦は同じ布団で寝ることにした。

彼女は疲れていたのだろうか、布団に入るとすぐに寝入ってしまったようだった。

小気味よい寝息がしてきた。

こちらの二人はというと……

「へへへっ、父さんといつしよ。」

睦が秦に抱き着いている。

「たまにはいいだろう。」

「うん。」

「あの人、明日には元気になるかな？」

「そうだねえ、元気になってくれるといいんだけどねえ。さ、もう遅いから、寝よ？」

時刻は深夜0時を廻っていた。

自己紹介

次の日。

この日も天候は回復せず、大雨のままである。

天気予報でも、梅雨前線が停滞していて、2、3日続くらしい。

ま、今日明日は休日なので、秦はずっと家に居てもいいのだが……。

時刻は朝8時になった。秦も睦も惰眠を貪っていた。

普段は朝6時に起き出すのだが、今日は、絶賛寝坊中だ。

9時前になって秦が起き出してきた。

朝の身支度をして、朝食の準備に取り掛かる。

朝食のメニューは、買い置きのおツケを焼いた、焼きおツケ、残り物のポテトサラダ、

同じく残り物の豚汁とご飯。

おツケの焼けるいい匂いで、睦が起き出してきた。

「父さん、おはよ……。」

「起きたか？ 顔を洗ってきな。もうご飯出来るから。」

私は雨の音と、お魚の焼けるいい匂いで目が覚めた。
ハッとする。

(……は??)

布団から身体を起こし、辺りを見廻す。

(知らない部屋……!?!? そうだ! 昨日雨の中を歩いていて、気がついたら布団の中にいて、お腹が空いて、ご飯をよばれて…… また寝て……????)

だんだん、昨日の出来事が蘇ってきた。

着ていた着物ではない。

(男物? スウエットだ……。誰の?)

時計を見つけて時刻を見ると、9時30分だった。

部屋の外から声がする。

親子だろうか……。声のする方へと歩いていく。

部屋を出て廊下を進むとキッチンだ……。

そこには、男の人と女の子がご飯を食べていた。

朝食を摂っていた秦が、物音に気付いて振り向くと、彼女が立っていた。

「あ、起きたのかい? おはよう。」

「おはよう、お姉さん？」

「お、おはようございます」

とってお辞儀をした。

「とにかく、朝ご飯を食べようよ。さ、座って。」

「はい……」

といて三人で朝食を食べた。無言の間ではあつたが……。

朝食後、再び三人は居間に移動していた。

おもむろに秦が切り出す。

「さて、昨日の今日なんだが、君の話を聞かせて欲しいんだけど、いいかな？ 私はこの

家の主で、楠木秦。で……」

「私は睦。」

「わ、私は……鳳・翔……といいます。」

「ほうしよう？」と睦が聞き返した。

「はい……え、えつと、私……艦娘なんです。」

「(やつぱり)……それがなんで、こんなところに……」

鳳翔がここに至るまでの話しをしてくれた。

自分は呉の鎮守府にいた軽空母であること、鎮守府では厨房を取り仕切っていたこと

を話した。

そして、最近、提督の交代があったことを。

その提督によって、鎮守府の方針が大きく変わり、軽空母の自分の居場所が無くなったことを。

新しい提督は、攻め一辺倒の考えだったらしく、第一線で活躍できない艦娘は転属や解体を指示された。

「私は、転属先が見つからず、解体されることになりました。解体後は夜伽の相手にされることになりました。私は……解体ならば、誰かの向上の為に役立てられるならば、と受け入れましたが、夜伽の相手になるのは嫌でした、絶対に!! それで、夜にこつそりと抜け出してきました……」

「行く宛てはあったのかい?」

「……いいえ。 出たものの、どこに行けばいいか、分かりませんでした。そこで、以前、舞鶴鎮守府では艦娘と提督の関係が非常によく、うらやましがられているという噂を聞いていたので……」

「噂を頼りに、舞鶴鎮守府まで歩いて行こうとした、と。」

「はい……。 私、鎮守府以外での生活の方法を知りませんので……」

鳳翔が話し終えると、無言の時間が流れた。

「はああああああ……。なんとまあ……えらいこつちやぞ、こりやあ……。
所謂、脱走艦つてことかあ。」

「どうするの？ 父さん？」

秦は頭を抱えて、唸っている……。

（類が類を呼ぶのは、運命か……。）

「ご迷惑はお掛けいたしません。今ここを出ていきます。それであればこちらにご」

迷惑にならないと思えますので。」

「この雨の、暴風の中を、歩いていくつもりかい？」

俯きながら小さく答える。

「はい……。」

……。

「はあ……。まあ、何かのめぐり合わせと思えば、思えなくもないか……。」

「??父さん??」

（腹を決めるか……。）

「鳳翔さん、君には俺の事を詳しく話してなかったね。俺はね、1年前までの3年間、

君が行こうとしてゐる舞鶴鎮守府で提督をしていたんだよ。」

えっ？ と鳳翔が驚いた顔をする。

「正確には、現在は、海軍の予備役大佐なんだよ。」

「舞鶴の……予備役大佐?？」

鳳翔の顔が強張る。

予備役とは言え、海軍に繋がりのある人間である。

そんな人間の家に一泊したことに驚いたが、もしかして、既に通報されていたら……と思うと急に不安になってきた。

「心配しなくてもいいよ。通報とかはしてないから。」

鳳翔の不安は消えない……。

「予備役とは言え、円満に予備役になったわけじゃないから。軍に恩義があるわけでは無いんだよ。」

「はあ……。」

「まあ、いろいろあったんだが、提督を辞めなければ、ならない状況だったんだ。だから自ら進んで予備役になったんだよ。あのときはもう少し遅かったら命が無くなるどころだったからね。」

秦はニコニコしながら話していた。

「退役でもよかつたんだが、まだまだ働かないといけないから、予備役としたんだよ。その方がいろいろと有利かなと思つてね。」

「じゃあ、睦ちゃんは……」

「鳳翔さん。ココに居る睦を見てホントに何も感じない？」

「……ひよつとして……睦月型の睦月ちゃん、ですか？」

「正解。」

「えっ？　なんで？」

「ん、舞鶴を去るとなつたとき、睦月に泣かれたんだよ……。嫌だ、嫌だ！　司令官と離れ離れになるのは嫌だ、一緒に行く!!」つて、大泣きの大騒ぎでさ。」

「にひひひ、だつて、嫌なものは嫌なの!」

「散々、説得はしたんだけど、こいつの意志は変わらなかつたんだ。ただ、艦娘をその

まま連れて行くことが出来ないから、解体をさせて、人間として睦月を引き取つたのさ。

で、俺が父親、睦月を娘としてね。で、その時に名前を“むつき”から“むつみ

”に変えたんだよ。」

「なので、司令官を独り占めにやしいい!!」といつて腕にしがみついてきた。

そんな睦の頭を秦は撫でている。

「実際、艦隊における睦月型の影響は小さくは無いが、大きくもないから、申請したら

あつさり認められたんだよ。」

「そ、そんなことがあつたなんて、聞いたことがありません……」

「まあ、そうだろうなあ。俺は、飛ばされた方、だからな。記録も残つちやいないだろ。」

はあ、と鳳翔も呆れている。

(ま、無理もないけどね。)

「ここで鳳翔がハツとする。」

「じ、じゃあ、今の舞鶴鎮守府って……」

「ああ、君が言っていた噂の鎮守府では、既に無い。恥ずかしながら、その噂が出ていたのは知っているよ。俺の在任中の事だね。俺の後任の提督が来たらしいが、いい評判は聞かないね。」

「そんな……私は……どうすれば……」

ううっ うううっ と声を出しながら、両手で顔を覆い、泣き出してしまった。

外の雨音をかき消すくらいの嗚咽であった。

「鳳翔さん、そんなに泣かないで。司令官が、ううん、父さんが力になってくれるよ。」

睦が鳳翔の頭を撫でている。

鳳翔の涙は止まらなかつた。

いや、止めるつもりも無かったのかもしれない。

自分の行先が無くなったことの絶望、帰るところのない絶望に打ちひしがれて……。
秦は、鳳翔を泣くに任せた。

「睦、こつちにおいで。鳳翔さんを一人にしてやろう。」そう言つて。

「鳳翔さん、かわいそうだよ。何とかならない、父さん？」

「うん・・なかなか難しいなあ。彼女はまだ艦娘だから、引受先を見つけないといけな
いし、見つかつても今の呉みたいなところじゃだめだろうし・・。」

「お願い！ 父さん。」

「・・分かつたよ。何とか考えてみよう。ただし、どうなるかは、神のみぞ知る、だ
ぞ。」

「うん！ やつぱり司令官なのです!!」

「父さんじゃないのか？」

「へへへへえ。」

と言つて秦の胸に飛び込んでいった。

「やつぱり、頼りになるのです！ だから、大好きい！」

秦は睦の頭をずっと撫でてやった。

鳳翔の泣くに任せていたが、しばらくして泣き声がしなくなった。秦がそうつと覗くと、泣き疲れて寝入ってしまったようだった。

「睦、掛け布団を取ってきてくれる？」

睦に掛け布団を取ってきてもらい、鳳翔にかけてやった。

私の提督

外の雨は、まだ降り続いていたが、若干、小雨になつてきたようだった。

秦は考えていた。

このまま鳳翔をMPに突きだすのは簡単だ。

脱走艦を見つけたと言えればいいだけだ。ただ・・・

そう。ただ、秦はそれを良しとはしなかった。

(損な性分だなあ。)

と思いつながら代案を探す。

鳳翔が抜けだしてきた理由からしても、今の呉鎮守府には返せないし、行くつもりだった舞鶴鎮守府もいい環境とは言えないので、行けない。

鳳翔が艦娘を辞める、というなら横須賀の元上官に頼み込めば何とかなるかもしれない。

ただ、それでも、解体後の生活支援に問題が残る。

何しろ、まだまだ戦時中であるため、解体する事なんて想定されていないから、何の保証もないのだ。

(ま、生活の保障なら、俺が保証人になればいいか?)

呉、舞鶴以外の鎮守府への転属なら、可能性としては一番高いのかもしれない。(とにかく、本人に聞いてみるしかないね。まずは、そこからか。)

時刻は午後1時を過ぎていた。

「父さん、お腹すいた。」

「おお! そうか、そんな時間か! お昼にしよう。」

メニニューは何にしようか……

「睦、何がいい?」

「うんとね、睦、ラーメンがいい。」

「ラーメンでいいの?」

「うん。たまには。」

「ほいきた。じゃ、白くまにしよう。」

「あたし、鳳翔さんを見てくるね。」

「ああ。起こしてきてくれる?」

部屋を覗いた睦が声を掛ける。

「鳳翔さん? お昼にしよう。」

目が赤く腫れ上がっていたが、「ええ。ありがとう。」と喋って台所へ睦と一緒にやつ

てきた。

白くまは、某百貨店でやっていた北海道展で売ってたヤツだ。

麺を湯がき、どんぶりに盛る。

そこにスープを入れて完成となるが、煎り胡麻、刻んだ青ネギ、茹でたまやしをトッピングした。

「さあ、出来たぞ。 食べよう。」

「いただきます。」

麺を啜る音が響いていた。

睦はフーフーしながら美味しそうにほおぼっている。

鳳翔はラーメンの熱さなのか泣いていたのか、分からないほど汗をかいていた。

白いスープがちよつと味が濃いかつたが、その辺はご愛嬌だ。

三人とも完食してしまった。

「「ちそうさま。」」

器を片付けて冷えたお茶を飲んでいた。

秦がおもむろに話し出す。

「鳳翔さん、今後についてだけど、いくつか確認したいんだけど、いいかな。」

「確認ですか？」

「まず、今の、呉鎮守府には帰るつもりは無い、ね？」

「はい。」

「つぎ、舞鶴鎮守府だけど、君の噂通りではないけど、それでも舞鶴へ行きたい？」

「それは……秦さんが……提督の時ならば、行ってもいいと思いましたが……今は……」

「あんまり、行きたいとは思わない、かな？」

「は……い……」

「では、つぎ。 今後も艦娘として戦場に出たい？」

「えっ？ そ、そ、それは……」

「言い方を変えようか、艦娘として今後も居たいかな？」

「お料理をするのは、大好きですけど、戦場へは……小型旧式の軽空母では、あまりお役に立てないと思います。」

「んー、はつきり言った方がいいかな？ 今後も艦娘として生きたいか、人間として生き

たいか、と聞かれたら？」

「……そこまで考えた事ありません……」

「まあ、そうだろうね。」

「最後、呉と舞鶴以外なら、転属しても構わない?」

「そうですね。今の呉や舞鶴より良ければ、ですけど。」

「その場所が、ココでも構わない?」

「え?! ここ、ですか? どういう事ですか?」

「父さん、どういう事?」

「これは、超法規的な対策なんだけど……ハードルは高いんだけど、正式に俺が君を預かるって案なんだけど。」

「は、はあ……」

「鳳翔さんがここに居れるの?」

「ハードルは高いけど、一応、横須賀の元上官に許可を取らないといけないんだけどね。」

「それは……有りがたいかも……です。」

「んー、分かった。ありがとう。」

「でも、それってどうするの? 父さん、予備役でしょ?」

「うん。おそらく、現役復帰を条件にされると思うよ、たぶん。あの人がいそうないとだからね。」

(辞める時も、散々、説得されたからなあ。)

「あの人?」

「俺の元上官で、提督を辞める時に、散々説得してきた、横須賀にいる中将なんだけどね。」

秦にとつては、やりづらい相手であった。

(ま、こうなることは予想してたけどさ……)

そして、話は変わる。

「鳳翔さん、とりあえず、服とか揃えないといけないから、今から買い物に行くよ。いい？」

「えっ？ いえ、そんな、あの、着物があればそれでいいのです……」

「だめ!!」

「はい?」

「んんっ。悪いとは思ったけど、着物を脱がす時に思ったんだけど、ちゃんと下着と肌着を着けないと、あかんよ? いつまでも湯文字だけで過ごすつもり? サラシでいるつもり?」

「ええ? そ、それは……それ以外、持っていませんので……」

俯いてしまった鳳翔だが、顔が赤いのは見て取れる。

「じゃ、揃えよう。今、外の雨は小降りだからさ。車で行けばいいだろう?」

「でも、私、持ち合わせがありません．．．．」
「いいよ。俺が出すから。」

という事で三人で買い物に出かける事となった。

やってきたのは、秦の街にある、中規模のショッピングセンターだった。

ここは駅前ではなく、街外れのただっ広い土地に10年ほど前に作られた建物だった。

ショッピングセンターに着くと、まずは鳳翔の下着だ。

さすがに男が女性の下着売り場で、あーでもない、こーでもないと物色するのは、はずい。

めっちゃはずい．．．。

なので、店員に話をして、鳳翔に選んでもらった。

色は．．．．

サイズは．．．．

と。

かれこれ30分は経っただろうか。

下着のセットを5つほど購入してきた。

「すみません、いろいろな色があつて、いろいろ悩んじゃつて。」

にこやかにほほ笑みながら戻ってきた。
頬を赤めながら。

(うん、睦もそうだけど、女の子は笑顔が一番だね。)

次は服だ。

和の雰囲気のある鳳翔が洋服？とも思ったが、着物をたくさん揃える事が出来ないの
で、洋服で我慢してもらおう。

やはり、着物と同じような色使いになった。

桜色のサマーセーターに紺のスカート……。

「悪く無いんだけど…… いろんな服を選んでみようか？」

睦に、いろいろと似合いそうな服を選んでもらった。

白のワンピースだったり、花柄プリントのスカートだったり……。

試着コーナーで、鳳翔が着せ替え人形と化していた。

かなりの時間を要したが、どうにか1週間分の服を買いそろえる事ができた。

「すみません、こういうお店には来たことがないので、迷ってしまって……。」

俯き加減で鳳翔が出てきた。

先に選んだ桜色のサマーセーターと紺のスカート姿で。

どうやら、買ってそのまま着てきたらしい。

「大丈夫だよ。鳳翔さんに似合いそうな服を選んだから。」
と睦が言う。

エツヘン、と聞こえそうなくらい自信満々に。

秦はちよつぴり心配になった。

(子供っぽい服を選んだんじゃないだろうな。)と。

最後に、食料品売り場である。

1週間分のまとめ買いだ。

牛肉、豚肉、葉物野菜、根菜類などなど、他に生活用品を買い揃え、店内のフードコートで小休止することにした。

「やあ、疲れたあ。」

疲れたとは言え、三人の顔はにこやかだった。

「ふふつ。お疲れ様です。提督。」

「へ？ 提督？」

「はい。私、決めました。秦さんの元で働きます、いえ、働きたいです。なので、私の提督」です。」

「じゃ、鳳翔さん、ウチに居るの？ 父さん？」

睦が秦に向く。

「はい。そのつもりです。 今後はどうなるか、分かりませんが、提督にはご迷惑をお掛けいたします。ですから……」

「元上官を説得して来いってことだな？」

「お手数をお掛けいたしますが……だめ、でしょうか。」

鳳翔の目が、ジーツと秦を見つめる。

秦が思いつきり、ハアアとため息をついた。

「分かったよ。 努力してみよう。」

「あ、ありがとうございます！」

「やったあ！ 鳳翔さんがウチに来るう!!」

睦が鳳翔に抱き着いた。

二人の顔に笑みが広がっていく。

「なんだあ、睦？ 鳳翔さんに居て欲しかったのか？」

「へへへっ。」

と舌を出しながら笑う。

「まったく、もう……。 呆れてモノも言えんわ。」

それを見た鳳翔が、ふふふと笑った。

秦と鳳翔はコーヒーを、睦はオレンジジュースを飲みながらしばし談笑するのだっ

睦の気持ち

夕刻になっても雨と風は止まなかった。

まだ暴風警報と大雨洪水警報が絶賛発令中だったが、梅雨前線がやや北に移動し始めたらしく、風は強かったが小雨になっていた。

秦の家では遅い夕食の準備が始まっていた。

台所に立つのは、秦ではなく、鳳翔であった。

「炊事・家事全般は私がしますので。」

と言って、炊事を始めたのだ。

もちろん、買ってきた割烹着を着て。

「いつの間に、割烹着なんて買ったんだ？」

と呟く秦を横目に炊事を進めていた。

その姿を睦がキラキラした目で見ていた。

「今日は遅いので、フライパンで出来る肉じゃがにしましょう。睦ちゃんは好き嫌いはあるの？」

「うーん、あんまりないかなあ。あ、ピーマンは避けて欲しいかもにや？」

「ピーマンね。じゃ、ピーマンを使った料理を一品作るわね。」

「ほよ？ ピーマンを入れるの？」

ちよつと驚いて答えるが、

「ええ。美味しく食べられるようにしますからね。」

とにこやかに答えている。

そんな会話が台所でされている頃、秦は「あの人」へ直接連絡をしていた。

携帯電話から呼び出し音が聞こえる。

しばらくして相手がでた。

「もしもし。楠木です。秋吉中将でしょうか？」

「おう。楠木か？ 久しぶりだな。貴様が連絡してくるなんてめずらしい事もある

もんだ。しかも携帯電話に。」

「お久しぶりです。中将。お元氣そうで何よりです。急なお電話で申し訳ないので

すが、実は折り返ってご相談したいことがあります、ご連絡した次第です。」

「相談？ なんだあ、復帰する気になったのか？ それなら今でもいいぞ？」

「いえ、復帰する気はありませんよ、中将。あの一件で十分凝りましたから。」

「そうか。残念だな。ま、復帰する気があるならいつでも言つて来い。で、復帰じゃ

「ないとする？」

「詳細は直接会ってお話したいと思えますので、週明けの月曜か火曜にお時間を頂きたいのですが。」

「なんだ、そんなに真剣な話なのか？」

「はい。ちよつと込み入った内容なので。お願いできませんでしょうか？」

「ちよつと待て。」

電話口でパラパラと手帳を捲っているような音が聞こえてきた。

「楠木？ 週明けだと、月曜の午後いっぱいとは火曜の午後の早めなら空いてるぞ。」

「では、月曜の午後にお邪魔させて頂きます。私を含めて三人でお邪魔致します。」

「わかった。開けておこう。」

「場所は、中将の執務室でよろしいでしょうか。」

「ああ。横須賀のワシの執務室だ。門番と秘書艦には伝えておくよ。」

「それでは、よろしくお願いたします。では、失礼いたします。」

「ああ、待ってるぞ。じゃあな。」

と電話が切れた。

ふう——と溜息をついた。

電話を終えリビングに入るとキッチンテーブルには肉じゃががテーブルの上に居座っていた。

「父さん、ご飯で来たよ?」

「提督、ご飯にしましょう?」

肉じゃがにサラダ、小鉢が並んでいた。

小鉢の中に、緑色のピーマン料理が一品、あった。

秦が作っていたころより、色彩が、豊かだった。

「おお! すごいな。」

「鳳翔さんが作ったんだよ。美味しそうですね。」

「ありがとう。鳳翔さん。でも、無理はしないでよ。」

「はい。大丈夫ですから。それに、睦ちゃんの好き嫌いを克服することも考えます

から。」

そう言つて三人はテーブルについた。

鳳翔がご飯をよそつてくれる。

「ん? その茶碗は?」

見慣れない、桜の絵が描いてある茶碗が目に入った。

「これですか? 今日、買ってきました、私用のお茶碗です。

いけませんでしょうか

？」

「いや、そうじゃないよ。見慣れない模様があるなあ、とね。」

「父さん、鳳翔さんの分は無かったんだからね。」

「そういや、そうだったな。ごめんごめん。」

三人で笑いあう。

「なんか、いいな。こういうの。」

「はい。皆で食べるご飯は、美味しくなりますから。」

ふふふつと笑って鳳翔が言う。

(ホントに、なんか、感じがいい。)

「「いただきます。」」

三人での夕食は、それは楽しい時間であった。

鳳翔の扱いが決まっていなくてもかわらず、その存在は既に、楠木家に以前から居たように見える。

「美味しいね。」

「うん、俺より美味しい。悔しいかな、さすが鳳翔さんだ。」

「ふふふ、お気に召したようで、嬉しいです。」

睦が、がつついて食べている。

「こら、睦。行儀よく食べなさい。」

「そうよ、睦ちゃん。レディなんですからね？」

「ぶー、二人して怒らなくてもいいじゃん!!」

はははつと笑いあう。

「父さんと鳳翔さん、とつくに仲がいいんだね。あたし、期待しちゃうなあ。」

んんんつ、と秦が咳払いをするが、秦と鳳翔の二人の視線が合い、頬がほんのり赤く
なつた。

「睦!」「睦ちゃん!」

二人が同時に声を上げた。

「うん、シンクロ率、ばっちりやね!」

と更に茶化す睦であつた。

夕食を食べ終え、後片付けも終えて、三人が寛いでいたとき、秦が話を始めた。

「早速だけど、昼間に言つてた、鳳翔さんの処遇なんだけど、月曜日に横須賀の元上官に
逢いに行くことにしたから。二人ともそのつもりだね。」

「え? 父さんだけで行くの?」

「違うよ。三人で行くんだよ。」

「三人で?」

「うん。睦は久しぶりだろ? 秋吉中将に逢うの。それに、鳳翔さん本人に喋ってもらった方が説得力を持ちそうだからね。」

「大丈夫、でしょうか?」

「たぶん、大丈夫だよ。だから、月曜日は朝から横須賀へ行くから。」

「あたしは、学校は? お休みするの?」

「そうだよ。俺から学校には連絡を入れておくからさ。向こうでどれくらい時間が掛かるか分からんから、2日間、休むことになるけどね。」

「父さんの仕事は?」

「はははっ。俺の仕事は、沿岸警備隊の事務方だから、多少の無理は効くさ。大丈夫だよ。いいね、鳳翔さん?」

「はい。私に異存はありません。提督の指示に従うだけです。よろしく願います。」

「じゃ、決まりだ。」

そのあと、三人は順番にお風呂に入った。

鳳翔に一部屋を譲り、秦は布団に入って寝ようとしたが、睦が来ない。

「あれ? 睦? どこだ?」

鳳翔の部屋に行つてみると、中から二人の声がする。

「入るぞ」

と声を掛けて扉を開けると、鳳翔と睦が一つ布団の中に居た。

「なんだ？ 睦はここに居たのか。 鳳翔さんと一緒に寝るのか？」

「うん。今日は鳳翔さんと寝る。」

「鳳翔さん、いいかい？」

「はい。私は構いませんよ。」

「じゃあ、よろしく。 睦、鳳翔さんに迷惑かけるんじゃないぞ。 いいね。」

そういつて扉を閉めた。

(まったく、睦のヤツ。)

秦は一人寂しく寝入った。

その頃、睦と鳳翔は、布団の中で話し込んでいた。

「へへ。 鳳翔さん、あつたかい。」

「そう？ 睦ちゃんもあたたかいわよ。」

そう言つて二人で抱き合っている。

そこに鳳翔が睦に聞きたいことがあると言ひ出した。

「睦ちゃん、聞いてもいいかしら？　なんで提督について行くこうとしたの？」

「うん？　えつとね……」

声小さくなりながらも、経緯を話し始めた。

「舞鶴に居た時、司令官が初めて来たとき、門の前で偶然、合ったの。父さん、あの通り若白髪でしょ？　ちよつと年寄に見えたんだよね。だから、ちよつと怖かったの。」

でも、初めて目が合った時、よろしくって言って、頭を撫でてくれたの。びつくりしたけど、その時の目が優しくって、撫でてくれた手もごわごわしてたけど、暖かかったの。その時からかな。この人いい人なんじゃないかなって思ったの。そばに居てもいいかもって思ったの。

その時は……ほら、睦月型って旧式で装備も旧式でしょ？　出撃してもすぐ被弾してしまうの。被弾と入渠との繰り返しで、練度も上がらなかったから、必要なのになって思ってた時だったのね。

でも、司令官は違ったの。装備品も近代化してくれて、機関や船体の改造までしてくれて……。

いつだったか、なんでそんなことするのかなって聞いたの。

そしたら……俺の仕事は、皆を沈ませないようにすることだから”って言うの。”
ありったけの資材、技術をつぎ込んででも、誰一人沈ませたくないから。その為には上

に嘯みつくことも厭わないよ。”って。

なんか、嬉しくなって、その時、司令官に抱き着いちゃったの。それから、この司令官の為に頑張ろうって。

結局、皆司令官の事、好きだったみたいだけど。

でも……

大本営？との間でいさかいが起こって、司令官が一方的に悪者にされちゃって。

舞鶴のみんなは司令官が悪くない事は知っていたし、分かっていたんだけど、話が拗れちゃって、そのうち司令官が更迭されるって話になったの。

司令官は、自分が辞めるから全て水に流してくれて上に掛け合つたの。全然悪くないのに、辞めさせられるなんて酷いって……」

睦の目には涙が溢れそうだった。

「でね、司令官が辞めるって分かったとき、お願いしたの。一緒に行くって。

だって、いつでも優しく、暖かくて。時に厳しいけど、そんな司令官が好きだったし。

だから一緒に行くって。」

涙を拭きながら続けた。

「鎮守府の外にでるから、艦娘ではいられないって言われた時、すぐに解体を選んだの。

そしたら司令官と一緒に居られると思って。」

睦の目が鳳翔を見つめた。

「でも、後悔してないよ。学校も楽しいし、大好きな司令官、ううん、父さんと一緒に居れるし。」

睦月の顔は晴れやかだった。

鳳翔は睦を抱きしめながら・・・

「そう、そうだったの。辛かったのね。でも、いい司令官に出会えたのね。」

私にも分かるわ。この人だったら、この人の元だったら働けるって、頑張ろうって思うもの。」

「じゃ、鳳翔さんも同じだね。」

「そうね。」

ふふふっと二人で笑いあった。

そして夜は更けていく。

次の日、今日も朝から雨が降っている。

小雨だ。風はおさまっているようだ。

風切り音がしないので強くは無いのだろう。

天気予報では午後には雨が止むだろう、とのことだった。

この家の三人は既に朝食を済ませている。

秦は居間でテレビを見ていた。

朝食の用意と後片付けは、もう鳳翔がしていた。

「提督、これからは、私がやりますから。」と。

後片付けが終わると、洗濯だった。

一昨日から洗濯物が溜まったままだったのだ。

手際よく洗濯機と乾燥機を使って進めていく。

その鳳翔の姿を秦は見ていた。

「良く働くねえ。いつの間に使い方を覚えたんだか……」

半ばあきらめに似た眩きをしていた。

はつきり言って、秦は手持無沙汰なのだ。

今までは自分がやっていた家事を全部、鳳翔に取られたのだ。

(ゆっくりできるのは、いいんだけど、落ち着かねえ……)

鳳翔は鼻歌を歌うかのようににこやかに楽しそうにしている。

それを睦が見ている。

鳳翔に付き添って、ついて回っている。

まるで母娘のように。

(これは・・・家事だけじゃなく、睦も取られたみたいだよなあ・・・)

秦は、疎外感たつぷりで、テレビを見ているしかなかったのだ。

そして、昼食を終えてやつと三人で寛いでいた。

「俺のやることかなーんにもないなあ・・・」

と呟くと、

「いいえ。 ありますよ、提督。」

と言って、鳳翔が秦の隣に座ってきた。

そして秦に寄りかかって、頭を秦の肩に載せる。

「こうして頂くだけで、嬉しいんです。 安心します。」と。

「そうなのかな? 頼られるのはうれしいけど、睦まで取られた感じがするんだけど。」

「そんなことないよ、父さん。」

と睦が言つて秦の膝の上に載ってきた。

「にひひひひ。」

「ふふふ。」

と二人が笑っている。

「なんだあ、俺は二人の抱き枕か? ったく。」

（満更ではないな、この状況は。）

と思ったりした。

秦は、鳳翔と睦の二人の頭を撫でた。

（甘えん坊な二人だ。まったく。）

鳳翔の処遇

明けて月曜日。

今日は朝からお出掛けである。

しかも三人で、横須賀まで。

今日の天気は、曇りではあるが、雨は降っていないかった。

目的は、鳳翔の処遇の決定であるが、これは、秦に頼るしかない睦と鳳翔である。

早朝に家を出て長距離列車で横浜へ向かい、横須賀への列車に乗り換えるのだ。

朝食は家で済ませたが、昼食は列車の中で駅弁を食べた。

旅行中での駅弁は、楽しみの一つだが、これから難問が待ち構えているかと思うと、ご

飯が喉を通らない。

交渉が長くなるかもしれないと考え、無理やりにも飲み込んだ。

そして横須賀駅に到着後、車を手配して、横須賀鎮守府に向かった。

横須賀鎮守府の正門まで来たとき、ちょうど午後1時になっていた。

秦は軍服を着ているので、怪しまれることは無かったが、付き添いの二人を怪訝そう

に門番に見られていた。

門番に取り次ぐよう話をする、既に話を通っていたらしく、すぐ通してくれた。鎮守府の建物に入って、秋吉中将の執務室に向かった。

執務室に到着し、扉を叩くと中から、どうぞ、と声が掛かった。

「失礼いたします。楠木予備役大佐他2名、参りました。」

「楠木予備役大佐ですね？　こちらへどうぞ。」

と秘書艦の女性が声を掛けてくれた。

秋吉は正面の机に居た。

その前まで進み、

「お手数をお掛けいたします。楠木予備役大佐他2名参りました。同行は、娘の睦

と、呉鎮守府の鳳翔であります。」

「おお、来たか。待ちわびたぞ。まあ、楽にしてくれ。」

と、いつてソファアへ座るよう、案内された。

「紹介しておこう。ワシの秘書艦の、赤城だ。」

「大佐、よろしくお願ひいたしますね。」

「赤城ちゃん……」

と鳳翔が思わず声を発した。

「鳳翔さん、おひさしぶりですね。」

赤城が懐かしそうに答える。

「そう、横須賀に居たのね。元氣してるの？」

「はい。元氣モリモリ、ご飯もモリモリです。」

につこりと微笑みながら答えた。

「久しぶりだな、睦月も。いや、今は睦ちゃんだったな。」

「はい。中将さんもお元氣そうです。」

にこやかに挨拶が済んだところで秋吉が口を開いた。

「で。話と言うのは何だ？ 三人で来たという事は、どういう事だ？」

「はい。睦を連れてきたのは、久しぶりに中将にあわせてやりたかったから、です。

が、本論は、この鳳翔の事です。実は……」

秦は鳳翔が呉鎮守府で受けた事から順に話を始め、今、自分のところに身を寄せている事までを話した。

「……という事でして、本日お願いに伺ったのは、この鳳翔の所属を、監督権を私に頂きたいと思ひまして伺った次第です。」

秘書艦の赤城は手を口に当てて驚いていたが、秋吉は頭を掻いていた。

「う——ん、言いたいことは分かった。だが……」

と言つて一枚の紙を秦に見せた。

「これは？」

「読んでみろ。」

「宛：各鎮守府、発：呉鎮守府　本日未明、呉鎮守府より、空母鳳翔が精神に異常を来たし脱走。各鎮守府は発見次第、処分されたし。」

「な！　なんですか、これは!!」

秦は驚いて声を上げた。

「鳳翔を連れてきたのが、貴様でなければ処分していたよ。」

「そんなん!!」

「まあ、怒るな。貴様の話を聞く限りにおいては、この要請文も怪しくなるのだがな。鳳翔。楠木が言ったことは本当なのかね。君の返事如何によつては対応する内容が大きく左右されるのだが。」

秋吉の目が鳳翔を睨み付けていた。

「はい。間違いありません。本当の事です。」

「鎮守府でのやり方、運営は、その在地の提督に一任されているのは、知っているな。その範疇だ、と言われてしまえばそれまでなんだが、大前提として、提督は艦娘のよき理解者で有れねばならぬ、という不文律がある。本事案はそれを逸脱している、とも言えるな。」

秦は秋吉をくつと見つめて、

「では、どのように致しましょうか。」
と詰め寄る。

「二つの案として、要請文のとおり、ここで鳳翔を処分する。そしてその報告を流す。」
「それでは……!!」

秦が声を荒げる。

「ま、最後まで聞け。そしてここ横須賀で新たな鳳翔が誕生する、という事にする。

そして、貴様を現役復帰させ、そのもとに転属させる。何にしろ、現役の艦娘を予備役の人間に預ける事などできんからな。

二つ目の案は、貴様の案にもあつたが、ここで解体して、処分したと報告する。人間となつた鳳翔の保証人を貴様に任せる。という事だ。

全てはここ横須賀鎮守府内での出来事だ。ちよつとやそつとでは、分かるまいて。」
と二つの案を出してきた。

「結局は、貴様の元に鳳翔を置くことになる。それはそれでいいんだろ？ 鳳翔。」

「はい。」

「では、どちらか、だが……」

鳳翔が意を決して答える。

「・・・では、解体を、お願いいたします。」

「ん、なんだ？ 決めていたのか？」

「はい。提督に、楠木大佐にお会いして、お話を聞いて、決めていました。 解体、と。」

「理由を聞いていいかね？」

「はい。 理由は・・・睦ちゃんです。 元艦娘の睦ちゃんが、ここまで明るく、楽しそ

うに話、暮らしているのをみて、私は、何にこだわっていたんだらうって考えたんです。

艦娘では幸せになれない、なんてことは無いんだと、認識したからです。 だか

ら・・・楠木大佐の元に居れるのなら、解体してもいい、と。」

「そうか。 分かった。 その手続きを進めよう。」

「ありがとうございます。」

鳳翔が深々と頭を下げた。

「ところで、楠木。」

「はい？」

「やはり、貴様は艦娘殺しだな。 その辺は、昔のままだな。」

がはははははと大きな声で笑っていた。

ひと笑いした秋吉が真剣な目をして言い放つ。

「だが、この要請文の内容に疑義があることが分かった。 このままにしておくことはで

きん。早急に呉の内部調査を行い、運営を元に戻さねばならぬ。ワシはここを動くことが出来ん。」

秋吉が秦をじろつと見る。

秦は、いやあ—な予感がした。

「中将の次の言葉は、聞きたくないのですが……」

「お、察しがいいな。その通り、貴様を呉に送るんだ、提督としてな。」

(やつぱり……)

「中将、それは、ご勘弁を。」

「ん？ 貴様に拒否権があると思っているのか？ このワシをタダで働かせる気か？」

ん？」

秋吉は勝ち誇った顔で秦を見ていた。

秦は……

「分かりました。そういう事なら、致し方ありませんね。謹んでお受けいたしま

す。」

諦めるしかなかった。

「そうと決まれば、呉の方はワシが手配する。で、鳳翔の解体は、なしだ。」

「はっ。」

秦と鳳翔は狐に抓まれたような顔をしている。

「鎮守府に行くのに人間だけでは心もとないからな。呉に行つてから貴様が解体をしろ。それでもいいだろ？」 鳳翔？」

「はい。構いません！」

パツとにこやかな顔で答えた。

「だったら、初めの案というのは……」

「結局、一案になるな。悪く思うなよ。貴様の話を聞いてから考え直したんだからな。」

執務室には秋吉の高笑いの声が響いていた。

赤城も含めて四人は、呆れて声も出なかった。

秦はがつくしと肩を落とし、鳳翔は秦の元に居れることになったことで嬉しそうに笑っていた。

睦も鳳翔がウチに来る？ことになって嬉しそうだった。

気がつけば既に外は暗く、日も落ちていたため、三人は横須賀鎮守府に泊まることになった。

夕食は、横須賀の間宮食堂で摂った。

当然、周りは横須賀の艦娘ばかりであった。

「誰？」

という視線は痛いほど刺さってくる。

舞鶴でも呉でも食堂があつたが、こうまでも痛い視線のなかでの食事はなかなか体験できないものであつた。

秦が耐え切れなくなり、

「えゝつと、秋吉中将の、昔の部下だつた、楠木です。今日は所要でこちらにお邪魔して
るよ。よろしく。」

と挨拶？をした。

「こつちは娘の睦。こつちが鳳翔さん。二人もよろしくね。」

睦と鳳翔は会釈をした。

鳳翔は、横須賀の空母娘と顔見知りだつたこともあつて、こちらの艦娘と談笑して
た。

夕食を終え、三人はお風呂に入ることにした。

お風呂は、提督用を借りた。

「じゃあ、お先に頂くよ。」

と言って秦が先にお風呂に入った。

「ふう。気持ちいい——」

ガラッ！ と勢いよく扉が開き、睦が入ってきた。

「ワァーい！ 久しぶりにおつきなお風呂だ。」

「な！ お前も来たのか？ ったく、はしやぎ過ぎだぞ。睦。」
と注意する。

が、次に、ガラリとゆっくりと扉が開いた。

鳳翔だった。

タオルで身体を隠して……

「お邪魔しますね。提督……。」

えっ、と秦の視線が入ってくる鳳翔へ向かった。

「やだ…… 提督…… あんまり、見ないで、ください…… 恥ずか、しいです、から……。」

と顔が赤くなっていく。

「あ、ああ、ごめん。向こうを向いるよ。」

秦の顔も赤くなっていく。

その二人を睦が冷めた目で見ている。

(もう、この二人は……)

「鳳翔さんは艦娘用のお風呂を使っても良かったんだけど……。」

「いえ、損傷している訳ではありませんので、大丈夫です。」

湯船の中で、鳳翔も睦も、秦に寄り添い、それぞれ片腕に抱き着いてきた。

秦の腕に睦の、膨らみ始めた胸があたる・・・

一方の腕には鳳翔の、大きくは無いが張りのある胸があたっていた。

(この感覚は、なんとも言えんなあ・・・)

「こんな時間、そうあるものじゃありませんから・・・ こうしているだけでも、安心します。」

「あたしもだよ。」

二人はしっかりと抱き着いていた。

秦は二人のだっこちゃん人形と化した。

入浴後、三人は、艦娘用の四人部屋を借りた。

艦娘用とは言え、一部屋に三人で寝るのは初めてであった。

ベットに入りながら今日の出来事を振り返っていた。

「呉が、あんなにも早く鳳翔さんの処分の連絡を入れていたなんて、思わなかったよ。」

「私も驚いています。 そんなに悪いことをしたんでしょうか?」

「呉提督の癪に触っただけ、のような気もするけど・・・」

「それで処分って、ないんじゃない? ひどいよ、それ?」

「そうだよなあ」

「でも・・・ 鳳翔さん、ウチに来たのが良かったんじゃない？ ね、父さん？」

「それは、これから次第だなあ。 とりあえずはつてところかな。」

「私はよかつたと思います。 提督に出会えて。 何の異存もありませんから。」

鳳翔はそう言ってくれる。

しばらく三人で話し込んでいたが、昼間の緊張感と虚脱感の影響からか、すぐに寝入ってしまった。

翌日、朝食を済ませ、執務室の秋吉に挨拶に赴いた。

「おはようございます。 中将。 昨日はありがとうございました。 これより戻りま

す。」

「おお。 お疲れさん。 鳳翔の件はこちらでやっておく。 呉の方はまだ時間が掛かる

から、別命あるまで現状でな。 それから貴様の復帰については今日、申請しておくか

らな。」

「お手数をお掛けいたします。 それでは失礼します。」

と言つて三人は執務室を後にし、帰宅の途に就いた。

帰りの列車の中で睦と鳳翔が秦と向い合せに座っていた。

睦が秦に聞いた。

「父さん、これで良かったの？」

「うーん、どうだろう。 鳳翔さんが俺の元に居る、と言う点からすれば、良かったんだろうけど……」

「はい。私としては、良かったと。 ただ、提督が、無理やり呉の後始末をさせられそうなのが、申し訳ないのですが……」

「そうなんだよねえ…… 結局、中将の思惑に嵌った、と言った方がいいんだろなあ。 そうすると、ちよつと悔しい気もするが。」

「あたし的には、OKです!!」

睦が元気よく、返事をする。

「私も、私的には、OKですよ。」

と鳳翔も答える。

二人してOKという。

「あく、二人して俺をいじめる気だなあ。 くつそお。」

いじめてみせる秦である。

「ふふふ。 提督。 不束者ですが、末永く、よろしく願いますね。」

「ああ、こちらこそ、末永く、よろしくね。」

(ん？ 父さんと鳳翔さん、二人とも末永く？)

秦と鳳翔の視線が合う。

二人の頬がほんのりと赤くなつたのを睦は見逃さなかつた。

三人が家に着くころには、空は晴れ、綺麗な夕焼けになっていた。

楠木家の一日（前編）

今日は平日だ。晴天の1日になりそうだった。

秦はいつものように、朝5時半には起き出してきた。

そしていつもの、朝の日課を始める。

そう。朝食と、睦と秦のお弁当作りだ。

秦が顔を洗って台所に向かうと・・・

朝食は・・・既に大方の準備が出来ていた。

秦よりも早起きな家人が一人いたのだ。

鳳翔だった。

「あ、おはようさん、鳳翔さん。」

「おはようございます、提督。」

「早いねえ。つてか、もう朝食の用意が・・・」

「はい。もう少しでできますから。」

朝から鳳翔の笑顔が眩しい。

秦は、自分の頬がほんのりあったかくなるのを感じていた。

しばし割烹着姿の鳳翔に見とれていたが、ハツとして身支度を始めた。シャツを着、ズボンをはいて、ネクタイを結ぶ。

ここまでして再び台所へきた。

炊飯器から湯気が出ている。もう少しでご飯が炊けそうだ。

炊きあがるまでに、弁当箱を用意して、おかずを作る。

まずは、卵焼き。

舞鶴の頃に、卵焼きが得意な艦娘から教わっていた。

あまりにも「卵焼き、たべりゆ？」と言われ続けていたので、たまには作ってみたいと思ったのが最初だった。

作り方は、その後にアレンジをして、卵にだし醤油を加えている。

秦は、その方が好きだった。

卵焼き用フライパンに油を引いて、卵液を流しいれる。

卵から泡が出てきたら潰す。

ある程度固まりかけたらフライパンの奥に向けて巻いていく。

そして手前から更に卵液を追加する。

しばらく置いて、固まりかけたら巻いていく。

巻き切ったら形を整えて皿に置く。

それを何等分かに切り分けるのだ。

次に睦が好きな、タコさんウインナーだ。

赤ウインナーの半分くらいの位置で包丁を入れて足にする。

首にあたる位置で、包丁でクルリと1周の切れ込みを入れる。

そのウインナーをフライパンで炒めるのだ。

少々の塩を振って。

炒めると、足の部分が反り返ってタコの足の様に広がる。

1周の切れ込みが広がり、まさしく首の様に見える。

サラダはパスタサラダにした。

シエル型のパスタを茹でる。

茹でている間に、キュウリ、ニンジンを細かく切り刻んで、マヨネーズと和える。

そこに茹で上がったパスタの水けをきって投入し、塩を少々して混ぜる。

メインのお肉は、鶏肉にした。

鶏胸肉を塩、こしょうをふって一口大に切っておく。

そしてフライパンに油を引いて焼く。

まず、皮目から。パリッと焼けたら反対面を焼く。

中まで火が通ったら取り出しておく。

さあ、そこまでできたら盛り付けだ。

睦のお弁当は小さいながらも2段になっていて、下段はご飯。

炊きあがったご飯をよそう。

ご飯の隅に、保存してあったイカナゴの釘煮を添える。

上段はおかず。

卵焼きを入れ、卵焼きを背にしてタコさんウインナーを2匹立てて入れる。

仕切りを入れて、鶏肉を並べ、パスタサラダを入れる。

味付け用に、醤油さしを一ついれる。

最後にミニトマトを2つ添える。

これで完成だ。

そしてちよつと大きめのお弁当を一つとかなり大きいお弁当を一つ、計2個を追加で作った。

睦のお弁当は、ウサギさんの刺繍がしてある布に包む。

ちよつと大きめのお弁当は、白色の生地に桜の刺繍がしてある布に包む。

大きめのお弁当は、なぜか富士山の絵が描かれた布に包んだ。

「これでよし、と。」

「あれ、お弁当が3つですか？」

「うん。小さいのが睦の。一番大きいのが俺の。もう一つは鳳翔さんの。」

「え？ 私の方ですか？」

「そうだよ。2個作るのも、3個作るのも、変わらないからね。俺の・・・」

そこまで言つて言葉を飲み込んだ。

（愛情たっぷり弁当、なんて恥ずかしくていえるか。）

「ありがとうございます。私はずっと家に居ますのに。ご無理なさらなくてください。」

「はは、いいじゃない。これくらいさ。」

時計が6時を指していた。

「おっと、いかん。朝ご飯だ。」

「はい。ご用意できてます。」

と二人向かい合つて朝食を摂った。

二人向い合せに座る。時々目線が合う。合うたびに微笑みあう。

食後、後片付けは鳳翔に任せた。

時刻は6時半。

秦は睦を起こしにかかった。

妙に寝相がいい。

寝返りを打つたび、掛け布団を蹴飛ばして……と言う風には見えないくらい、寝相がいい。

「睦、朝だぞ」

これだけで起きたら全国の親は苦労しないだろう、と秦は思った。
当然、睦も起きる気配の“け”の字もない。

「お、き、ろ !!」

「あ、さ、だ、ぞ、!!」

それでも起きない。

まったくもって、絶賛爆睡中であった。

そして……

秦は布団の中に手を入れて……睦のわき腹をくすぐりだした。

(こちよこちよこちよこちよ……どうだ！)

「お、き、ろ !!」

睦の身体が、ビクツと反応し、次の瞬間、

「くう、わっ、わはははははは、や、やめてえ!!!」

秦はそれでもやめない。

「ほれほれほれ！ 起きろお!!」

「ひやははははっ、起きるっからっ、起きるから、やめてえええ！」

ひと笑いさせてから秦はくすぐるのを止めた。

「ほら、顔を洗っておいで。」

睦は息を切らしている。

「はあはあはあ、もう！ 毎朝毎朝くすぐって！ ちゃんと起きてるじゃん！！」

とぶんぶんと怒っている、が・・・

いつの間にか部屋の入口で二人のやりとりを見ていた鳳翔が笑っている。

「ふふふふふ、あはははははっ」

「は、恥ずかし!!」

と恥ずかしがる睦だったが・・・

「楽しい起こし方ですね。私もしましょうか。」

と鳳翔に言われ、余計に恥ずかしかった。

「ああ、睦を起こすのはこれが一番なんだ。次からは頼むよ、鳳翔さん。」

「はい。了解しました。」

と鳳翔が小さく敬礼をする。

秦と鳳翔は二人で笑いあっている。

睦は・・・

「ふ、二人ともいいわる!!」
と膨れていた。

洗面所から出てきた睦がテーブルについて、朝食を摂っている。

「はい、睦ちゃん、ご飯。」

とにこやかに鳳翔がお茶碗を睦に渡す。

「ん、ありがと。」

そう言ってお茶碗を受取り、ご飯を頬張る。

時間が7時を回り、身支度を終えた秦がダイニングに入ってきた。

「じゃあ、俺は行くから。睦、後頼むなってか、鳳翔さんが居るんだっけか。」

「はい。後の事はお任せください。睦ちゃんも送り出しておきますから。」

「そう? じゃあ、おねがい。んじゃ、行ってきます。」

「行つてらっしゃい。」

二人に言われて秦はちよつと嬉しくなった。

鞆とお弁当の手提げ袋を持って家を出た。

そして駅に向かって歩き出した。

残った睦と鳳翔。

「ごちそうさま。」

「睦ちゃんもそろそろ、お着替えね。」

「はああい。」

睦が部屋へ戻って、着替えてくる。

白の半袖ブラウスに、濃紺チエツク柄のミニスカート。ブラウス上に半袖の、薄手のピンク色のパーカーを羽織ってる。

赤いランドセルを居間に持ってきていた。

ランドセルの中は・・・筆箱、ノート、宿題のプリントなどなど。

教科書は学校に置きっぱなしである。

そして、お弁当。

しばらくして・・・

「む、つ、み、ちゃ、あ、ん！　い、く、よ、お、！」

と外から声がした。

睦の友達のようにだ。

「は、あ、い、！」

と睦が返事をする。

ランドセルを持って玄関を出ようとする。

その時、鳳翔も一緒に玄関に出た。

「睦ちゃん、忘れ物はない？ 大丈夫ね。行ってらっしゃい。」

「行ってきまあすつ!!」

と元気に、明るく、返事をして友達のところへ走って行った。

鳳翔は、睦が見えなくなるまで、小さく手を振っていた。

「お待たせ！」

「あれ？ 睦ちゃん、あの女の人は誰？」

「お姉さん？」

と質問されていた。

普段は、秦か、もしくは、見送りは無いのだから、みんな不思議な顔をしていた。

「ん？ あ、あの人は鳳翔さん。うーんとね、父さんのいい人。」

「いい人？」

「うん。あたしのお母さんになってほしい人なんだ。」

「へええ、そうなんだ。新しいお母さんか。」

「優しそうな人だね。」

へへへへと笑って返事をしていった。

そんな話をしながら、学校への道を歩いて行った。

こども達の会話では、既に外堀が埋まっている。
そんなことは秦も鳳翔も知る由もなかった。

楠木家の一日（後編）

この日、鳳翔のお昼ご飯は、秦が作ったお弁当だ。

2段のお弁当箱。

下段はご飯。上段はおかず。

急須にお茶葉を入れ、お湯を注いでしばらく待つ。

そして湯呑にお茶を注いでいく。

お茶を一口すすって、ふう、とため息を一つする。

（それでは、あの人の手作りお弁当、いただきますでしょうか。）

蓋を開けて、お箸を持って、

「いただきます。」と。

まずご飯を一口。

（ん。このご飯は冷えても美味しいですね。コシヒカリの様に甘いですが、ちょっと違うわね。）

次にイカナゴの釘煮を少し。

（甘辛く煮てありますね。山椒が効いていておいしいですね。）

卵焼き。

（あの人は言いませんでしたが、恐らく瑞鳳ちゃんから教わったようですね。でも、だし醤油ですか。ちよつと醤油が強いかもしれませんね。）

タコさんウインナー。

（懐かしいですね、これ。 うん、塩加減がいいですね。 あら、でも、これって、魚肉ウインナーですね。）

鶏肉。

（鶏の胸肉の塩焼きですね。ちよつと薄いかと思いましたが、冷えて堅くなることを考えれば、これくらいでいいのかもしれないですね。）

パスタサラダ。

（あら？　ちよつとマヨネーズが多いかしら。 あの人、マヨラーかしらね？）

そんなふうには味を確かめながら、秦の手作り弁当を食べていく鳳翔。

そして気がつくとお弁当箱は空っぽになっていた。

「ふう。ごちそうさまでした。美味しゅうございましたよ、提督。」

そういつてまたお茶を啜った。

（ふふつ。 呉でも誰かに作ってもらった事なんて無いのに。 こんなところで提督に作ってもらったご飯を、お弁当を食べるなんて思ってもみませんでしたね。）

(でも、お弁当を毎日、作っていたんですね、提督ったら。)

そう思うと心がホツとする感じがしていた。

お弁当箱を洗い、水切り台に置いて、縁側に座った。

(この縁側はいいですね。 風が抜けて気持ちいい……。)

この家の縁側は、南向きになっており、小さいながらも庭がある。

午前中に、家の掃除と洗濯を終えていた鳳翔は、しばしの休息を取っていた。

庭の物干しの洗濯物が風に揺れている。

庭の端に一本の蜜柑の木が植えてあった。

秦の父親が、仕事を引退した時に、苗木を買ってきて植えたものだ。

既に毎年のように蜜柑が実る。

ただ、農家さんではないため、花を摘花したりしないので、実がわんさかと出来るのだった。

もちろん、食べられる。食べられるが……たくさん実るため、味がいまいちなのだ……。

(これは……ちゃんと手入れをすれば……)

鳳翔は摘果しようと思った。

(剪定ばさみ、剪定ばさみ、つと。 たしか玄関のところ……あ、ありました。)

蜜柑の木をよく見ると、上へと伸びる太い枝が切つてあった。

全体として高さが150cm位になるように。

伸びすぎた枝や多すぎる青い実を切り落としていく。

（とりあえずは、こんなものかしら。）

葉っぱしか見えなかった木が、蜜柑の木らしく実が見えるほどになっていた。

切り落とした枝を集める掃除をしていると、睦が帰ってきた。

「たっだいまあー！」

「あら。お帰りなさい。あ、もうこんな時間！」

時間は16時をすこし過ぎていた。

「？ 鳳翔さん？ 何してんの？」

「蜜柑の木の剪定よ。 そうだ、睦ちゃん？ 去年はこの蜜柑、食べたの？」

「蜜柑？ うん。 食べたよ。」

「どうだったの？」

「ん、美味しかったのは美味しかったんだけど・・・沢山出来た割には、今一つ、甘味が足りないというか、小ぶりの実だったかな。 そんなだったよ。」

「やっぱり。」

「どうして？」

「提督ったら、間引きをしなかったんでしょ。 だから沢山出来たのに、甘味が足りな

かったのね。」

と言い、ニコリと笑った。

果物の摘果は、一つの実に栄養が集まるように、沢山ある実から良さげな実を残して摘んでいくのだ。

また、実に日があたるように、多すぎる葉も摘んだり除けたり、と手を加えていくのだが、

本業の農家ではないので、自然に、成るがままにしておく、実がたくさんできる代わりに味が落ちるのだった。

鳳翔が、

「さあ、晩御飯の用意をしないと」

といい、台所へと入っていった。

睦は手を洗い、自室へと入っていった。

睦は、単にランドセルを置いてきた、だけ。

すぐに鳳翔の後を追いつ、台所へと入っていった。

「睦ちゃん、お弁当箱、出してくれる？ 洗うから。」

お弁当箱を鳳翔に渡して、

「はい、お弁当箱。きれいにたべちゃったよ？ 父さんのお弁当。」

「まあ。良かったわね。提督、喜ぶわよ。」

睦のお弁当箱を洗い、水切り台に置いた。

そこには、鳳翔の分が既においてあった。

「あ、鳳翔さんも今日はお弁当だったの？」

「ええ。提督の、手作りお弁当でしたよ。」

「どうだった？ 父さんのお弁当。」

「そうね。男の人が作るお弁当にしては、出来は良かったと思うわよ。ただ、塩気が

強かったかしら。」

「やっぱり、そう思うよね。今日はちよつと塩気が、ね。」

二人で、秦の弁当にダメ出しをしていた。

そのころ・・・

「へっくしょん!!」

「あれ？ 楠木さん、風邪ですか？ うつすのは止めてくださいよ。」

「いや、風邪はひいていないけど・・・誰かが悪口でも言ってるのかな？」

と、ダメを出されて事には気づいていない秦だった。

「今日のお夕飯は、ハンバーグでいいかしら？」

「うん!! やったあ!」

「え〜つと、材料はつと……。あら、これがあるじゃない。だったら、煮込みにしましようか。」

「え? 煮込みハンバーグ?」

「ええ。この缶詰めのデミグラスソースを使って、ね。」

(冷蔵庫に、合挽のお肉があったわね。これと、玉ねぎ……。ね。それと野菜は……。定番で人参、プロッコリーはないから、ロマネコンティで代用ね。あ、マッシュルームもあったわ。)

(調味料はつと。塩、胡椒、ナツメグ……。ケチャップ、ウスターソース……。こんなもんかしら。)

「まずは、お米を5合くらいでいいかしら。これを砥いで、炊飯器にセットして……。よし。」

ハンバーグのタネだ。

玉ねぎ半分をみじん切りにして、鍋に油をひいて炒める。

焦げないように炒め、キツネ色になったら取り出す。

ボールに合挽き肉を入れ、塩、胡椒を入れて、香り付けのナツメグを入れて、手早く

混ぜる。

手にお肉がつかないようにオリーブオイルを塗る。

あらかた混ぜたら、成形だ。

タネを手にとって小判形に形を整えるが、素早く、両手でキャッチボールみたいにして空気を抜く。

鳳翔の手は小さいので、一人2つとなるような小さ目のタネになっていく。

（手が小さいと、数を作るので大変ね。）

3人分で6つのタネが出来た。

次に、人参、ロマネコンティを茹でる。

茹でる間に、マツシユルームをスライスする。

スライスしたマツシユルームも一緒に茹でる。

人参に火が通ったところに、火から外し、ザルにうつす。

デミグラスソースの缶を開け、鍋に入れる。

鍋を火にかけ、コク出しに、ケチャップ、ウスターソースを少量入れ、混ぜ合わせる。

（すでに出来上がっているソースだけど、ちゃんと味を調べないと・・・）

一度味見をして、塩を振って味を調える。

鍋の火を止めて、次はタネを焼く。

フライパンに油をひいて、片面から。

まずは焦げ目が付くまで焼いて、裏返す。

裏面も焦げ目が付くまで焼く。

オーブンで中まで火を通したいが、オーブンは無いので蓋をして蒸し焼きにする。

(こんなものかしらね。)

焼けた頃合いを見て、火からおろし、デミグラスソースの鍋に投入する。

マッシュルームも一緒に入れてしまう。

しばし煮込めば完成、だが、秦がまだ帰ってこないなので、調理はここで小休止となる。

あとは、サラダだ。

サラダは、レタスを敷き、キャベツの細切、玉ねぎのスライスを載せて、トマトを8

等分して載せている。

あとは、食べる直前にドレッシングを掛ければOKだ。

ここまで来て、睦と鳳翔は居間でテレビを見て過ごしていた。

今、睦は鳳翔の膝を枕にしている。

そう。寝ているのだ。

小さく肩が上下する。

軽い寝息をしながら。

その頭を鳳翔は、目を細めながら、優しく睦の頭を撫でていた。
（今日も、散々、遊んだのね。）と。

時刻が19時になろうとしていたとき、秦が帰ってきた。

「ただいま。」

と言つて居間に入ってきた。

小声で、

「あ、お帰りなさい。提督。」

と。

秦も同じく、小声で

「どうした？」と。

鳳翔が膝の上の睦を指さす。

（あ、なるほど。）

秦は睦の前に、座った。

「気持ちよさそうに、寝ちゃつて。」

「もう少し、待つててください。」

「鳳翔さん。」

「お夕飯の用意は出来てますから。」

秦が改めて鳳翔を見た。

「はい?」

「ありがとうね。睦の事も、家の事も。」

「いえ。そんなことはありません。私も楽しくてやっている事ですから。」

「そう言ってくれると、余計にありがとうと思うよ。」

「提督……。」

秦は鳳翔を、鳳翔は秦を見ていた。

無言の時間であったが、二人の頬が次第に赤くなっていくのが、分かった。

「う、うん、ふわああああ……あれ? 私、寝ちやったの?」

睦がようやく目を覚ました。睦の目の前には、にこやかにほほ笑む秦と鳳翔の顔が

あった。

(父さん・母さん・みたい……)

「よく、オネムでしたよ。」

「起きたか? ご飯にしよう。」

「うん。」

そう言つて3人での夕食が始まる。

今日のメニューは煮込みハンバーグだ。

調理の最後は、デミグラスソースをひと煮立ちさせて完成だ。

一人ずつハンバーグを取り分けていく。
付け合わせの野菜を載せて。

三人は今日あったことを話ながら箸を進めていく。
賑やかな話声が外に聞こえるくらいであった。

復帰、決定？

この日は木曜日。

通常の出勤となった秦であったが、予備役であるにもかかわらず、事務方のトップとして勤めていた。

その日の午後になって、秦の携帯電話が鳴った。

発信者名は表示されなかった。

訝しながら出てみる・・・

電話に出ると女性の声だった。

声の主は・・・赤城だった。

「もしもし？　楠木予備役大佐ですか？　秋吉中将秘書艦の赤城です。先日はお疲れ

様でした。今日は決定事項をお伝えするためにご連絡いたしました。」

そう言ってきた。

「えっ？　もう何か決まったんですか？」

と秦が聞き返す。

「はい。楠木予備役大佐を現役復帰させることが決定いたしましたので、お知らせい

たします。」

「早いですね。」

そう秦が答えた。

続けて赤城が言う。

「なお、新しい勤務地は、横須賀鎮守府となります。正式発令は本日午後となりますので。」

秦は、復帰することは分かっていたことだが、勤務地が横須賀になることは予想していなかった。

「え? 横須賀、ですか?」

「はい。 呉鎮守府の内部調査が現在行われておりますが、その結果の共有やその後の対策を立てやすくするためにも、中將の元で働くように、とのことですよ。」

「はあ・・・ ホントに、中將に嵌められている感が、満載なんですけど・・・」

「まあ、仕方ありませんね。 鳳翔さんのためとはいえ、大佐が犠牲になったんですから。」

「あははははっ」

秦は苦笑いしかなかった。

「異動期限は、十日以内とされておりますので、来週もしくは再来週から横須賀勤務とお

考えください。」

「分かりましたが、実際に横須賀に行く日は、こちらで決めていいんですね？」

「そうですね。そちらの都合もありませんから、決まりましたらご連絡をお願いいたしますね。」

秦は考えた。

来週も再来週も変わらんだろう、と。

「赤城さん。来週からでもいいですよ。そちらに行くの。ただ、休み明けすぐって言うのは厳しいかも、ですけど。」

「いいんですか？ 急な異動ですよ？ 大丈夫ですか？」

と赤城が心配してくれる。

秋吉も分かった上で、再来週でもいいと言ってくれていたのだ。

「睦のことですよ？ 心配には及びませんよ。あの子も分かってくれますよ、きつと。」

「そうですね。分かりました。中将にはそうお伝え致します。他にないかありますでしょうか？」

「あ！ それと、すみませんが、横須賀鎮守府の近くに軍関係者の寮ってありましたよね？」

「家族寮みたいな。」

「ええ。 ありますけど・・・！ ちょっとお待ちください。」

電話口の向こうで赤城が何やら気づいたようだった。

誰かと話し込んでいる。

しばらくして・・・

「大佐？ お待たせしました。 家族寮、ですね？ ありますので、私の方で手配致しますね。」

「ええ？ いいんですか？」

「はい。 ちょうどいい物件が一件、ありますのでそこにされては、と思います。」

「それは助かります。」

「えーっと、住所はつと・・・」

赤城が住所を教えてくださいました。

それをメモしていく。

聞くと、横須賀鎮守府の中だった。

「鎮守府の中ですね、これ。」

「そうですね。 まあ、現役の艦娘がいますので、鎮守府の中がよろしいかと思ひますよ。」

「分かりました。 ご配慮、ありがとうございます。」

「以上、お伝えいたしました。 それでは。」

と電話が切れた。

「ふう。 横須賀か……。 恩師組みたいなエリートでもないのに、横須賀勤務か……。」

これも、運命か、と思う秦であった。

そして、事務方の係員に異動となることを早速伝えた。

係員は驚いていた。

「えっ！ もう異動ですか？ 早すぎませんか？」

そりやそうだよな。

着任して1年余りで異動していくんだから。

「悪いね。 私も急な話で驚いているんだよ。ただ、上からの命令なので、止めるわけにはいかなんだよねえ。」

そして、早すぎる異動の決定なので、後任が決まっていない。

次席の係員に引き継ぎをすることを伝え、早速引き継ぎを始めた。

もともと、秦も1年余り前に着任してきて、引き継ぎを受けたばかりなので、引き継ぎ資料はそのまま使える、ハズであった。

日常業務をこなしつつ、引き継ぎを行っていった。

その日の夜、今夜もまた、にぎやかにになった食卓を囲むことになった。

以前は、秦が帰ってきてから夕食の準備を始めるのだが、今は、鳳翔が台所を取り仕切っていた。

そのため、秦が帰り着くともう食事の準備は終わっていた。

そう。あとは、食べるだけの状態になっていたのである。

「ただいま。」

「お帰りなさい。提督。」

「お帰り、父さん。ご飯の用意、出来てるよ。」

「もう?」

「うん。鳳翔さんが作ってくれたんだよ。私も手伝ったんだよ。」

睦が自信満々に答える。

えっへん!と胸を張る。

「はい。睦ちゃんにも手伝ってもらったので、早く出来ちゃいましたけど。」

いつものように、にこやかに話してくれる鳳翔が言う。

「お、そうか。じゃ、すぐ行くよ。」

荷物を置き、手を洗って、テーブルにつく。

そして、手を合わせて・・・

「頂きます。」

と、食事が始まる。

今日のメインメニューはアジの南蛮漬けだった。

「さっぱりと、甘酢と香辛料を効かせてみました。これくらいなら睦ちゃんも大丈夫だと思えますよ。」

パクつと！

「うん、美味しい！ 甘酢もいいなあ。」

魚料理が今一つ、好きになれていない睦が、アジをじつと見ている。

うーっとうなっている睦だが、意を決して、食べてみる。

「!? 美味しい！ 香辛料がピリツとしていい感じ！」

「良かったです。お口に合ってます。」

と鳳翔がほほ笑んでいる。

「鳳翔さんの料理って、美味しいね。」

「そうだな、家庭料理なのに、お店以上の味だな。」

秦と睦が鳳翔の料理を食べながら、褒めていた。

「ふふっ、ありがとうございます。そう言っていただけだと、励みになります。」

「鳳翔さんって、料理の失敗ってないの？ いろんなレパートリーを持つてると、失敗と

かってあるんじゃないのかな、と思うんだけど。」

「そうですね、作った事の無い料理だと、結構失敗っぽいことはありますよ？　でも、どうすれば美味しく頂けるかっていうのは考えてますけど。」

そうなんだあ、思う秦だった。

晩御飯を終えて、三人で寛いでいた。

そこで秦が昼間の電話の件を話した。

「今日の昼間、横須賀の赤城さんから電話が来たよ。正式に復帰することになったようだ。」

「おめでとうございます、って言ってよろしいのでしょうか。」

鳳翔が微妙な笑顔で見ている。

何しろ、自分の事で秦に、嫌な思いをさせているのではないか、辛い思いをさせるのではないか、と考えていた。

「ははっ、ちよつと複雑だね。」

秦の笑い顔が引きつっている。

「正直言つて、提督の仕事は嫌いじゃないんだ。むしろ楽しいと思うくらいなんだ。

でもなあ、あの人間関係は……人の悪意を見続けたり肌で感じるのは、やだなあつて。」

「申し訳ありません。私の為に。ご無理をなさるのであれば、いつでも出ていきます

から。」

「いや、そういつているんじゃないだ。気にしないで、鳳翔さん。本心を言えば、君に出会えたのは、嬉しいんだよ。そう思ってるんだ。」

「えっ…… そう言っていたらけると、助かりますが……。」

鳳翔の頬がほんのり赤くなっていく。

秦の本心は、その言葉の通り、鳳翔に出会えて嬉しいと思っていた。

と、お互い、それ以上は言わなかった。

「で、だ。話は戻るけど…… 命令は、横須賀鎮守府で勤務するように、との事なんだよ。」

「え？ 横須賀に行くの？ 父さん？」

睦が驚きの声を上げた。

驚くのは無理もない。

この間の話では、このまま呉に行くような感じだったからだ。

「うん。横須賀で秋吉中将の元で勤務するらしいわ。これから引越しの用意をしなきゃな、つと思つてさ。俺と鳳翔さんは問題ないんだけど、問題は睦だよ。学校を転校することになるんだが……。」

頭を抱えながら話しているが……

「例え、横須賀に行ったとしても、1か月か2か月で、呉に行くことになりそうだから、転校即、転校っていうことになりそうなんだ。」

鳳翔が驚いて答える。

「それは、睦ちゃんにとつては、大変な環境の変化ですよ？ 短い期間で二回も転校するなんて。」

「そうなんだ。かといって、ここに睦一人置いておくわけにもいかないから、連れて行くしか選択肢は無いんだけど……。睦、そうなってしまうけど、いい？」

そう言つて睦に聞いてみた。

「え？ あたし一人ぼっちはやだよ、父さん。だから、あたしも横須賀へついでに行く！」

父さんも、鳳翔さんも行くんでしょ？ だったら、なおさらついて行くから。」

「ま、そういうとは思つてたよ。」

予想通りの回答であつた。

秦は二人を見ながら言つた。

「それでは、三人で横須賀に行くぞ。行つたらすぐ呉だけだな。」

「うん！」

とは睦。

「了解しました。」

とは鳳翔であつた。

秦は笑つた。内心良かったと。

鳳翔も分かっていたかのように、笑っている。

睦は、学校の事が心配だったが、大好きな秦と、もはや母の様に思う鳳翔と一緒に居たいと思う方が強かつた。

睦爆弾

夜、秦は自室の布団に入り、寝ようとしていた。

すると、入口の扉が静かに開いた。

その隙間から覗いている顔があつた。

睦だつた。

「ん？ ん、なんだ？ 睦か？」

「うん。」

睦が部屋に入ってきて、ごそごそと秦の布団に潜り込んできた。

「どうした？ 今日も鳳翔さんとこじやないのか？」

「今日は、父さんと寝るの！」

と言つて。

「そうかそうか。 よし！」

と言つて秦はギユつと睦を抱きかかえた。

えへへへと笑う睦が秦の腕の中に居た。

「良かったのか？ 俺で。」

「うん。父さんの腕、太いね。」

「そうか？」

頷く秦だった。さらに・・・

「睦。これで良かったのか？」

「え？なにが？」

怪訝そうな顔をする。

「俺と睦の二人きり生活だったのに、人助けとは言え、急に三人になっただろ？睦が嫌な思いをしていなければ・・・って思ったんだけど？」

「そんなことないよ。まあ、鳳翔さんじゃなかったら、考えちゃうけどさ。鳳翔さん、お姉さんっていうより、お母さんみたいだし。それに、優しいし。あたしはいよ。父さんは？鳳翔さんのこと、満更でもないんでしょ？」

腕の中から秦の顔を見上げる睦の目が、笑っていた・・・。

「その目は・・・良からぬ事を考えとるやろ？」

「そんなこと、ないよ。で、どうなの？鳳翔さんの事。」

「うん、会って時間がそんなに経ってないのに、傍に居て欲しい、と思ってるんだよねえ。」

「やっぱり、そうなんだあ。で、それだけ？」

「は?」

「まさか、それだけじゃないよね? どうなの、父さん?」

思わぬ質問だった。

秦は・・・ちよつと慌てた。

「な、なにを、言ってるによかにや? むちゆみちゆあん?」

「え?!!」

怪しいぞ、と言わんばかりの、睦の目が、視線が秦に刺さっていた。

「な、何も、ないぞ・・・」

「ふうーん、ま、今日のところは勘弁してあげるから。」

と云って、秦に強く抱き着いてきた。

「ここで秦が逆に睦に聞いてみた。

「睦。睦は鳳翔さんのことどう思ってたんだ?」

「どうして?」

「んー。お姉さんより、お母さんみたいって言ってたけどさ?」

「んとねえ。朝、鳳翔さんが見送ってくれたのね。その時、友達に、誰って聞かれた

の。その時、父さんのいい人って答えたの。」

「ぶっ。」 思わず吹き出してしまった。

「な、なんと言いましたか？」

「ん？ 父さんのいい人、だよ。」

はあ・・・とため息をついた秦だった。

「それ、わざと、だな？」

「え？ だつてえ、事実じゃん？ それにちゃんとやってあるから。」

「なにを？」

「あたしの・・・お母さんになって欲しい人つて、皆に。」

キャハッ つてな顔をして睦が言う。

「ぶっ。」 ともも吹き出してしまった。

「む・つ・み・ちゃ・ん！」

「今すぐでなくてもいいから、ね？」

睦が微笑んでいる。

(まったく、可愛い顔をして、考えることは結構、キツいんだけど・・・)

「考えておいてね、お父さん？」

「それつて、はい、とも、いいえ、とも言えないだろう？」

「もう。しょうが無いなあ。」

呆れ顔をする睦である。

「可愛い娘の言い分くらい、聴いてよね。分かった？」

秦の腕の中で、人差し指をピシツと立てて、はつきり言いなさい！的な目で見ている睦だった。

「でも……今は、私だけの司令官だもん！」

と秦の胸に抱きつく。

睦の髪からはいい匂いがした。

「そうだな。」

と言いながら、秦は睦の頭に軽く口づけをした。

「お休み、睦。」

「うん。お休み、父さん。」

睦の爆弾は結構、効いている。

（まったく、睦め。しかし、睦はお母さんが欲しい、か。結構ハードルは高いんだ

ぞお、簡単に言うけどさあ。はあ……）

ドキドキが睦に分かってしまうかも、と思いながら、目を閉じて寝入った。

こうして夜は更けていく。

いざ出発！

今日は金曜日である。

秦は朝から睦と一緒に学校に出掛けた。

もちろん、転校するための手続きと学校への説明の為である。

残った鳳翔は、秦に家の片付けを頼まれた。

学校へ着くと、まずは職員室へと向かう。

ここで教師たちに、期せずして横須賀へ行くことになったと話し、睦の転校の話をした。

この手続きだが、今日中に書類を揃えてもらって、明日、取りに来ることになった。

睦は、担任と一緒にクラスへと向かった。

朝の授業の前に、皆に話をするためだ。

教室に入るとき、担任の後ろを睦が歩いていた。

担任が教壇で、睦の転校の話をした。

「この度、急ではあるが、楠木睦さんが転校することになったので、皆に知らせておね。」と。

続いて睦が話をする。

「急でごめんね。父さんの仕事の関係で急に横須賀の方に行くことになったの。結局、私が居たのは1年あまりという、短い間だったけど、楽しかったよ。みんな、ありがとう。で、学校に来るのは今日で最後なんだ。」と。

「え!?」「うそ!!」「ホントなの?」

クラスメイトは、皆驚いていた。

「うん。ごめんね、ホントなんだ。」

その日のクラスは、一日中、すすり泣く声がしていた。

次に秦は、市役所に向かった。

睦と秦の転出届を出すためだ。

鳳翔はまだ、現役の大艦娘であるため、この役所には住民票がない。

市民課に転出届を出して、受理されたら完了だ。

秦の次の向かい先は、会社だった。

会社で引き継ぎ作業を行うためだった。

秦は職員全員に挨拶をして廻っていた。

「急にはあるが、横須賀へ行くことになった。引き継ぎの資料は私が受けたものをそのまま置いていくので、後任に渡してほしい。一年足らずだったが、ありがとう。」と。

職場での秦の持ち物は少なかったため、多くは残していくことにした。

朝、秦と睦を見送った鳳翔はというと・・・

秦に代わって家の中を整理していた。

鳳翔の荷物といえば、秦の家に来たときに来ていた着物と後で買った衣類だけだったので、鳳翔の荷物の整理はすぐに終わった。

「さて、この家の、提督と睦ちゃんの荷物の整理ね。」

と楽しそうに一人呟っていた。

秦も睦も1年ほど前に来たばかりだったので、私生活においても持ち物は少なかった。

秦の私服、靴、本などなど・・・。

睦の勉強道具、私服、靴、本などなど・・・。

台所の食器類や居間に置いてある小物類など・・・。

大方の整理と片付けが済んだところで、時刻は夕刻になりかけていた。

その頃になって睦が帰ってきた。が・・・

「ただいま！　いってきまあす！」

ランドセルを玄関先に置いてそのまま出かけてしまった。

「お帰りなさい、むつ…… あらあら、もう遊びに行っちゃったのかしら……。」

睦は友達と最後の遊びの時間を持つべく、そのまま遊びに出たのだった。

玄関先に放り投げたランドセルを片付けようとして、持ち上げてみると、重い……。

(これ、結構重いわね。 何が入ってるのかしら。)

隙間から中を覗き込むと、教科書がぎっしりだった。

そう。

教科書を学校に置きっぱなしだったのを、持って帰ってきたのだ。

(あらあら。)

鳳翔は、ため息をついていたが、気を取り直して夕食の準備に取りかかった。

(今日のメニューは、何にしましょうか。 ……やはり、定番ですかね。)

そう。 カレー。 金曜カレーだった。

(時間の余裕がありませんねえ。 やむを得ません。 このカレーパウダーを使いま

しょう。)

そう言つて料理を始めた。

じやがいも、人参、玉葱を用意し、ひとくち大に切っていく。

今回は、睦にも大丈夫な、甘口にする。

お肉はサイコロ状の牛肉だ。

まずは、お鍋に油をひいて、お肉を炒めて、と。

軽く炒まつたら、ジャガイモ、人参、玉葱を入れて更に炒める。

次にお水を入れる。

三人分とは言え、秦も睦も食べるだろうと予想がつく。

やや多めに作っている。

水が沸騰する手前で火加減を調節し、煮ていく。

お肉からの灰汁が出てくるが、落とし紙をして吸い取らせる。

しばらく煮て、ジャガイモ、人参が柔らかくなれば火を止め、カレーパウダーを入れる。

ここでリンゴの擦ったモノを入れたり、蜂蜜を入れたりするが、今日は蜂蜜とウスターソースをチョイスした。

かき混ぜて味見をしてみる。

(うん。こんな感じですかね。やはり、私にはちよつと甘いですね。)

ここまで来ると、火を止めて味をなじませておく。

食べる直前で再度、火を通せばOKだ。

ご飯も、もうすぐ炊き上がるだろう。

時間が過ぎ、日が落ちる頃になって、睦が帰ってきた。

「ただいまあ! ああ、疲れたあ!」

「あら、お帰りなさい。睦ちゃん、手を洗ってきて、手伝ってくれるかしら?」
「え? うん。」

といて、洗面所で手を洗い、台所へと入っていった。

それからしばらくして秦も帰ってきた。

「ただいま。」

「お帰りなさい、提督。」

鳳翔に出迎えてもらった秦は、ちよつと嬉しかった。

「お帰り、父さん。」

睦も一緒に出迎えてくれた。

「学校はどうだった? 皆に挨拶してきたか?」

「うん。皆に話してきたよ。もう朝から涙流しちゃう子も居て、大変だったよ。」

とケロツとした顔で話す。

「そうか。」

と秦が答えた。

そして、家の中を見ると……すでに……今すぐ必要な物以外は荷造りが終わっていた。

まあ、秦もこの家に住んで1年余りなので、そんなに大量の荷物があるわけでは無いのだが……。

「あれ？　もう、荷造りが出来てる。」

と驚く秦であった。

「はい。あらかた終わっています。」

と鳳翔が応えた。

「大変だったろうに。明日は俺も手伝うよ。」

「大丈夫ですよ。残りは少ないですから。あ、引越し屋さんにも連絡済ですから。」

にこやかにほほ笑む鳳翔が言う。

秦は呆気にと取られていた。

(鳳翔さんって、炊事以外に、ホントに家事まで完璧じゃない……)

「父さん？　もう鳳翔さん無しじゃ、この家、まわらないよ？」

「そ、そうだな……」

ふふふつとほほ笑む鳳翔が見ていた。

「それじゃ、お夕飯にしましょう。睦ちゃん、手伝ってくる？」

三人でテーブルを囲んで夕食となった。

「「頂きます。」」と。

秦には甘いカレーだった。

「ちよつと、甘いな。」

「はい。 睦ちゃん用に甘くしてありますから。」と。

「でも、美味しいよ。 父さん。」

「うん。 甘いけど、美味しいね。」

今日もまた、賑やかに食事を採った。

睦が学校での様子を事細かに話してくれた。

睦はおかわりをしていた。

秦も釣られて? おかわりをした。

そして、「「二」ごちそうさまでした。」と三人で言った。

食後のお茶を啜りながら、鳳翔が声を掛けた。

「提督? 学校の方の手続きはどうだったんですか?」

「ああ。 明日学校に転校に必要な書類を貰いに行くことになってるよ。 役所の手続き

は終わったしね。」

「私は?」

「睦は、荷物の整理の続きをしておいて。」

「はあい。」

「昼間に、横須賀の赤城さんに、来週からそつちに行けそうだと伝えてあるので、荷物の整理は出来れば明日中に終えたいな。」

「それでしたら、あらかた終わってます。そんなに残って居ませんから。」

鳳翔が微笑む。

「それは助かる。」

秦がにこやかに答えていた。

そして翌朝。

先週と打って変わって、快晴であった。

秦は昨日、学校に睦の転校の手続きをお願いしていたので、その書類を受け取りに学校まで出向いた。

書類は既に用意されていたため、すぐに受け取ることができた。

その足で、担任、校長と挨拶をして、学校を出た。

ホントは、この日一日を掛けて荷物の整理をするつもりだったのだが、昨日、鳳翔が“やってしまった”ので、早めに帰る理由が無くなってしまうた。

そして、ほぼやる事の無い秦は……

「引越しの前日なのに、こんなにもったりしていいんだろか。」

縁側に座っていた秦が呟いた。

それを聞いていた鳳翔が隣に座ってきた。

「いいんじゃないですか。私は、提督のお役に立てることが嬉しいんですから。何なりとお申し付けください。」

そう言つて秦にもたれ掛つている。

鳳翔の手が、秦の手をそつと握つていた。

その頬を赤めながら。

「ふふつ。私の手より大きいですね。」

と秦の手を両手で包み込むように……。

秦はその姿をじつと見ていた。

その二人の姿を見た睦が同じく縁側にやつてくる。

睦もやるのが、ほぼ無かつたのだ。

「もう。いつの間に二人はそんなに仲良くなつたの?」

頬をぷつくりと膨らませている。

「父さんには、私も、居るんだからね!」

と言つて秦の腕を取る。

右に鳳翔、左に睦が居た。

「両手に華、だな。」

「ホントだよ、父さん。で、父さんは両手に華状態で、嬉しい?」

睦が上目づかいで秦の顔を見上げていた。

「なんか、やらしい言い方してないか、睦?」

「ぜーんぜん! 素直に聞いているんだけど?」

「そうか? ま、男としては、嬉しい、かな。特に、可愛い娘と綺麗なお姉さんに囲まれていれば。」

そう言つて二人を抱きしめた。

その顔はにこやかだった。

「可愛いだつて。当然ジャン!」とは睦。

「あら、綺麗なお姉さんですつて。嬉しいですね。」とは鳳翔。

睦と鳳翔が見合つて微笑んでいる。

言つた本人、秦の顔は赤かった。

(恥ずいって。)

三人になつてからまだ一週間も経っていない。

しかし、すでに三人家族のような雰囲気と落ち着きを醸し出している。

鳳翔は、新たな提督を見つけ、満足。

睦は、母とも思える鳳翔と出会えて、嬉しい。

秦は、その二人の笑顔を見れて、満足。

思いは三者三様ではあったが、三人の幸せオーラ満載の縁側だった。

明日には、ここを離れて横須賀に行く。

横須賀に行けば、波乱な日常が待っているのかもしれない。

それでも、今、ココは平和な時間が流れていた。

秦は、これから起こる事を心配しながら、縁側からの風景を見ていた。

翌日。

朝食を摂った後、最後の荷造りをして引越し屋さんを待つていた。

「全部、箱詰めしてしまったから、お茶も飲めないなあ。」

「仕方ありませんね。ペットボトルのお茶ならありますよ?」

「あ、あたし飲みみたい。」

そんな会話をしていると引越し屋さん came。

「ちわー! 引越し屋つす。」

荷物を引き渡して・・・

「では、特急便で向こうにお届けいたします。」

と言って、業者は先に横須賀に向かつて行った。

改めて何もなくなった家を、三人は見ていた。

「ここに住んで、僅か1年・・・楽しかったな、睦？」

「うん。父さんと二人。最初はぎこちなかったけど。」

「そうか？ そんなことは無かったろ？」

「へへへっ」

と笑う睦がいる。

「私に来て、まだ1週間なのに。すみません、激動な1週間です。でも、私も睦ちゃん

と同じように、1週間でしたけど、楽しい1週間でした。」

「皆、短い間しかいなかったけど、この家には世話になったな。ありがとうな。」

家の、居間の柱を、玄関の柱を撫でながら、三人は外に出た。

この家自体は、秦の実家の離れなので、実家に挨拶して、駅に向かう。

これから三人は横須賀に向かう。

夕方には横須賀に着いているだろうと。

心配事はいっばいと思う三人だったが、楽しい事もいっばいあるだろうと、期待して。

重なる思い

入寮

この年の梅雨時期の夕刻。

ここ横須賀鎮守府に親子に見える三人組がやってきた。

一人目は父親に見える、楠木秦。

二人目は娘に見える、楠木睦。

三人目は母親に見える、鳳翔。

秦は、週明けからこの鎮守府で働く予備役大佐である。

睦は、秦の娘であり、元艦娘。

鳳翔は、元呉鎮守府所属であったが、少々問題があつて今は横須賀鎮守府所属で秦が管轄権を持つ予定の艦娘である。

門番に事情を話し、鎮守府内に通された。

鎮守府内を三人は進んでいく。

目的の建物は、ここ横須賀鎮守府内にあるという、家族寮だ。

元々、鎮守府内で住むことは想定していないが、秦が望んだのだった。

もつとも、鳳翔が現役の艦娘である以上、鎮守府外で暮らすのは様々な問題を生むので、寮を希望したのだ。

そうしたら、ちよūdい家族寮がある、とのことだった。

秦は即答で了解した。

家族寮ならば、秦、睦と鳳翔の三人で暮らせる、と言うのもあったが。

三人は家族寮の建物の前で足が止まる。

「んー、まさか、こんなデカいとは……」

「おっきいね。」

「そうですね、この大きさは……私も、呉でも見たことはありません。」

三人の素直な感想であった。

建物は2階建てではあるが、一般の住宅とは言えないほど、デカい。

「いったい、どんだけ部屋があるんだか……」

そう呟く秦であった。

そこに秋吉と赤城がやってきた。

「よお。 やつと来たか。」

「これは、秋吉中将。 ええ、たつた今着いたばかりです。」

「遠路、ご苦労様です。」と赤城が労いの一言をくれたが……

「中将、これは……これが家族寮ですか？」

「ん？ そうだが？」

怪訝そうな顔をする秋吉である。

そこに赤城が口を添える。

「もう、提督つたら。ちゃんとお話ししませんと。ほら、大佐が困っていますよ？」

「ああ、そうだな。じゃ、赤城、頼むよ。」

と言つて赤城に説明を任せてしまった。

赤城も、もうつと呆れ顔だ。

「では、私からお話しいたしますね。ここは元々提督用の官舎だったんです。秋吉提督はここを使っていませんので、ちょうど空いているところに大佐がお使いになる、という事です。」

「はあ、元官舎ねえ。」

(それにしても、デカいだろ……コレ……)

「はい。部屋数は寝室が4つ有りまして、うち一つは、提督用で、小さいながらも仕事部屋が続部屋であります。それと、ここで提督が会議が出来るようにとダイニングとは別に大広間があります。また浴室も2つ備えてあります。ご自由にお使いください。」

建物に5人は入っていく。

玄関ホールも、住宅にしては立派だった。

玄関ホールから続く大広間。ここは10人ほどが座れる大きなダイニングテーブルがあった。

さらに、奥には台所があり、大広間とは別にダイニングルームがある。ここでも6人は座れる代物だった。

水回りは1階、寝室は2階のようだった。

1階の居間も広く、応接セットが既に置いてあった。

「基本的に、各部屋の掃除は済んでおりますし、什器も揃っておりますから、今からでもお使いになれます。」

と赤城が教えてくれた。

秦たちの荷物は1階の玄関ホールに置いてあった。

「今日からここで寝泊まりしてくれ。ま、片付けが必要だろうが、明日中には終わってくれよ。休み明けにはワシの執務室まで来てくれ。正式な辞令を渡すからな。」

と言って、赤城と共に出て行った。

「デカイ……前の家と比べるのがおこがましいくらいだな……」
辺りをきよろきよろしている。

気が付くと、鳳翔と睦が居ない。

「あれ?! おーい、鳳翔さ——ん!、睦——!」

すると奥から鳳翔がやってきた。

「どこに行つてたんだ?」

「お台所とお洗濯場とを見てきました。 ずいぶんと広いんですね。あ、冷蔵庫も洗濯機も完備でしたよ?」

「そうなの?」

「はい。しかも冷蔵庫は、中身がいっぱい入ってます。お料理のし甲斐があります。」

とにっこりと笑う。

続けて睦が2階から降りてきた。

「2階は一人ひとりの部屋だよね?」

「ん? もう見てきたのか?」

「うん。みんなおっきな部屋だったよ。」

とにかく、荷物を整理しなければ、生活が出来ない。

2階の部屋を三人でみて、一応、一人一部屋を割り当てる事とした。

提督用と言われた部屋は使わない事とした。

各部屋にはベット、クローゼット、机、本棚が既に完備されていた。

秦は、持ってきた本を本棚に、服をクローゼットにしまった。

「さてと、こっちは何とか片付いたかな。睦の方はどうだろ?」

あらかた片づけてしまったあと、睦の部屋を覗いた。

コンコンと扉を叩き、

「入るぞ?」

こっちもあらかた片付いてはいたが、睦が椅子に座って、何やら考え事をしてるよ
うな。

「どうした?」

「あ、父さん。部屋が大きすぎて、なんか落ち着かなくて・・・ 持ってきた教科書

なんかを全部並べても、スカスカでさ・・・」

見ると机の本棚に教科書が並べられているが、まだまだ十分な容量が残っていた。

クローゼットも扉が半開きで中が見えているが、こちらも十分な容量が残っている様
だった。

納まり過ぎた状況にちよつと不安気な顔をしている。

「なんだ、お前もか。」

「父さんも?」

「ああ。なんか落ち着かなくてさ。」

秦と睦の二人、顔を突き合わせて、笑っていた。

そして二人して鳳翔の部屋へといった。

コンコンと扉を叩き中を覗く。

鳳翔の部屋も既に整理が終わっていたが、睦と同じように、ベットに腰かけて考え事をしているようだった。

「入るよ。」

「あ、提督。」

「どうしたの？」

「ええ、あまりに広すぎて、どうしようかと。」

その言葉に秦が笑う。

「ははははっ　なんだ。三人とも同じか。」

「そうだよ、鳳翔さん。私も部屋が大きすぎて、考え込んじゃって。」

「そうだったんですね。私たち、似た者同士なんですね。」

「そうだな、と三人で笑いあった。」

実際、各部屋は16畳ほどの広さがある。

ベットも大きく、キングサイズだ。一人で使うには十分な大きさだ。

机も本棚も大きく、部屋の入り口には衝立が置いてあるのだった。

机も、よくある事務机よりひと回り、いや、ふた回りは大きいだろうか。

机の左右に脇机が付属しているし、机上のライトも明るいものが2つある。

本棚も、なんとか大全集が一式入りそうな十分な容量があった。

それぞれの部屋の整理が終わると、次は居間と台所だ。

持ってきた食器を水屋にしまったが、元からある食器類や調味料類がたっぷりあった。

元からある食器は・・・

金の縁取りをしているし、描かれている絵は海軍らしく、菊水の絵や錨の絵が施されている。

フォーク、ナイフ、スプーンの類は、銀製だった。

「これ、いいものですね。何組あるのかしら?」

と鳳翔が唸るくらいだった。

居間もソファは元からあったが、一人掛けでも二人が座れるほど大きいし、三人掛けまで置いてあった。

持ってきた荷物で新たに置いたのはテレビくらいだった。

余った荷物は箱のまま、2階の空き部屋に押し込んで、荷物の整理が終わった。

「結局、持ってきた布団は余ったな。」

これが一番嵩高いのかも知れなかった。夕刻になり、三人は1階の居間にいた。

「そろそろ、お夕飯の支度をしますね。」

といって鳳翔が台所に入っていた。

改めて秦が居間の窓から外を見ると、家族寮の目の前は、広場になっており、その先は海だった。

右手には、提督の執務室がある建物、鎮守府のメインとなる建物が見える。

そこには艦娘たちの自室やら食堂やらがある、ハズだ。

振り返ると、睦がテレビをつけたまま、ソファで寝てしまっていた。

それを見た秦は薄手の掛け毛布を持ってきて、睦に掛けてやった。

「今日は、移動だけでも結構、疲れたもんな。無理もないか。」

といいながら睦が眠るソファに腰かけ、頭を膝の上に載せてやった。

テレビの音が、子守唄の様に聞こえたのかも知れないな、と思っていた。

軽く小気味よい寝息を立てている。

しばらく睦の頭を、栗色のショートヘアの髪を撫でながら思いに耽っていたとき、鳳翔がやってきた。

「お夕飯の準備が出来ましたけど……」

人差し指を口の前で立てて、しーっと、秦が言った。

そして小声で……

「ああ、ありがとう。」

「睦ちゃん、寝ちゃったんですか?」

「ん? うん。」

「気持ちよさそうですね。」

と鳳翔が言う。

それに秦が声を落とし気味に応える。

「そうだね……。」

「提督?」

「ん? ちょっと考え事を、ね。睦月が睦になってから1年余り。いつもこのころと、ニコニコして、一見、楽しそうにしているけど、ホントは疲れているんじゃないかと思うんだ。」

秦は今の睦を見ながら思っていた。

「舞鶴での俺の様子を見てたから……心配させまいと楽しそうにしてくれている、その気持ち嬉しいのと同時に、悪く思えてね。……俺の為、なんて思わなくてもいいのってね。睦には睦らしい人生を送って欲しい。そう思うんだ、俺の事は気にせず

に。」

「そうだったんですね。私の前でもいつも笑ってましたね。」

「いつも明るい睦、俺の心を温かくしてくれる睦、．．．もう、掛け替えのない娘、だなんてね．．．」

そう言つて、睦の額に軽くキスをした。

「提督．．． ホントにお父さんの顔ですね。うふふ」

秦はまんざらでもない、ニコリと笑つた。

秦と鳳翔の話声で睦が目を覚ましてしまった。

「ん、ん？ あれ？ 寝ちやつた．．．の？」

「ああ。気持ちよさそうにね。」

ニコリと笑う秦の顔が目の前にあつた。

「提督を膝枕に、ホントに気持ちよさそうでしたよ？」

と微笑む鳳翔。

「ひよつとして．．．二人して見てた？」

「可愛い寝顔だったよ？」

恥ずかしくなつたのか、睦の顔が赤くなつた。

「それはそうと、お夕飯の準備が出来てますよ。さ、ダイニングへどうぞ。」

鳳翔の一言でダイニングへと向かった。

睦は秦の腕に抱き着いて……

(ぶー。 父さんのいじわる！ でも、大好きだよ！)

ダイニングテーブルは、6人が座れるが、秦をお誕生日席とし、端つこに三人が座る格好で、夕飯を食べた。

「鳳翔さんのご飯、どのメニューも美味しいね。」

「うん、美味しい。」

と睦と秦が言う。

鳳翔がうふふふっと二人を見つめていた。

夕食を終え、三人は順番にお風呂に入った。

この寮にも脱衣所付きで、お風呂があった。

鎮守府の浴場より小さ目ではあったが、二、三人は余裕で入れるほどの大きさだった。お風呂から上がり、居間でくつろいでいたが、時間も遅くなり……

睦と鳳翔が「おやすみ」と言って2階の自室へ入っていった。

が、しばらくして、睦が2階から降りてきた。枕を抱えて……

「どうした、睦？」

「うん、やっぱり、初めての部屋は・・・緊張して寝つけなくて・・・」
と小さな声で言ってきた。

「ねえ・・・一緒に、寝て、くれないかな？」

「一緒に？」

「うん・・・父さんと・・・一緒に・・・」

「分かった。」

そう言つて、二人で秦の部屋のベットに二人で入つた。

「どうだ？」

「ん、あつたかい・・・。」

「今日はもう遅い。お休み、な？」

「うん。・・・ねえ、父さん？」

「なんだ？」

「うん・・・ ずっと三人だよね？ あたしと父さんと、鳳翔さんと。 ね？」

睦が、三人だよね、という。

秦も、三人でいいと思つていた。だから・・・

「そうだな。三人でいいぞ。この家が賑やかになるなら、みんなが幸せと思うなら、ね。」

「うん。」

と睦が返事をする。

その顔はとびっきりの笑顔だった。

そして、睦、秦ともに眠りに落ちた。

一方の鳳翔はベットの中で考え事をしていた。

この家での自分の存在について。

この家に居たい、三人で居たい、と思っていた。

自問自答を繰り返しても結論は出なかった。

考えあぐねても仕方が無かったが、結論が出ないまま、睡魔に襲われ、ついには勝て

なくなってしまうた。

重なる思い

秦と睦は、朝から忙しかった。

6時に起き出し、朝食を済ませ、7時半には寮をでた。

「行つてらっしゃい。」

と鳳翔に見送られて。

「行つてきます。」

と。

睦は鳳翔手作りのお弁当を持って。

今までは秦が作っていたが、今日からは鳳翔が作る事になった。

そして、今日の目的は、睦の学校の転入の手続きだった。

秦は着慣れないスーツ姿だ。

睦は、白の2本ラインの入った、緑のセーラー襟のブラウスに、濃緑のちよつとミニのフレアスカート。ローファーの靴を履いている。

もちろん、赤いランドセルを背負っている。

朝一番で職員室に睦と秦がやってきた。

「おはようございます。本日よりこちらでお世話になります、楠木睦です。」
と教員に挨拶し、

「ようこそいらつしやいました。お待ちしておりました、楠木提督。担任の濱岡楓と言います。では、こちらへ。」

睦の担任は女性だった。20代後半といったところだろうか、睦と同じようなショートカットの髪型だ。笑顔で出迎えられた。

案内されたのは校長室だった。

「お連れしました。」

と濱岡が言つて部屋に入った。

「本日よりこちらでお世話になります、楠木です。」

と校長に挨拶した。

齢60前といった貫禄のある、白髪交じりの校長先生だった。

「ようこそお越しくございました。鎮守府の方から聞いております。こちらこそよろしく願います。」

と校長も返してくれた。

雑談もそこそこに、始業時刻となり、睦は担任と共にクラスへと向かった。

クラスについた睦は、濱岡に即され、クラスメイトの前で挨拶をする。

「今日からこの学校で一緒に勉強する、楠木睦です。よろしくね。」と。

早速の休み時間に睦はクラスメイトからの質問責めにあっていた。

「ねえねえ。睦ちゃんって呼んでいいのかな？」

「うん。いいよ。」

「じゃあ、睦ちゃん、あたし、由美。よろしくね。」

「私は和美。」

「わたしはあおい。よろしくね。」

（由美）「それで、鎮守府に住んでるって、ホント？」

「うん。ホントだよ。あそこに家族寮があるんだ。」

（由美）「家族で住んでるの？」

「うーん。三人家族。」

（父さん、鳳翔さん、ごめんね。三人家族になっちゃった。いいよね。）

（あおい）「それじゃあ、お父さんは、提督？」

「うーん、まだ提督じゃないよ。」

（あおい）「まだって？」

「うん。こつちに来たばっかだし・・・詳しいことはまだ聞いてないよ。」

(由美) 「ねえねえ、睦ちゃんちに行ってもいい？」

「およ？ ウチ？」

(由美) 「うん！ 鎮守府って、どんなところか見てみたいんだあ だめ？」

「うーん、そればかりは、提督さんに聞いてみないと．．．なんとも言えないよ。」

(由美) 「じゃあ、聞いてみて！ お願ひ!!」

両手を合わせてお願ひポーズだ。

さすがにそこまでされて断れる睦では無かった．．．

「うう、分かった。聞いてみるよ。」

(由美) 「ありがとう！」

(和美) 「あ、その時は私も！」

(あおい) 「ずる！ わたしも！」

三人とも、来たい、という．．．

睦は、苦笑いしか出来なかった。

(はあ、帰ったら父さんに聞けなきや。 まったく、初日から大変にや．．．)

(由美) 「じゃあ、今日のお昼ご飯も一緒に食べようよ？」

「え？ いいよ。」

(あおい、和美) 「あたしも、ね？」

「うん！」

その頃、秦は校長と話し込んでいた。

「楠木提督は、以前は舞鶴におられたとか。」

「ええ。1年ほど前までは、ですけど。それからは予備役でして。」

「そうでしたか。では、横須賀は初めてで？」

「それでもありません。任官したばかりのころ、横須賀に研修で居ました。もう、何年も前になりますけど……」

「この街も、だいぶ変わったでしょう？」

「そうですね。街自体の趣は変わってないように思いますが、個々の建物は変わっていませんね。」

「はははっ。そうですね。街は発展し続けますから。それはそうと、この学校の児童の親には鎮守府で働いている者も多数おります。鎮守府勤務だから、とご心配はいらないと思いますし、教員も理解させておりますのでご安心ください。」

「ありがとうございます。とはいっても、鎮守府内に住んでいる人はいないでしょう？　そこは若干気になりますが。」

「ご心配には及ばないでしょう。ま、何かあれば、担任からもご連絡させますので。」

「分かりました。では、お任せいたします。」

話が終わった秦は、学校を後にし、鎮守府へと戻っていった。

寮に帰り着いた秦は、居間のソファアームにドカッと身体を預けた。

「ふー。学校への挨拶だけで結構疲れるなあ。」

と呟いた。

そこへ鳳翔がやってきた。

「お疲れ様です。提督。」

お茶を煎れた急須と湯呑をお盆に載せて。

「お茶、いかがですか?」

「ああ。貰うよ。」

急須から湯呑にお茶を煎れて・・・テーブルの上に置いた。

鳳翔も自分用の湯呑にお茶を煎れて、秦の隣に座った。

湯呑を持って、スーっとお茶の匂いをかいだ。

お茶のいい匂いが鼻を抜けていく。

「いい匂いだ。」

そう言ってお茶を啜った。

「うん、ちょうどいい温度だ。」

「はい。お茶はリラックス効果もありますから。」

と鳳翔が言った。

「ありがとう。落ち着くよ。」

そう言つて鳳翔を見た。

鳳翔もお茶を啜つて、湯呑を手に持ったまま、秦を見ていた。

そして……

「あの、提督？」

「ん、なんだい？」

「あ、あの、お願いが、あるんです、けど……」

「お願い？」

鳳翔の頬が赤くなつていくのを見て取れた。

「はい……あの、その、通常、私は空母寮に、入るのですが……できれば、ここに、住まわせて、頂ければ……と……。家事もお洗濯も、やりますので、ですから……」

鳳翔はここに住まわせてほしいと。

「空母寮？　なんだ？　そんなことか。」

何のお願いかと心配した秦だったが、内心、ホツとしていた。

「ここに居ればいいよ。　　というか、ここに居てくれるかい？　いや、違うな。」

秦は返す言葉を探していた。そして・・・

「鳳翔さん。君にはここに居て欲しい。」

鳳翔に、ここに居て欲しいと、真剣な顔で答えた。

湯呑をテーブルに置いて、鳳翔の手を握った。そして見つめた。

「鳳翔さん。君は既に楠木家の一員だよ。睦もそう思ってるよ。それに、俺が復帰

したとして、君には秘書艦をやってもらうつもりだし。」

鳳翔も秦を見つめていた。

「その場合、空母寮に居るより、ここに居てくれた方が何かと都合がいいしね。ま、これは建前だけ。」

そうやって秦は小さく頷き、改めて鳳翔を見つめた。

「もつとも、俺個人としては君に居てもらおうと、嬉しいんだが・・・」

そう言うと、秦の頬も赤くなっていくのが分かった。

「いいのですか？ここに居ても・・・」

鳳翔の目に涙が溢れてきた。

「ああ。」

「あ、ありがとうございます。」

そうやって秦の胸に飛び込んだ。

小さな肩が小刻みに震えていた。

「ようやく、言えました。そして、言ってもらえました。嬉しい……」

そう言いつつ、秦の服を掴んでいた。離しません、と言わんばかりに。

その鳳翔の身体を秦の腕が包んでいた。

それ以上、二人は何も言わなかった。

鳳翔が顔を上げるとそこには秦の顔があった。

何も言わなかったが、二人の顔が近づく……

二人が求めるモノが、すぐ目の前にあった。

秦の手が鳳翔の前髪を鋤く。

「綺麗な髪だね。」

鳳翔が目を閉じると、秦の唇がすーっと近づいて、鳳翔の唇を捉える。

んっ。

と、二人の吐息が聞こえた。

ほんの数秒間だったが、今の二人には十分だった。

唇が離れたその時の二人の顔は、互いに微笑んでいた。

再び鳳翔が秦の胸にもたれかかる。

秦はソファアーにもたれながら、片腕は鳳翔の身体を抱き、もう片方の手で頭をゆつく

りと撫でている。

恋人同士、抱き合っているふうに見えていた。

この状態でも、十分、満足していた。

そのまま時間だけが過ぎて行つた。

しばらく二人はそうしていたが、時刻は午後一時を過ぎていた。

そして……ぐーっつと盛大に秦の腹の虫が、いや、腹に巢食う獣が吠えた。

突然のことで「はははっ」「ふふふつ」と二人は笑いあつた。

「お昼にしましうー！」

と鳳翔が言い、

「ああ。腹減つた！」

と秦が応えた。

二人してダイニングルームへと入っていった。

赤城の思い

午後、秦は寮の周りを散策していた。

居間から見えた海の方へと歩いていった。

そこは、港湾施設という雰囲気ではなく、港の端っこ、と言った方が似合っているかもしれない。

すぐそばに崖が海に落ち込んでいる、磯の様になっていた。

護岸と崖の間から波打ち際へ降りて行けるような、小さな獣道っぽい道があった。降りてみると、その先には小さいながら砂浜になっていた。

「ふうん、ここは小さい浜になってるんだ……」

少し歩いたあと、岩に腰かけてしばらく浜を、海を見ていた。

海からの潮風が心地いい。

後ろが崖なので風が強くなく、崖の上の木々が僅かに揺れている。

(静かだな。)

そう思っていると、

「提督?!」

と声を掛けられた。

ふと声のする方向をみると、鳳翔だった。

鳳翔が護岸の上から秦に向けて手を振っていた。

「そつちへ上がるよ。待つてて。」

と言つて秦は砂浜から護岸の上へ上がつていった。

「ふう。 どうした？」

「いえ、先ほどから提督の姿が見えないので探していたのです。」

俺を探していた？ と不思議がるが・・・

「赤城ちゃん提督にお話があると言つて、来ています。」

「分かつた。 行こう。」

寮に戻ると、大広間に赤城が待つていた。

「すまないね。 待たせてしまつて。」

「いえ、こちらが押しかけて来ましたから、お気づかないなく。」

「で、お話とは？」

そこへ鳳翔が紅茶を入れて持つてきた。

赤城と秦の前にティーカップを置き、出て行こうとしたが、秦が引き留めた。

「鳳翔さん、君はここに。 いいよね？」

秦の隣を指し、テーブルにつかせた。

「はい。一緒にお聞き頂ければと。」

赤城が答えた。

一口紅茶を飲んでから、赤城は話し始めた。少々俯き加減で。

「実は、秋吉提督の事なんですが・・・最近、あまり体調が思わしくなく、時々寝込むことがあるんです。」

「体調が思わしくない？　なんかの病気かい？」

「はい。以前の検診で・・・ステージⅢの癌が見つかりまして・・・今は投薬で痛みを抑えているんですが、どうも薬の効き目が弱まってきているようで・・・」

初耳だった。秋吉中将が、癌？だったなんて。しかもステージⅢだなんて。

「それで、治療は？」

「それが・・・治療を、摘出手術を拒まれてまして・・・」

「じゃ、投薬って、抗癌剤治療を？　放射線治療は？」

「お医者様の話ですと、もうそろそろ効果が出ないので、と。」

「じゃあ・・・」

「はい。余命幾ばくも、無いと。」

「なんてこった・・・そんなに・・・」

秦は驚きから絶句へと。

隣で鳳翔が手を口元にあてていた。

二人は赤城を見ていた。

「ですから、大佐からお話があったときは、なんとタイミングがいいことだ、と。」

「それって……」

「はい。秋吉中将は、自分の後任に、楠木予備役大佐を据えようとお考えです。」

「はいい?!」

秋吉は、自分の後任に秦を据えようとしていることを聞いて、驚いた。が。

「じゃ、呉の方はどうするんだ?」

「はい、呉には中将の考えに近い提督を配するつもりなのですが……」

「! ちよつと待て。待つてくれ。それって、俺を横須賀の提督つてことか?」

「そう言う事になります。」

「俺は恩師組でもなけりや、エリートでもないぞ。しかも、予備役から復帰する大佐だぞ。」

「はい。」

「はい。それですが、明日の辞令なのですが、大佐ではなく、准将として復帰することになっていきます。」

「な? そんな無茶な…… 予備役から復帰するのに、さらに昇進だつてえ?」

秦は、ハツとする。

この提督用の官舎は、将官クラスが入る官舎だったからだ。

(そこまで見越して……)

「無茶は承知で、中将はされました。ですから、中将の思いを、お聞き届けください。

お願いいたします。」

赤城は目に涙を浮かべながら頭を下げてきた。

下げた事で涙がテーブルに落ちていく。

「赤城さん。とにかく、顔を上げて。その状態だと、話も出来ないよ。ね？」

赤城はゆつくりと顔を上げるが、涙は止まることなく落ちていく。

秦がゆつくりと話始めた。

「赤城さん、俺が復帰すること自体については、既に中将との間で合意しているから問題にはならないよ。でも……俺が中将の後を継いで横須賀の提督に、というのは……承知し兼ねるよ。」

もつとも、人事については、いくら中将と言えども思い通りにはならないだろう。人事は、海軍省やらが決める事だからね。」

秦は一拍の間を置いた。

「それに……俺は……これ以上、ひとの言い分で動く駒になりたいとは思ってないん

だよ。本心を言えば……呉で運営がまともに回るようになれば、第一線を退くつもりだしね。」

そう話し終えると、紅茶を飲みほした。

「では、大佐は、いずれは軍を、去るおつもり、と……」

「ああ。去ろうと思ってる。その時は予備役でもなく、退役でね。」

「そ、そんな！」

赤城が声を荒げる。

「では、提督の、中将の思いを受けるおつもりは、無いと、仰るのですね？」

「そうは言っていない！」

と秦も声を上げる。

「何も、無い、とは言っていない！ただ、俺を横須賀の、中将の後任にしようとするのは……受け兼ねる、と言っているのだ。」

秦は混乱していた。

一気に言われて、どうするべきか、迷っていた。

そんな秦の手を、スツと握る手があった。

秦よりも小さな、柔らかい手が。

そう。鳳翔の手だった。

秦は鳳翔を見た。

鳳翔の顔は、大丈夫、と言っているように、少し微笑んで見えた。

その顔をみて、秦は大きく深呼吸をする。

「赤城さん。さつきも言ったように、明日の辞令は問題無い。その後、ここで勤務することも問題無い。ただし！そこから先のことは、聞かなかったことにしてくれ。」

中将の思いも、君の思いもあるだろうが、これ以上の話は無かったことにしてくれないか？ 今日の話は忘れる。今の俺には……荷が重すぎる、とだけ言っておくよ。」

「それは、どういうことですか？」赤城が問う。

「今の言葉以上でも、以下でも無い。そのままだよ。」

「では、私たちには、まだ、望みはあると。」

「そうは言わない。ただ、結論は……まだ、早いだろう。……そういうことだ。」

しばらくの間、無言の時間が流れる。

そして赤城が口を開いた。

「分かりました。今日のところは、これで失礼致します。が、今後のことは……少しでも考えておいてください。」

「……分かった。」

秦は最後にそう言った。

それしか返答できなかった。

そして……

「赤城さん？ 君は中将を、秋吉提督の事を？」

席を立とうとした赤城の動きが止まる。

「はい。 はつきりとした気持ちは言えませんが、私は、提督をお慕い申し上げています。」

その一言を言つて、出て行つた。

秦と鳳翔はしばらく座つたまま、手を握り合つたまま、無言でいた。

「すまないな。 鳳翔さん。 はつきりと言えなくて。」

「いいえ。 元はと言えば、私が悪いのです。 ですから……」

「それは違う。 違つよ、鳳翔さん。 俺は、前にも言つたけど、提督をすることは、嫌いじゃ無い。 ただ、正常に廻っている他人が作り上げてきた、艦娘との関係を横から現れた俺が出しやばる気には、なれないんだよ。」

俯きながら秦が話す。

「ましてや、上官が病気で倒れたからと言つて、のこのことその後釜に座る気も無い。だから…… 決められない。 いや、分からないよ。 先の事なんて。」

秦は……正直に今の心境を鳳翔に言つた。

人は、他人から頼りにされることは、嬉しい事だと思ふ。思うが、過剰な期待は、嬉しいより、不安や恐怖心が先に立つのが、今の秦だった。

そんな秦の手を、ずっと握っていた鳳翔が言う・・・。

「私は、貴方がいい、と思う方向を選べば、それに付いていくだけです。ですから・・・
貴方の好きなように進んでください。」

そう微笑みながら言った。「提督」ではなく「貴方」と。

「ん、ありがとう。その時は、その時だな。」

と秦は答えた。鳳翔の微笑みに返すように、秦も微笑んで。

秦は、鳳翔に「貴方」と呼ばれた事に素直に嬉しかった。

鳳翔も「貴方」と呼んだ事に一つの胸のつかえが取れた感じがしていた。

お互い見つめ合ったまま、手を握り合っていた。

◇

そこへ睦がスキップをしながら帰ってきた。

きょう一日の出来事を報告しなくちや、と思っていた。

玄関から大広間に入ろうとしたところ・・・

「ただい・・・」

と言いかけて、止めた。

テーブルの上で、互いの手を握り合っている秦と鳳翔を見つけていた。

(もう！ 父さんたら、鳳翔さんと手を握ってんじやん！ あ、鳳翔さん、笑ってる。って事は……)

しばし様子をうかがっていたが……一向に終わる気配が無い。

とうとう痺れを切らせてしまった。

「むう！ いつまで二人の世界にいるにや！ 可愛い娘をほつたらかしにして！」
と睦が大声で入ってきた。

「はうっ！」

と二人の驚きの声が同時に上がる。

「まったく！ 一体、何時間、手を握ってるつもりにや!!」

ほんの数分、いや十数分だったかを、何時間と言われた。

「何でもないから。」「そうよ、何でもないから。」

そう二人が言って、手を引つ込めた。

「その割には、あつううく手を握ってましたなあ!？」

にひひひと笑い声が見える、そんな睦の顔がそこにあった。

秦と鳳翔の二人の顔が赤くなる、が、それでも視線だけは離さなかった。

睦がハツとする。何かを思い出したようだ。

「うー、話が変わるんだけどさ……」

「何かな？」

「えつとね…… 今日、学校で友達が出来ただけど……ウチに来たいって言うの。

いいかな？」

「ウチに？」

「うん。だめ？」

睦が申し訳なさそうに、上目づかいで懇願してきた。

「はあ。仕方ないなあ。ウチだけならね。鎮守府内は自由行動はダメだぞ。そ

れでいいなら、ね？」

秦が……折れた。

「あ、ありがとう！ 父さん！」

睦が抱きついてきて、ありがとうと言った。

秦も抱き着かれて満更では無かった。が！ 睦の次の言葉で顔色が変わる……

「でね、ちよつと問題があつて……」

「問題？」 秦と鳳翔が首をかしげたが……

「実は…… 家族って話をしたの。あたしと父さんと鳳翔さんとを。」

「は？」

「だ・か・ら、三人家族になつてるから。」

なんだか、睦の顔がニヤついている。

「はい？」

「あたしと・・・」

秦を指して「父さんと・・・」 うん

次に鳳翔を指して「お母さん・・・」 はい？

「・・・と言ふことで。」

そこまで言つてにつこり、満面の笑みで二人を見た。

「え~~~~!!」

秦と鳳翔が同時に大声をあげた。

「わ、私が、お母さん、ですか？」

鳳翔の顔が一瞬で真っ赤になった。

「それって・・・私と提督と・・・その・・・夫・婦・・・」

そこまで聞いた秦も顔が真っ赤になつていく。

「む、睦！ な、なに勝手な事を！」

鳳翔は両手で顔を覆って俯いてしまった。

「ええ、二人は嫌なの？ あんなにアツアツなのに。 さっきはお互いを見つめて笑ってたくせにい。」

秦は、確信犯だな、と思ったが、睦の目が、目が疑っている。視線が痛い！

「睦い、わざとだな？ こいつめ！」

秦は睦の頭をげんこつ一発！といきたかったが、それでは大人げないと踏みとどまった。踏みとどまったが、握った拳がプルプル震えている・・・

「まあ、そう言う事だから。 よろしくね。 父さん、お母さん！」

そう言って秦と鳳翔の腕に抱きつく睦であった。

ここに三人家族が一组、誕生、してしまつたのである。

辞令

秦との会談のあと、赤城は秋吉の部屋まで来ていた。

秋吉は朝からベットにて伏せつていた。

「どうした？ 赤城？」

そう声を掛ける。

なぜなら、目が赤く腫れ上がっていたからだ。

「いえ、何でもありません。」

「嘘つけ。そんな顔をしておいて、何にも無いわけがなからう？」

「はあ。提督にはかえませんね。」

と肩を落として見せた。

「ワシに内緒で楠木に会いに行つたんだらう？ 違うか？ で、どうだった？」

「はい……。明日の辞令は問題無く受けるそうです。ただ……」

「それ以降の話は拒否された、違うか？」

「いえ、聞かなかつたことに、と。」

「そうか……。あいつらしいと言えばあいつらしい事だ。」

「申し訳ありません。ご意向に添えず……。」

「いや、いい。もつとも、赤城らしくないがな。」

秋吉はそう言って、はははと笑った。

「あいつのことだ。人の思いを無駄にはせんよ。優柔不断と思ったのかもしれないが、あやつは、結局のところ、優しすぎるのだ。自分の事を二の次にしてしまつてな。

舞鶴の時もそうだったな。本人は事実無根と声を上げていたが、上はそうは見なかつた……。あいつだけを処分にせず、あやつと共に逆らつた艦娘まで処分しようとした。

それを聞いたあやつが、自分が一切の責任を取ると言つてな……。その結果はお前も知つての通りだ。

ふふふ。今回も鳳翔をMPに突き出せばそれで済んだモノをそうしなかつたからな。優しすぎるのだよ。自分を守ろうという考えが第一では無いのだからな。」

そう言つて目を瞑つた。

(楠木よ……。貴様には悪いが、ワシの思い通りにさせてもらうぞ。)

そう思うのだった。

◇

翌日。

今日は朝から緊張している。

そう。新たな辞令を受けるためだ。
時刻は9時。

秋吉の執務室のドアを叩いた。

「どつて。」

と中から女性の声が出た。

「失礼致します。」

と秦が返事をして部屋に入った。鳳翔を伴つて。

秦は白の軍装、鳳翔は桜色の着物に袴姿だ。左の襟元に錨と桜の模様の染めがされている。

「おはようございます。中将。楠木予備役大佐、鳳翔、参りました。」

そう秦が挨拶した。

机の前まで進んだ秦と鳳翔に対し、秋吉が紙を出して読み上げる。

「良く来たな。では、辞令を読み上げる。」

秦が姿勢を正す。

「楠木予備役大佐、本日ただいまを以て予備役から復帰するものとする。復帰後の任地は横須賀鎮守府とし、鎮守府付き准将とする。また、艦娘、鳳翔を准将の監督下に置くものとする。」

「はっ。 謹んでお受けいたします。」

と秦が答えると、

「はい。 お受けいたします。」

と鳳翔も答えた。

さらに秋吉が話す。

「これで、鳳翔の一件は、片が付いた。 これでいいんだろ、鳳翔？」

「はい。 ありがとうございます。」

「楠木よ。 鳳翔をどうするのだ？ 秘書艦にするか？」

「はい。 秘書艦として私の傍に居てもらいます。 というか、すでに楠木家の一員で

すね。 睦も私も、そう思っていますから。」

そう言つて鳳翔を見た。 鳳翔も秦を見ていた。 二人の視線が重なる。

「そうか。 ならいい。 それと、もう一つ辞令がある。」

「もう一つですか？」

「そうだ。 もう一つだ。」

そう言つて秋吉がもう一枚の紙を読み上げる。

「楠木准将。 ただいまを以て横須賀鎮守府副提督を命ず。 同時に現提督・秋吉の補

佐を命じる。 速やかに在地の艦娘との関係性を構築すべし。」と。

秦はため息をつく。

「やはり、そう来ましたか。薄々そう来るのではと思っていました。」

「貴様のことだ。分かっていたんだろ？」

「ええ。ある程度は予想していました。でも……」

「ワシの余命は、長くない。ウダウダ言ってる暇は無いぞ。」

「……分かりました。どうなるかは神のみぞ知る、ですが…… 楠木准将、微

力を尽くします。」

と改めて敬礼をする。

「頼むぞ。赤城、楠木を補佐してやってくれ。」

「はい、分かりました。ですが……」

「ん？ 何か問題でも？」

「楠木提督には、お母様、鳳翔さんがいらっしやるので、私の出番は無いかと。」

と赤城が謙遜しながら言った。

「あら、そんなことありませんよ。鎮守府の運営は赤城ちゃん、あなたが補佐してくだ

さいな。」

にっこり微笑みながら鳳翔が答えていた。

さくらに、

「私は、いずれ楠木提督の元に参るつもりですから。」

と付け加えて答えた。

赤城が驚いた顔をしていた。

「ええ、私もそのつもりでいますので。」

と秦も追い打ちを掛けた。

「なんだ？ お前達、もうそんなことまで決めているのか？」

と秋吉は呆れたように話した。

秦と鳳翔は互いを見詰め、ふふふつと笑っていた。

「まあ、艦娘といえども、元は人である訳だし、お前達の恋路には口は挟まんよ。」

そう。艦娘といえど、元は普通の人である。ただ、艦と精神同調が出来て艦を自分

の意のままに操れる、という特殊能力を持つてはいるが。

“建造”によって自らに相応しい関係ができ、“解体”によって関係が切られることが分かっているに過ぎないのが、“艦娘”と“艦”との繋がりであった。

軍は、その特殊能力を対深海棲艦に利用しているに過ぎなかった。

「ああ、そうだ。」

と秋吉が声を上げた。

「鳳翔の“艦”だが、呉ですでにスクラップにされていたよ。で、新たな“艦”が必要に

なるんだったら、ワシの方で手配するが、どうだ？」

「はあ。 “艦”が無くとも、今のうちは何とかなりますが・・・そのうち、そうもいかないのでしょね。」

「もし、“艦”が要るのなら、1隻、改造中のあるから、使ってもいいぞ。」

「改造中ですか？」

「ああ。詳しくは、後で聞いてくれ。赤城に説明させる。」

「はっ、ありがとうございます。」

と、敬礼をした。そして鳳翔に向かって聞いた。

「鳳翔さんは、どんなふうに変更したいっていうのはあるの？」

「いえ、提督の思うように改造してください。私は提督に付いていくだけですから。」

「そう？ わかったよ。」

「それと、名前を呼ぶときは、「さん」付けは要りませんからね。鳳翔とお呼びください。正式に提督の秘書艦になりましたから。」

「ああ。分かった。」

一通りの辞令式は終わった。

「以上だ。退室していいぞ。あ、副提督室は赤城に案内させる。また、後でな。」

「では、失礼いたします。」

と鳳翔と共に敬礼をして、提督室を後にした。

◇

赤城に案内され、副提督の執務室にやってきた。

秋吉の執務室にくらべ、ひと回りほど小さかったが、必要な什器、提督用机、秘書艦用机、応接セット、給湯室、本棚などは揃っていた。

秦が提督席につき、鳳翔が秘書艦席についた。

この配置で座るのは初めてだったが、二人の視線が合つて、思わず笑ってしまった。

「妙な感じだな。」

「いかがですか？ 提督の席のご感想は？」と赤城が聞いた。

「ん？ 悪くはない、というか、あんまり変わらんかと、思うよ。で、早速だけど……」

「お母様の、鳳翔さんの“艦”ですね？」

「ああ。改造中ってことだったけど、どういう事かな？」

「では、お話しいたしますね。」

改造中の“艦”は、元は外航用の客船だったものを航空母艦に改造をしています。所謂、改造空母ですね。

横須賀の1番ドックで改造を行っていますが、基本的な艤装はほぼ完了している状態です。

“艦”の諸元は、全長220m、飛行甲板長210m、搭載機数は常用補用あわせて50機程搭載可能、船体にバルジを取り付けてあって、最大速度34ノット、巡行速度18ノットで12000カイリ、基準排水量3万トンです。

兵装は、60口径12.7cm両用砲を艦橋アイランドの前後に2基4門、25mm連装機銃改を6基、同3連装機銃改を4基、対水雷用爆雷投射機6基、30連対空噴進砲4基を搭載しています。

これ以外に、新式の蒸気カタパルト2基を設置しています。エレベーター2基、着艦装置、着艦誘導装置一式は新型のモノを搭載しています。

対空、対水上電探、水中聴音は新型を装備しています。なお、25番まで耐えうる対爆甲板を施してあります。」

「そうなんだ。 ほぼ完了っていう、認識でいいのかな?」

「そうですね。 あとは、精神同調、ですね。」

「分かった。 ありがとう。」

「これだけの装備があれば、ほぼ言う事はなかったが、

「鳳翔さ……ん。 鳳翔、装備はどう?」

「そうですね、十分だと思います。」

「あとは、搭載機だね。」

「艦戦は烈風改を16機、艦攻は流星改を12機、艦爆は彗星21型を12機、偵察機は夜間偵察も可能な機体を6機を予定しています。」

「バランスを取ったね。」

「航空隊は、富津の航空基地に待機しています。予備機も配備してあります。」

「もう配備済みなんだね。」

「はい。それから、秋吉中将との直通回線をココに完備してありますので、ご利用ください。」

と机上の黒電話を指して説明した。

「楠木提督の艦娘は、今、鳳翔さんだけです、秘書艦を複数配置することが出来ます。」

秋吉中将は私以外にも当番制で秘書艦を受け持つ艦娘がいますので、おいおい、ご紹介できると思います。」

「当番制？　って、後は誰がいるの？」

「あとは、加賀さん、霧島さん、阿武隈さん、ですかね。」

「ん、了解したよ。」

「それでは、なにかありましたらお呼びください。失礼致します。」

と赤城が部屋を出て行った。

残った二人だったが、

「では、提督。お茶を入れますね。」

と鳳翔がお茶を煎れてくれた。

二人でソファアームに座って、仲良くお茶をすすっていた。

「はあ．．． やつと落ち着いたか、な。」

「ええ。」

と、この一瞬でも落ち着けることに感謝しながら。

“お母さん”呼び

昼食時。

秦は鳳翔を伴って食堂にきた。

もちろん、昼食を摂るためである。

二人は滅多に食堂に来ない。

なんせ、寮で鳳翔が作ってくれるから。

また、睡もいるため、朝、夕は特に食堂には来ないのだ。

賑やかな話し声が外まで聞こえる。

ガラリと入口の引き戸を開けて中に入った。

既に食堂はいっぱいのようにだった。

戦艦娘、空母娘、駆逐艦娘などなど。

当然、駆逐艦娘が一番多かった。

「お邪魔するよ。」

と秦が声を掛けて入ってきた。

「あー！ 新しい司令官なのですー！」

「遊んでええ、しれえ！」

「ん、どれどれ？ どいつが提督だつて？」

「クズが何しに來たのよ？」

「ハツ、新人提督ね？」

などなど、いろんな声が聞こえてきた。

（中将は、クズ呼ばわりされてたのか・・・）

主だった駆逐艦の面々はいいとしても、相変わらず口が悪い。

“クズ”と言ったのは・・・霞か？

「霞か？ 誰がクズだよ？」

「あ？ アンタ以外に誰がいるのよ。」

“新人”と言つたは、満潮か？

「満潮？ なんで俺が新人なんだよ？」

「ここは初めてでしょ？ それ以外に何があるのよ。」

「もうちよつと、良い言い方があるだろうにさあ。」

「は？ あると思つてんの？」

秦がグツと、押し黙る。

言い返せない・・・

まったく、この二人にはかなわん、と思った。

隣で鳳翔が、笑いを堪えている……。

手で口を押えて。

無視を決め込む秦だったが……

「あら？ アタシを無視するのかしら。 このクズ！」

身も蓋もない事をいう。

「はあ、無視してる訳じゃないよ。 ちゃんと聞こえてるよ？」

「だったら、返事くらいしなさいよ。 このクズ！」

秦は、霞らしい言い草だな、と思いつつ、

「分かったよ。」

そう言つて、改めてみんなに向いて……

「こんにちは。 本日付けを以て、ここ横須賀の副提督に着任した楠木です。 前任地

は舞鶴だよ。 だから、新人ではないから。 よろしくね。 で、今はお昼をよばれに

来たよ。」

と秦が言う。

そして、霞の頭を撫でながら、

「よろしくね。」

と声を掛けた。

「!! こ、子ども扱いしないでよね、このクス!!」

そういつつ秦の手を払おうとする。

それを見ていた満潮がうらやましそうに、

「あ、あたしは?」

と頬を赤めながら言う。

霞の次に満潮の頭を撫でた。

「こちらも、よろしくね。」と言つて。

満潮は満更でもなさそうな顔をしている。撫でていると・・・

「い、いつまで撫でてんのよ! いい加減にしなさいよね!!」とプイと顔を叛けてしまつた。

その騒ぎを聞きつけてか・・・

「あら、若提督。いらつしやい。鳳翔さんも。」

とカウンターの向こうから間宮が声を掛けてくれた。

「こんにちは、間宮さん。」

間宮は秦の事を「若提督」と呼ぶ。

確かに、秋吉より若いが・・・

なぜかこっぴどくかしい。

今日のお昼のメニューはなんだろうな？

「今日は、黒酢豚ですよ。」

そう言われて、お盆を取って、ご飯、漬物、お味噌汁、主菜と載せていく。

最後にお茶を煎れて、空いていた席についた。

鳳翔も同様にお盆をもって秦の向かいに座った。

お互い手を合わせて

「いただきます。」と。

お味噌汁を一口飲んでからご飯へと箸を進める。

ご飯は柔らかすぎず、それでいて芯があつて、美味しい。

黒酢豚の具材は一口大に切られている。

どれも餡が絡んで美味しそうだった。

豚肉。

柔らかく箸で十分切れるほどだ。

ピーマンの緑が鮮やかだった。

人参もしっかりとした歯ごたえで、かつ堅くなく出来ている。

他に筍、玉ねぎが入っていた。

餡は、ちよつと濃いめの味付けであつた。

うん、ご飯が進むのだった。

「ごちそうさま。」

と二人はほぼ同時に食事を終えた。

終えた途端、秦は捕まつた。

「しれえかん！ あそぶびよん！」

と飛びつかれた。

わあ！ と驚いて声を上げた。

「こらー！ 卯月！ びっくりするだろう！」

「しれえかん！ うーちゃんと遊んでびよん！」

「あら？ 私はお話したいわ。どうかしら？」

と声を掛けてきたのは村雨だった。

なんか、もみくちやにされかけている秦だったが、そこへ凜とした声が掛かった。

「あなたたち、提督が困っているわよ。いい加減になさい。」と。

見ると、青の肌襦袢に白の弓道着、青の袴風スカートを纏った加賀だった。

取り巻きの連中から「ええ〜っ」と嘆きの声が上がった。

「あら。加賀ちゃん？」

「お久しぶりです。 鳳翔さん。 いえ、お母様。」

「加賀ちゃんもご飯？」

「はい。 そちらが副提督なのですね？」

「ああ。 楠木です。 よろしく。」

「そうですか。 こちらこそよろしく。」

軽くお辞儀をして、カウンターへ向かったが、何か頬が赤かったような気がしていた。

「いらつしやい、加賀さん。 いつもの、ね？」

「はい。 いつもの、でお願いします。」

（ん？ いつもの？） 秦は小声で鳳翔に聞く。

（はい。 いつものサイズですね。 見ていれば分かりますよ？） とニコリとして返

答する。

「はい。 加賀さん、ご飯とおかずね。」

加賀が持っているお盆を見ると、確かにご飯とおかず、小鉢が並んでいたが、

ご飯、主菜、味噌汁もどんぶりサイズ以上。

小鉢も皆より大きな味噌汁椀サイズだった。

秦も、過去、大喰らいの戦艦娘を見てきたことはあるが、現役一航戦は初めてであつ

たため、正直、面を喰らっている。

(ゲ!! なんじゃ、あのサイズは!!!)

(驚きましたか? 彼女はあれで普通ですよ?)

(マジか!)

(はい。赤城ちゃんも相当ですから。)

(うそッ!! はあ・・・あれが一航戦・・・さすがというか、なんとというか・・・)

言葉を失った秦であつた。

お盆を持つて秦たちのいるテーブルにやってきた。

「卯月、どきなさい。」

「え〜」

「おどきなさい!」

と秦の隣に座っている卯月をどかせて、座つた。

「う〜、加賀さんのイジワルびよん!!」

加賀は・・・聞いちゃいない・・・。

手を合わせて「いただきます。」といつて食事を始めた。

ご飯、味噌汁、主菜と箸をつけていく。

休む間もなく食べ続けている。でも、頬は緩んでいるように秦には見えた。

その姿を秦は見ていた。

「何か、用ですか？ 女性の食事姿をまじまじと見るのは、感心しません。」

「いや、ごめん。 案外、美味しそうに食べるんだなあつと思つてさ。」

加賀の頬がピンク色に変わっていくのが分かった。

「ごめんね。 悪気があるわけじゃないんだ。」

「そうですか。」

そう言つて、食べ続けた。

秦が改めて目の前に座る鳳翔を見た。

「そう言えば・・・ 鳳翔を“お母さん”と呼ぶのは、一航戦の赤城さんと加賀さんの他は？」

「そうですねえ、 飛龍ちゃん、蒼龍ちゃん、翔鶴ちゃん、瑞鶴ちゃん、祥鳳ちゃん、瑞鳳ちゃんの6人は、ずっと私が弓を教えていましたし、空母寮でも食事の用意はしていただきましたから、“お母さん”と言いますねえ。」

「他の娘は？」

「他の空母娘たちは、弓を教えていませんが、それでも“お母さん”扱いますねえ。」

「10人ほどでしょうか。」

「ははっ。 それだけ“こども達”が居たら“お母さん”も大変だな。」

「はい、ホンットに大変です。 大喰い、大酒飲み、中には聞かん坊もいますから。」と

溜息をつきながら答えた。

秦の隣で一人、喉に詰まらせそうになって、ゴホゴホと咽ている。こどもが一人いた。

「大丈夫か、加賀さん？」

そう言つて加賀の背中をさすつていた。

「だ、大丈夫です。問題ありません。」

と気丈に返してきたが、その眼には苦し涙が残つていた。

それを見た秦が笑いながら「無理しなくてもいいんだよ、加賀さん。苦しいときは

苦しいって言いな？」と。

「な、なんでもありません。」とさつきよりも強めに答えた。

秦がフフフと笑つた。

「女性を見て、不敵に笑うのは、感心しません。何か用ですか？」

「いや、なに。鳳翔が母で加賀さんがこども」と思うと、可笑しくつてさ。」

加賀が首を傾げていた。

「俺からすると、加賀さんの頭をなでなでしなきゃならんのかつて思つたのさ。」

「なつ」そう言つて加賀の顔が赤くなつていく。

「もう、提督つたら。こども」と言つても、私が産んだわけではありませんからね

？」

「ああ。分かってるよ。分かってるけど、イメージが、な。」

そう言つてはははつと笑つた。

そんな秦を加賀は刺すような視線で見ている。

「気分が悪いです。お母様が居なければ、爆撃しています。ご注意を。」

その言葉に両手を小さく上げて、

「ごめん、ごめん。気を付けるよ。」と。

食べ続けている加賀を残し、秦と鳳翔は執務室に戻ろうと席を立つた。

「じゃ、俺たちは行くよ。ごゆつくり、加賀さん。鳳翔？ 行こうか。」

「ええ。」

とにこやかに応えた。

「またね、加賀ちゃん。」

食器を返して食堂を後にした。

楠木隊、出撃！

慣熟訓練

秦は鳳翔を伴って秋吉の執務室に来ていた。

「失礼いたします。楠木です。」

「おお。どうした？」

「はい。中將が先日仰っていました、鳳翔の“艦”の事で、ご相談にお邪魔いたしました。」

「ん？なんだ？」

「今ドックで改装中の、改造空母を頂きたいと思ひまして。」

「そんなことか。構わんぞ。好きに使ってくれて。何しろ、使ってくれる艦娘がないからな。」

「はっ、ありがとうございます。では、早速、使わせて頂きます。」

秦はそう言つて、次に鳳翔へと振り返つた。

「よかつた。いいね、鳳翔？」

ホツとした秦であつたが。

「はい。新たな私の“艦”として使わせて頂きます。」

と鳳翔が答えた。

「で、“艦”は1番ドックだったな？ 赤城よ？」

「はい。ほぼ艀装工事が完了していますから、すぐにでも使えるはずですよ。」

「艦籍の登録はこつちでやっておく。では、すぐ使うか？」

「はい。そのつもりです。」

「分かった。後は貴様に任せる。良きに使ってくれ。」

秋吉がそこまで言つて、思い出したように追加で声を出した。

「ああ、そうだ。空母だけでは訓練にはならんだろうから、ワシの所属から駆逐艦1隻を貴様にまわすことにするからな。」

「駆逐艦ですか？」

「そうだ。駆逐艦だ。鳳翔の随伴艦で使ってくれ。」

駆逐艦1隻を秦の配下にしてくれるという。

ま、トンボ釣りをを行う上で、空母以外で1隻の補助艦艇が必要となるから、有り難かつた。

「それで、誰になるのでしょうか？」

「赤城？」

秋吉は、赤城に答えるよう、即した。

「はい。楠木提督にお預けする駆逐艦は、夕雲型駆逐艦16番艦、朝霜ちゃんです。もう呼んでありますよ。」

赤城が続き部屋に入っけていき、一人の少女を連れて戻ってきた。

「朝霜ちゃん、入っけて。」

「失礼するよ！夕雲型駆逐艦16番艦、朝霜。以後、楠木提督の配下にてお世話になるわ！」

青白い？いや、銀髪か？長い髪を揺らせている。

秦がにこやかに挨拶する。

「楠木です。よろしく。で、こっちが……」

「楠木提督の秘書艦を務めています、鳳翔です。よろしくお願ひしますね。」

と鳳翔もにこやかに挨拶した。

「ほうしようさん？ひよつとして……元一航戦の？空母娘の母と言われてる？」

「あら？確かに私は元第一航空戦隊所属ですけど、そんなに立派でもありませんよ？」

「いえ！そんなことはありません！こちらこそ、よろしくお願ひ致します！」

と堅い敬礼をしていた。

そんな朝霜を微笑ましく見ている秦であった。

◇

今日は、鳳翔と艦との精神同調を行うため、1番ドックに来ていた。

問題が無ければ、慣熟訓練航海を行う為である。

横須賀は呉に次いで所属艦艇が多く、その分、港湾施設も大きく、数も多い。

そのうちの一つ、1番ドックに秦と鳳翔、朝霜が来ていた。

「ここが1番ドックのようだな。」

先日の赤城の話の通り、ほぼ艀装工事は完了しているようだった。

「こいつか……。」

岸壁に立って、艦を見上げていた。

「やはり、以前の艦より大きいですねえ。」

と鳳翔が言った。

“以前の艦”……鳳翔の初期艦は、空母として最初から設計された世界初の航空母艦であったが、

全長が約165m、速力が24ノット、搭載機数も20機程度と比べると、

全長でほぼ50m、速力で10ノット、搭載機数で30機あまりと、新型艦のほうが

大きい。

「実際、ひと回り以上大きいな。」

操艦のイメージもだいぶ違うだろう。」

「そうですね。前は、艦橋は甲板下にありましたが、この艦は、甲板上に艦橋がありますから。」

ドック内にあるといっても、既に進水しており、いつでも出航できる、といった具合だった。

「司令官？ アタイはどうすればいいのさ？」

「これから“鳳翔”の試験を行うから、朝霜は随伴として一緒に慣熟訓練に参加してもらうからね。なので、港の出口あたりで待機しててくれるかい？」

「了解ですうー！」と可愛く敬礼する。

そして、自分の“艦”へと走って行った。

では、と秦と鳳翔の二人は、艦橋へと登っていく。

この艦の羅針艦橋に登った。

指揮官席に秦が座り、艦娘席に鳳翔が座った。

戦闘指揮所は階下だった。

羅針艦橋の上に航空管制室があった。

既に妖精さんは配置についているようだった。

「では、これより、“鳳翔”との精神同調試験を行う。精神同調試験に引き続き、慣熟訓練に移る。」

と秦が今回の目的・指示を出した。

「了解しました。」

鳳翔が羅針艦橋内を一通り見廻したのち、

「提督、始めます。」

と言つて、艦との精神同調を始めた。

妖精さんとの共同作業だ。

〈精神同調、開始。〉

〈船体、船隔問題なし。各砲塔、各銃座、異常認められず。各装備、異常認められず。機

関、異常認めず。〉

〈各部・・・よし！〉

〈精神同調、完了！〉

「精神同調問題なし。各部異常なし。行けます。」

「よし。出航準備！」

「はい。出航準備。機関始動。」

微かな振動が足下から伝わってくる。

「妖精、各部配置。」

「各部、出航配置完了。」

「抜錨！」

「岸壁を離れる。前後スラスタ―始動。」

〈スラスタ―稼働、問題なし。〉

艦がゆつくりと岸壁を離れる。

「舳解け！」

艦と岸壁を繋ぐ舳を解いていく。

〈舳解け、完了！〉

岸壁から10mは離れただろうか。

「両舷前進微速。」

徐々に速度がでて、艦が前進を始める。

岸壁を離れ、港の出口を目指して進む。

出口付近で1隻の駆逐艦が待っていた。朝霜だ。

「待ってたよ、司令官、鳳翔さん！」

「うん、朝霜は鳳翔の前1000に就いてくれ。」

「了解！」

朝霜を先頭に、2艦は単縦陣で進む。

そして、そのままの速度で港を出た。

「港外に出ます。」

「了解。艦隊速度、原速へ。進路変更。進路房総沖南100kmへ。」

「進路変更、房総沖南100kmへ。」

◇

“朝霜”と“鳳翔”は海上を14ノットの速度で進んでいく。

秦はデツキへ出て、海を見ていた。

「うん。いい潮風だ。やっぱ、艦はこうでなきや。」

後に続いて鳳翔が来た。

「どうですか？ 久しぶりに海に出たご気分は。」

手すりに肘を掛けながら秦が答える。

「やっぱり、いいね。何か、ホツとするなあ。この肌で感じる潮風がいいね。」

「ふふ。提督は海の男という感じはしませんね、やっぱり。肌も色白ですし、日に焼

けていませんから。」

にこりと笑いながら鳳翔が言う。

「ええ？ そうかい？ 一年前まではちゃんと海に出てたんだけどなあ。“艦”に

乗って海に出て、結局は室内勤務みたいなもんだからなあ。日に焼ける事がないよ

な、確かに。」

秦も、はははっと笑っていた。

しばらく海の上を進んでいたが、

「よし。それじゃ、各機器のチェックをしてみよう。それと、富津の航空隊に連絡。発着艦訓練を行うと。朝霜には“鳳翔”の右後方2000に就くように連絡を。」

「了解しました。各機器のチェックを開始します。同時に、富津の航空隊に発着艦訓練を下令します。」

対空電探、対水上電探のチェックと試験が開始された。

同時に水中聴音も稼働した。

「報告。対空電探に異常なし。半径1万mまで電探の反応なし。」

「報告。聴音、異常なし。半径1000mに反応ありません。」

「報告。対水上電探に異常なし。正面一二時方向1000に駆逐艦、朝霜と、右舷二時方向5000に漁船らしき小型船の反応あり。数は2つ。」

「どれだ？」

秦が右側の窓から双眼鏡で確認をする。

「あれだな。・・・二時の方向、距離5000に小型船2を視認。どうやら漁船のようだな。進路からして・・・港へ帰るようだな。」

「朝霜？ 念のためだ。 漁船の確認をしておくれ。 確認後、“鳳翔”の後ろへ。」と秦が朝霜に連絡する。

「はああい。 了解です！」と朝霜が返事をする。

同時に舵を切って漁船へと向かう。

「第二戦速へ増速！ 速やかに確認するよ！」と妖精さんに激を飛ばす。

朝霜が鋭く回頭すると、あつという間に漁船に接近した。

「目標に接近。 船籍番号・・・確認。 三崎漁港所属の遠洋漁船と確認。 速度10ノット。 船体に異常見られず。 これより所定位置へ向かいます！」

「了解。 確認、ありがとう。」

「いい、いえ。 指示通りしたままでですから。」

朝霜はちよつと驚いていた。 司令官から“ありがとう”なんて言われたことが無かったから。

(なんか、心が熱くなりますね、これは。)

朝霜が鳳翔の右後方2000の位置に達した時、鳳翔の対空電探に反応があった。

「！ 対空電探に反応あり。 北東方向より接近する未確認編隊、多数確認、距離2万、高度5千！」

と妖精さんから第一報が入った。

「念のためだ。対空戦闘用意！」秦が対空戦闘を指示する。

12. 7cm砲の揚弾作業が始まる。

各銃座の銃身が空を狙う。

補充弾薬も準備万端となった。

「富津の航空隊かしら？ 確認できる？」

「しばしお待ちを。未確認編隊を視認！ 接近中の編隊は友軍ですね。

・・・富津

の航空隊です！」

「我、鳳翔第1飛行小隊。北東より高度5千で接近中なり。」

と航空隊から連絡が入った。

「よし、対空戦闘用意解除。これより、発着艦訓練を行う。まずは、タッチアンド

ゴーからだ。」

秦の指示で甲板上で着艦準備が始まった。

着艦指示灯に火が入る。

通常、制動索が引き出されるが、今回は要は無い。

捕獲網も用意されるのが普通なのだろうが、今回は出ていない。

甲板上ではタッチアンドゴーの準備が出来た。

艦の後方から烈風改の1番機が降下してきた。

〈高度500より降下〉

〈主脚降下!〉

〈着艦指示灯、視認!〉

〈降下角よし、方位よし。甲板クリア!〉

やや機首上げ気味に主脚が甲板に接地する。

ガツ つと音と振動がする。

同時にスロットルを開け、操縦桿を僅かに引き、甲板上を通過していく。

艦を通り越したかと思うと次の2番機が降りてきた。

そうして各機のタッチアンドゴーが終わると、着艦に移った。

「これより着艦に移る。」

先ほどは使われなかった制動索と捕獲網が用意される。

〈制動索、準備よし〉

〈捕獲網、準備よろし〉

再び1番機が降下してきた。

今度は着艦フックを下している。

〈主脚降下!、着艦フックダウン!〉

〈着艦指示灯、視認!〉

やや機首上げ気味に着艦フックを制動索に引っ掛ける。

主脚が接地し、制動索によって急ブレーキが掛かる。

機体が停止すると着艦フックを格納する。

捕獲網を一旦格納し、機体を捕獲網より前方に押し出す。

「どうでい！ 上手いもんだろ！」

と1番機の飛行妖精が言うが、

「何言ってるの！ 接地後あんなに飛び跳ねて！ まだまだ訓練が足りません！」

と鳳翔にダメを出されていた。

「うわっ、厳しいい！」と嘆いていた。

甲板後部では次の2番機に取り掛かる。

1番機は前方のエレベーターで格納庫に降りていく。

格納庫では燃料の補給が行われた。

一旦、全機が格納庫に収納され、補給の終わった1番機から後部のエレベーターで甲板上に引き出されていく。

「風に艦を立てよ。」

艦が風上に向かって速度を上げる。

今回はカタパルトは使用せずに発艦を行った。

〈エンジン定速回転〉

〈甲板上クリア〉

〈発艦始め!〉

〈滑走開始!〉

エンジン音が高鳴り、機体が甲板上を走っていく。

甲板を走りきるまでに、ふわりの機体が浮き上がっていく。

1番機が終われば、2番機、3番機と続いた。

着艦と発艦を繰り返した。

2度目の発艦はカタパルトを使った。

念のために風上に向かって発艦したものの、滑走による発艦作業よりかは、発艦時間は短かった。

とは言え、カタパルト使用に戸惑いが見られ、総時間は短かったが継続的な訓練が必要と判断された。

そして、鳳翔所属機全機の訓練が終わった。

その頃には日が傾きかけていた。

「ようし。今日の訓練はこれまで。」

鳳翔、朝霜、お疲れ様。

朝霜を先頭に、全艦港

へ帰るぞ。」

「了解しました。進路変更。進路横須賀港。」

「朝霜、了解です。」

朝霜を先頭に単縦陣で港を目指す。

「だいぶ、時間が掛かったね。」

「無理ありませんね。この艦に降りるのはみんな初めてですからね。」

「その割には、みんな上手かったね。さすが、鳳翔お艦の飛行妖精だな。」

「そうですね。結局、飛行妖精たちは呉から配属変更してきた、昔からの私所属の子たちですから。」

「そうだったな。」はははつと秦は笑っていた。

富津の飛行隊は、旧“鳳翔”所属だったものを秋吉が呼び寄せたものに、補充をしたものだ。

元々“鳳翔”隊は訓練が厳しかった事もあり、練度が高い妖精が多かった。

「でも、アタイは暇だったよ？ だってえ、誰も落ちないんだもん。」

「はははつ。そう言うな、朝霜。落ちないってことはみんな練度が高いってことだからさ。」

「それはそうだけど。やっぱりねえ、暇だよ。ヒ、マ、」

朝霜は暇すぎてむくれている様だった。

「そう言うが、知ってるぞ？　ちゃんと位置取りを変えて、左右の位置を確認してただろ？」

「えっ、なんで？　なんで、バレテル??」

「ははは。　即席の提督じゃないからな、俺は。　それくらいは見えるさ。　な？　鳳翔。」

「ええ。　ちゃんと位置取り出来てたわよ。」

朝霜の顔が赤かった。

「へへへ。」と笑っていた。

(ちゃんとしてるじゃん、今回の司令官は。)

そう言いつつ2隻と三人は帰港していった。

慣熟訓練の裏で

少し時間を遡る。

秦たちが房総沖で慣熟訓練をしていた最中、秋吉は大本営に呼ばれていた。

重厚な雰囲気の大本営会議室。

鎮守府とは全く違う雰囲気である。

秋吉はこの雰囲気は好きではなかった。

傍に秘書艦の赤城は居ない。

別室で待機中であつた。

何しろ、鎮守府ではトップの地位にある秋吉も、ここに来ると、あつという間に下つ端になる。

上座に海軍元帥、大将らを始め、軍令部のお歴々が居並ぶ。

参加者の中に、軍人とは思えない風貌の男が2人いた。

会議開始時刻になって元帥がおもむろに口を開く。

「今日、集まってもらつたのは他でもない。深海棲艦の奴らに動きがある。これに対処するための戦略会議だ。では、参謀、説明を。」

後ろに控えていた者が各員に1冊の冊子を配った。「作戦計画書（骨子）」と書かれていた。

その上で、参謀本部の大將が説明を始めた。

「過日、アメリカ軍より情報もたらされた。近々奴ら、深海棲艦どもの攻勢があるらしいと。予想される奴らの戦力は資料を見てくれたまえ。

かなりの戦力である。奴らの目的が関東らしいことまでは予想が付いている。

奴らの出現ポイントはハワイ方面までは判明している。

ハワイ方面からまっすぐ来るか、小笠原を廻り込むのか、は分かっていない。

対する我が方の戦力は、横須賀鎮守府所属の艦艇を中心に、呉、大湊から増援を組み入れ、戦艦8、正規空母4、軽空母4、重巡6、軽巡6、駆逐艦14だ。

これらの総指揮は元帥が、各艦隊の指揮は横須賀、呉、大湊の提督にやってもらおう。

横須賀隊は浦賀水道南方で、呉隊は西から、大湊隊は北東からの三方から攻撃を加える。それで撃退する。

なお、奴らの襲来予想日時まで、あと五日と推測されている。」

そこまで言つて一拍の間を開けた。

「それで、だ。奴らと戦闘になる前に進路上にある島々の住民3千人を避難してほしいと、知事からの要請が来ている。だが、奴らの戦力を考えると、我が方の戦力を避難

の為に裂くことは難しい。」

元帥が続けて言う。

「これ以上の艦艇の参加は、各鎮守府防衛に支障が出かねないのでな。そこでだ。秋吉。貴様のところに配属したばかりの空母が居たる？」

「は、居りますが。それがなにか？」

元帥が不敵にもニヤリとした。

「その空母に島民の避難をやらせる。いいな？」

「お待ちください。補助艦艇や輸送船は付くのですね？」

「何を言っている。補助艦艇など付けられる訳ないだろう。単独だよ。」

「お、お待ちください。避難をやらせるにしても空母1隻では危険が大きすぎるのでは、ありませんか。それでは、あまりに危険です。せめて……」

「その空母を率いているのは、あの舞鶴に居た楠木というではないか。ちようど良い。奴にやらせるのだ。」

「それは……失敗しても痛手はない、と……」

「ふん、分かっているではないか。現状において戦力外の奴らを、使つてやろうという、我らの暖かい配慮だよ。」

ガハハハハハという下品な笑い声が部屋に響いていた。

「ああ、忘れておったな。現在、小笠原の父島に近海防衛艦隊が居たな。奴らに手伝わさせる。」

父島の近海防衛艦隊・・・当地には軽巡1、駆逐艦4が哨戒と防衛のために駐留していた。これにも手伝わさせるといふ。

秋吉は反論すら出来なかつた。

会議はしばらく続いたが、大きな進展は見られなかつた。

そして、会議が終わつた。

元帥や大将たちは部屋を出ていくが、秋吉は席を立てなかつた。

(楠木・・・すまん。)

俯いたまま、テーブルの上に置いた拳を力いっぱい握つていた。

大本営の連中は、舞鶴での楠木の事を忘れたわけでは無かつた。

いつか、貶めてやる、と思つていたに違いないと秋吉は思つていた。

そのうち、赤城が扉を開けて入つてきた。

「提督？ いらつしや・・・るのですね。他の方々が出て行かれたのに、遅いので心配してましたよ。」

ニコリとして言つてくれた。

だが、秋吉の落ち込んだ態度、俯いたままでの姿をみて、ただ事ではない、と悟つた。

「良くない事がありましたか？」

「ああ。すまない。よくない事、か。確かにな。」

「そこまで言つて秋吉は黙つてしまった。」

「帰ろう。横須賀へ。」とそれだけ言つてまた黙つてしまった。

道中、腕を組んだまま、目を瞑つて一言も発しようとはしなかつた。

赤城も務めて話そうとはしなかつた。

そして……

「赤城。楠木を、准将を呼んでくれないか。大至急だ。」

「はい。了解しました。」

執務室に着くや否や秦の呼び出しを依頼した。

「提督、楠木提督はまだ訓練航海から戻つていない、とのこと。戻り次第、執務室ま

で来るよう、依頼はしておきましたが。」

「そうか…… すまないな。」

秋吉は、まだ納得はしていなかつたが、今回の作戦について、赤城に話すことにした。

「これが今作戦の概要書だ。読んで感想を聞かせてくれ。」

秋吉は概要書を差し出した。

赤城が手に取り、読み始める。

作戦自体には可もなく・・・というところだった。

元帥が、呉の武蔵に座乗し、呉隊で出撃。

この他、大湊と横須賀から艦隊出撃し、敵を迎撃する。横須賀隊は秋吉が率いる事となっていた。

時間的にみて、呉隊と大湊隊はすでに母港を出港し、呉隊は東へ、大湊隊は南へと向かっている時間であった。

ここまでは良かったが・・・問題は次だ。

小笠原諸島の島民救助に空母1を派遣し、在地の艦隊と共同にて島民救助を行うこと、とあった。

「！ 提督！ 最後の、この命令は・・・まさか？」

「ああ。君の思った通り。楠木の事だ。」

「そんな！ 空母1隻だけで、なんて！ 無謀です！ 敵が接近している中に。しかも時間的余裕はありませんし、下手をしたら1隻で敵艦隊の真ん前に行くことになりませんか？ それでも？」

「大本営は、それを狙っているんだ。楠木の首を、な。」

「それは、島民も、という事ですね。」

赤城の声が低い。

低い声で秋吉に確認する。

「そういう事になるな。奴らは、どうやつても失敗することを狙ってる。敵の攻撃を受けて死ねば、無能呼ばわりし、奴を悪者にして終り。よしんば生きて戻ったとしても島民に犠牲が出れば責任追及して退役だ。」

秋吉は椅子にもたれて窓の外を見ている。

「ワシはこれ以上の反論も抵抗も出来なかった。 . . . 情けない限りだ . . .」

鎮守府の長であつても、お偉方が集まると、一瞬で下つ端になる。

これは、いつの時代の組織でも同じことなのだが。

「楠木の気持ちだ . . . 少しでもわかつたような気がする。今回、ワシが感じたのは . . . 人の悪意だ。目の当たりになると、そう感じてしまう。」

外を見ながら細々と話す秋吉だった。

「楠木も、感じたんだろうな。」

「提督 . . .」

赤城の顔が曇る。その表情でも言うべきことはあつた。

「それでも、鎮守府の長たる者、沈んではいられませんよ。提督には20人を超える艦

娘がいるんですから。」

「赤城 . . . ああ、そうだ。 そうだつたな。 ワシには娘つこが大勢いたな。 娘つ

「こらを路頭に迷わすことはできんからな。」

秋吉の目が光を取り戻す。

「では、赤城。今作戦の相談だが……」

それからしばらく、二人で内々の話がすすんだ。

結局……

「ワシのほうはなんとかなるな。とすると、楠木のほうか……」

「はい。さすがに空母一隻というのは危険すぎます。今は朝霜ちゃんがついていま

すが……」

秋吉は少し、唸りながら考えた。そして……

「うむ……よし。朝霜をそのまま随伴させることとして、もう一隻、廻すことは

可能だな？」

「そうですね。駆逐艦ならば問題ありません。」

「では、誰にするか……」

「そうですねえ……卯月ちゃんはどうでしょう？ 睦月型ですが、主砲を降ろして対

空装備に換装してありますし。」と赤城が提案した。

「卯月か……いいだろう。それでいこう。」秋吉が赤城の答えに納得する。

「……」で連絡が入った。秦が戻ったと。

闇夜の出撃

日没直後、敵の攻勢に対するための準備で忙しい横須賀港を出ていく艦が2隻あった。

内1隻は小型艦。

どうやら駆逐艦のようだ。

残り1隻は航空母艦のようだ。

これだけは独特なシルエットをしているので、すぐ判明できる。

2隻は誰からの見送りもなく、ただひっそりと港を出た。

港外に出ると、速度を上げ、南下していった。

其の2隻よりも早く、駆逐艦1が、こちらもひっそりと出港した。

港外で待機していた輸送船2と合流し共に速度を上げて南下していった。

これらの計5隻は、小笠原諸島の島民救出のための艦隊であった。

1陣は、駆逐艦卯月と輸送船。

輸送船とは言え、油槽船1と兵員輸送船1の2隻であった。

先行した理由は、輸送船の足が遅い事にある。

先行させ、途中の海域で艦隊に補給するためであった。

更に兵員輸送船は母島の島民を載せたあと、本土に向かう事になっていた。

そのため、速度は目一杯の20ノットで走っている。

2陣は、駆逐艦朝霜と空母鳳翔。

慣熟訓練航海後の補給に手間取り、1陣より遅れる事となった。

空母鳳翔の搭載機は、偵察機と艦戦だけの22機だった。

こちらも24ノット以上の速度で走っている。

父島まで18時間ほどの予定である。

秦は空母鳳翔に乗って指揮を執っていた。

横須賀港を出た後は、各艦に無線封止を命じ、発光信号による伝達に切り替えていた。

「ほああああ。」

秦が大あくびをした。

「まったく、時間の無いったら、ホントに無いんだもんな。」

と愚痴る。

「仕方ありませんね。作戦を聞くなり、すぐ出撃なんですから。」

と鳳翔が応える。

「ああ。ホントに大本営に嫌われてるなあ。その点においてはみんなに悪いと思う

よ。」

と苦笑いをする秦に対して鳳翔がなだめる。

「それでも秋吉中将の配慮は、有りがたいと思いますよ。」

「そうだな。予定では空母1隻で、だったからな。」

秋吉の配慮のおかげで、空母鳳翔に、朝霜、卯月の2隻を秦の配下に回してくれていた。

それにより、変則ではあるが、艦隊として作戦を練れたのであった。

また、在地の近海防衛艦隊も使つていいとは言われたものの、全体としての、艦隊としての運動は、全く期待できない。

なんせ、即席なのだから、期待値は・・・限りなくゼロに近い。

ただ、可能性は・・・ある。

秦としては、戦闘にならない事を祈るばかりであった。

「提督？ 無事出港出来ましたし、この先はまだまだ時間が掛かりますので、休息をとられてはいかがですか？」

「ん？ もう少しいいよ。」

鳳翔が秦に休息を促すが、秦はもう少し艦橋に居たかった。

「いえ！ 休める時に休んでください。指揮官たる者、休むことも大事です！」

鳳翔がいつになく、強めに言った。

左手を腰に当て、右手人差し指で秦を指しながら。

まるで、お説教をするかのように。

秦は以外にも驚いていたが、その姿をみて、“可愛い”と思ってしまうていた。抱きしめたくなくなった秦だが、ここは理性が強かった。

「あ、ああ。分かったよ。じゃ、休ませてもらうよ。鳳翔、君も休んでよ。」

そう言つて鳳翔のいう事を聞くことにして、司令官室に入つていった。

自室に入ったものの、部屋に何か置いてあるわけでもなく、殺風景な部屋だった。

唯一、あるのが・・・お酒、だ。それもウイスキーの瓶が一本。

それしかない。

このウイスキー、日本は北海道にある、日本で初めてウイスキーが作られた工場のモノだ。

シングルモルト・ウイスキー。

酒に拘りがあるわけではないが、秦はこのウイスキーを気に入っていた。

秦もアルコールは嫌いではないが、大酒飲みではなかった。

所謂、ほどほどに飲める程度だった。

ウイスキーで酒盛りをするつもりはない。

ただ、睡眠薬代わり、のつもりだ。

ベッドに入る前に、シヨットグラス一杯、クイツと飲んだ。

ベッドに横になって、（海に出ると、鳳翔は強いな。さすが、お艦の雰囲気だな。）そう思っていた。

目を瞑ると、酒の力か、すぐに寝入ってしまった。

慣熟訓練からこつち、休む暇さえなかったのだから。

鳳翔は羅針艦橋から海を見ていた。

（暗い世界ですね。この暗い海でのこの速度は危険が多いですが、無理もありませんね。）

鳳翔は思い返していた。

この作戦を聞いたのは、慣熟訓練から帰ってきたその日だった。

◇

「提督。秋吉中将より呼び出しの連絡が入っております。」と上陸した途端に伝えられた。

その足で、朝霜、鳳翔を伴って執務室に向かった。

ドアをノックし、中に入った。

「楠木准将、入ります。中将、何かお呼びとか？」

「やっと来たか。」

秋吉と赤城の顔が秦たちに向く。

ソファーに案内され、秦、鳳翔、朝霜は座った。

「呼んだのは他でもない。新たな作戦を行うためだ。今日、大本營で説明があつた

んだが……」

そう言つて、概要書を差し出した。読んでみる、と。

「拝見します。」

秦が黙読する。

読み終え、秋吉をみた。

「提督？」

鳳翔が声を出さない秦をみた。

「中将…… はやり私は疎まれていますね。」

「分かったか……」

「ええ。」

そう言つて概要書を鳳翔に見せた。

一通り読み終えて……

「えっ?? これって……」

「ああ。 そうだよ。 空母1隻で島民救出を行う、とある。」

「な、なんで!? 無謀です! なんなんですか、これ!」と鳳翔が驚いて声を上げた。

「これが、大本營の真心、と言つていいだろう。」と秋吉が答えた。

「それで、提督は、楠木提督は、どうなさるおつもりですか?」と鳳翔が秦に聞いた。

「ん。 命令とあらば、やるしかないよ。 でも……」途中で言葉が無くなつてしまつた。

そこへ秋吉が言葉を挟んだ。

「そこでだ。 ワシは、貴様一人、空母1隻だけでは問題があると判断して、朝霜をそのまま貴様に預ける。 さらに、ワシの配下から1隻、貴様に預ける事にした。 赤城?」

「はい。 入つてちようだい。」

と赤城が扉の外に向かつて声を掛けた。

すると、能気な声が聞こえてきた。

「はあくい! うーちゃんだぴよん! よろしくぴよん! しれいかん、あそぶぴよん!!」

「卯月ちゃん!!」

と朝霜が声を出すと同時に、朝霜の両手が卯月の頭を掴んでいた。

「なんだぴよん?? はなすぴよん!!」

「はあ・・・。卯月ちゃん、真面目な話をしているのよ？ 静かにしなさいな？」

卯月が「ふうううっ」と膨れた。

「卯月ちゃんは、主砲を降ろして対空機関砲などに換装していますから、護衛に連れて行つてください。」

と赤城が付け加えて言った。

「あとは、油槽船、兵員輸送船を手配しています。」

「これだけあれば、なんとかなるだろう。どうだ？」

「そうですね。あとは時間と天候ですか、ね。」

「時間？」

「ええ。通常の連絡船でも確か片道24時間を掛けていますよね？ その時間のズレがどれくらいか・・・敵の進撃速度との差がどれくらいか・・・です。」

あとは、この季節は台風が発生しやすいですからね。海が荒れば、敵に発見されにくくなり、攻撃を受ける事もなくなります。が、反面、こちらにも敵を見つけにくく、航行も危険が伴います。」

「ああ、そうだ。向こうに、近海防衛艦隊が居る。そいつらを使つてもいい、と言われている。」

「近海防衛艦隊ですか？ 誰がいるんです？」と秦が聞き返す。

「近海防衛艦隊……父島に対する敵からの攻撃に対応するために派遣したんだが、艦隊構成は軽巡1、駆逐艦4で、旗艦は長良型4番艦の由良だ。駆逐艦は松型が4隻いる。楓、檜、樺、椿だ。」

軽巡と駆逐艦の計5隻が、いわば秦の配下になるという。

「都合8隻という訳だ。どうだ？ やれるか？」

「それは……やるしかありませんね。今更、後ろ向きなことは言えませんからね。」

「すまん。よろしく頼む。」

と秋吉が最後に言った。

「いえ。中将のほうも大変ですよ？ この作戦は？」

3つの隊で深海棲艦を迎え撃つことは、理解できるが、横須賀隊が破られるとそこはすぐ東京湾で、東京や京浜、京葉の工業地帯と住宅地が広がっている。

他の2隊よりも責任重大である。

「一応、対策は執るつもりだが、実際はやってみない事には、な。」
と秋吉は不敵に笑っていた。

「分かりました。」

と秦は半ば諦め気味に溜息をついた。

「で、どうするのか、楠木准将は？」

秋吉の質問に秦が答える。

「そうですね……ここから2隊に分けて出撃しましょうか。」

「2隊？」

「ええ。まず、補給が完了している卯月と輸送船の3隻で先行します。後続は鳳翔、朝霜で、補給が完了次第、出撃します。両隊とも硫黄島を目指して進み、途中で東進して小笠原へ向かいます。」

秦が鳳翔を見ながら話を続ける。

「輸送船に母島の島民を載せて本土へ向けて出航させ、父島の島民は鳳翔に載せます。時間的な問題があれば、各駆逐艦にも島民を載せるかもしれませんが……。」

「それで、搭載機はどうなりますか？」

と鳳翔が聞く。

「うん。元からして偵察機と艦戦だけで行こうと思う。ま、敵艦攻撃の場面は無さそうだしね。向こうに着いたら、搭載機は露天駐機して、島民を格納庫に載せることにしよう。」

「了解しました。」

と鳳翔が答えた。

「そして、由良を先頭に、近海防衛艦隊で護衛をして横須賀へ帰投する。その際、艦隊

速力は最大で、ね。　　どうでしょう?」

秦が秋吉を見て聞いた。

「うん、ま、よかろう。　　細かいことは貴様に一任する。　　頼んだぞ。　　四人とも。」

「はい。」

と改めて、秦、鳳翔、朝霜、卯月が敬礼をする。

◇

秋吉の執務室を辞した秦たちは、秦の執務室に集合し、詳細を詰めていった。

「横須賀を出た後は、大島の東を通って、八丈島を目指す。八丈島の西を迂回して父島に向かう。」

途中で合流し、燃料を補給。その後、卯月は兵員輸送船を連れて母島に向かってくれ。応援として現地の艦隊から駆逐艦2を差し向けることにしよう。」

「了解びよん!　　うーちゃん、頑張るびよん!!　　でも一人は寂しいびよ?」

「我慢してくれ、卯月。　　帰ったら遊んであげるから。」

「やったあ!!」

「島民の避難指示はどうするんだい?」

と朝霜が聞いてきた。

「自治体にあらかじめ避難指示を出してもらおう事にする。　　それでも、残る島民は居る

だろう。その時は、止められない……。」

改めて秦はみんなの顔を見て、指示をだす。

「では、作戦開始だ。」

「了解。」

と慌ただしく出ていった。

鳳翔が一区切りついたとき、秦と鳳翔は寮に戻っていった。

既に夜が更けているが、睦がまだ起きていた。

「お帰りなさい。父さん、鳳翔さん。」

「まだ起きていたの？」

「うん。二人の帰りを待ってた。」

「待ってた？」

「特に何かあるわけじゃないんだけど、何となく、ね。」

二人は、そう？ という顔をしていた。

「睦？ ちょうどいいから。話があるんだ。聞いてくれる？」

「なに？」

「急に、作戦が始まったんだ。すでに準備に取り掛かってね。」

「撃することになった。」

準備ができ次第、出

「そうなの？ 父さんと鳳翔さんも？」

「ああ。二人ともだよ。で、悪いんだけど、しばらく家を空けるから、留守番をお願いするよ。いい？」

「ええええ??? 寂しいじゃん。二人ともいないなんて・・・」

悲しそうな顔をする睦だが、

「でも、作戦なら仕方ないね・・・ うん、我慢するよ。」

「すまないね。で、寮の事は間宮さんに頼んであるから、心配しないでいいよ。」

「ご飯も、間宮さんとここで摂ればいいよね？」

「ええ。お願いね。」

「うん。そこそこは大丈夫だから。間宮さんのご飯、鳳翔さんみたいに美味しい

し。」

「そう言ってくれると助かるよ。」

「いつ行くの？ もう？」

「ああ。このまま行くから。たぶん、帰ってくるのは早くて明後日かな。」

「分かった。頑張ってきてね、二人とも。」

「じゃ、行ってきます。」

と二人が敬礼する。

「行つてらしゃい。無事の帰還を。」

と睦は笑顔で、敬礼で返してくれた。

そして……

準備に時間が掛かったが、整った隊から出港していった。
そして、現在に至る。

暗い海を空母鳳翔と駆逐艦朝霜が白波を立てながら進む。

だんだんと荒れてきているようだった。

後ろをみると、艦の航跡が暗い海に白く続いていた。

(こんな事になるなんて思つても見ませんでしたね……)

呉に居た時は、自身が最前線に出る事はほとんどなかった。

もっぱら訓練が中心で、瀬戸内から出る事もほとんどなかったから。

それが、船体が変わったとはいえ、いきなり前線に出るのである。

鳳翔は久しぶりに気分が高揚していた。

(でも、今回は、人命救助ですしね。頑張らねばなりませんね。)

そう思っていた。

航跡は続く

暗い海を空母鳳翔と駆逐艦朝霜が白波を立てながら進んでいる。

朝霜が先頭、後ろに鳳翔が続く。

2艦は、既に大島を通り過ぎ、さらに南下していた。

既に夜間灯に切り替えられており、外に光が漏れる事はないが、逆に艦橋から見える範囲にも灯りはない。

艦橋のデツキに一人、鳳翔が出ていた。

風が前髪を揺らし、長いポニーテールの髪が、風になびいていた。

月が雲に隠れて辺りも海と同じように、空も暗かった。

日中ならば心地よい、と思えたかもしれない、と思ったりしていた。

黒潮の流れを横切るように進む2艦であったが、波はだんだんと荒れてきた。

気象情報では、小笠原東方に低気圧があつて、西に移動中という。今の針路からすると、低気圧の通過中、もしくは通過後に現地到着か、と予想された。

秦が休憩に入つて数時間。

そろそろ鳳翔も休憩に入ろうかという時間になった。

(私も休憩しましょうか。)

艦橋の仕事は妖精さんに任せて、秘書艦室に下がろうとした。

(ごゆっくり。あとは任せて。)と妖精さんが言っていた。

「では、後を頼みますね。」

そういつて艦橋を後にした。

秘書艦室に着く手前、司令官室の前で足が止まる。

(ぐっすり眠ってらっしやるのかしら・・・)と思いながらドアをそうつと開けてみた。

ドアの鍵はかかっていたいなかった。

デスクの明かりだけが点いていた。

デスクの上には、ウイスキーのボトルとグラスが置いてあった。

(あら? お酒を飲んだのかしら。)

ベットが盛り上がっている事からして、秦が寝ているのだろう、と。

鳳翔は部屋に入って、秦が寝ているベットに腰かけた。

(提督の、秦さんの寝顔を見るのは、初めてですね。)

そう思いながら秦の寝顔を覗き込んだ。

(この顔ですね。睦ちゃんを虜にしたのは。気持ち良さげに寝ていますね。見て

ると、なんだか眠くなってきちゃった・・・)

ちよつとくらいはいいか、と秦のベットにもたれかかつて、寝顔を見ていた。
(ふふふつ。 ていとく〜) といいなから指で秦の頬を、ツンツンしていた。

．．．していたら、いつの間にか寝落ちしてしまっていた。

そして、いくらか時間が経過した時、鳳翔は目を覚ました。

覚ましたが．．．。

「え？ こころ？ あれ？ あれれ?? 私の、部屋じゃ．．．ない．．．あれ?」

そう。 鳳翔の自室ではなかった。

「こころ．．．司令官室、よね?」

秦の部屋の、ベットの中だった。

既に秦は部屋にはいなかった。

「そう言えば．．．昨日．．．提督の部屋に入って、顔をツンツンして．．．それから．．．

あれ? 覚えて．．．ない．．．」

ハツとして飛び起きて艦橋へ向かった。

着物は、乱れてないから、そんなことはなかったはず、と思っていた。

息を切らしながら羅針艦橋に入った。

目の前で秦が司令官席に座っていた。

「おはよう。 鳳翔。 昨晚はよく眠れた?」

と秦が鳳翔に聞いた。

「え、あ、あの・・・はい、眠れ、たようです・・・ あ、あの、提督？」

「ん？ 可愛い寝顔だったよ、鳳翔。」

と少々頬を赤めながら話した。

それを聞いた鳳翔の顔が真っ赤になって・・・「な！」といつて俯いてしまった。

両手で顔を押さえて「提督はイジワルです。」と言つて。

「はははっ。怒らないで。鳳翔も俺の寝顔、見てたんだろ？ おあいこだな。」

目を細めて鳳翔を見ながら秦が言つた。

そして。

「さあ、そろそろ朝食にしよう。」と。

外を見ると、東の空が赤くなつていた。

遠くに太陽が昇りつつあった。

昇りつつある太陽に向かって、秦は（今日も皆無事に、過ごせるように。）と、鳳翔は

（綺麗な朝日を明日も見れますように。）と心の中で願つていた。

◇

鳳翔は知らなかった。秦の部屋で眠つてしまつてからの出来事を。

実は・・・

秦が、寝落ちしてしまつた鳳翔に気が付いたのは、鳳翔が寝落ちしてからしばらく経つてからの事だつた。

寝返りを打とうとした体が、うまく出来なかつたことで、寝苦しさを感じていたのだつた。

「ん、う、うん？　体が重い???'」

と目が覚めた秦だったが、デスクの明かり以外に何もない部屋で、身体が重い、と感じていた。

目の前に、白く細いモノがあつた。

一瞬、ビクツとしたが、目を凝らしてよく見ると人の腕、手があつた。

（誰だ？）

その手を辿ると・・・着物を着たままの鳳翔がベッドに腰かけて、ベッドに倒れ込んで寝ていた。

「.....」

なんだ、と思つた秦だったが、気持ちよさそうに寝ている鳳翔を見て、無理に起こすことが躊躇われた。

しばらくそのまま見ていたが、鳳翔をベッドに入れようと動き出した。

腰かけている状態だつたのを持ちあげ、ベッドに寝かせた。

鳳翔は小柄で華奢なため、軽く持ちあがった。一瞬であっても、お姫様だっこだった。たぶん、鳳翔が起きていたら、顔が真っ赤になったろう、と思いつながら。

布団をかぶせ、横に秦が入った。

添い寝状態であった。

軽い寝息をかきながら気持ちよさそうに寝ている鳳翔を、片肘をつき、一方の手で髪を鋤きながら見ていた。

そんな状態でも起きる気配はなかったので、秦は額に軽くキスをして、そつと抱きしめた。

鳳翔の髪からは、椿油だろうか、甘い香りがしていた。

そして秦もそのまま寝落ちしてしまっても良かったのだが、気になってなかなか寝付けなかったのだ。

しばらく抱きしめていたが、（そろそろ時間か・・・）と起きる事にした。

鳳翔を起こさないように、ゆつくりとベットを抜けだした。

寝顔を覗き込んで、可愛い、と思ってしまうので、寝ている鳳翔の頬に軽くキスをした。

（ふふっ。眠り姫、（ゆつくり。）と。

鳳翔にベットを明け渡して、部屋を出たのだ。

◇

低気圧に向かって南下している艦隊。

水平線から昇った太陽はすぐ雲の中に隠れてしまった。

海は荒れつつあったが、空母鳳翔は波に負けず、力強く進んでいく。

黒い海に白い航跡を残しながら。

避難

朝食を済ませ、再び二人そろって艦橋に上がってきた。

太陽は既に昇りきっていたが、上空の雲に隠れていた。

低気圧に向かって進んでいることもあり、波が徐々に高くなってきたようだった。
そして……。

「これより、偵察機を発進させる。方角は……」

と秦が指示をだす。

「了解しました。偵察機を3機、出します。」

と鳳翔が敬礼をして、妖精さんに指示を伝達する。

格納庫から艦上偵察機が飛行甲板に上げられてくる。

甲板上で妖精さんが慌ただしく動き回っている。

偵察機1番機の翼が展開される。胴体下に増槽タンクが付いていた。

1番機がカタパルトにセットされると、2番機の翼が展開されている。

3番機まで甲板上に上がってきた。

1番機のカタパルトセットが完了すると、エンジンが始動された。

プロペラが勢いよく回転する。

(甲板上、退避せよ！)

カタパルト付近から妖精が退避する。

退避完了すると射出係員が叫ぶ。

(1番カタパルト、圧力よし！)

(1番カタパルト、射出！)

バシユつと音を立ててカタパルトが、偵察機1番機を前方にブン投げる。

投げ出された機体はエンジン出力を最大にして上昇していく。

上昇が確認されると、2番機に取り掛かった。

2番機も1番機と同じくカタパルトセットが完了すると、エンジンが始動された。

プロペラが勢いよく回転する。

(甲板上、退避せよ！)

カタパルト付近から妖精が退避する。

退避完了すると射出係員が叫ぶ。

(2番カタパルト、圧力よし！)

(2番カタパルト、射出！)

バシつと音を立ててカタパルトが、偵察機2番機をこちらにもブン投げた。

投げ出された機体はエンジン出力を最大にして上昇していく。

上昇が確認されると、最後の3番機に取り掛かった。

1, 2番機と同じく、カタパルトを使って3番機も射出されていく。

艦上偵察機の発艦作業が終わると次は、艦上戦闘機の番である。

「艦隊直掩に第一飛行小隊、発艦用意！」

と鳳翔からの指示が飛ぶ。

第一飛行小隊1番機から4番機までが格納庫から甲板に上げられていく。

「第一飛行小隊、発艦準備出来次第、発艦！ つづいて第二飛行小隊に発艦準備を下令！」

と続けて指示を出す。

10分と掛からないうちに、直掩の飛行隊4機の発艦作業が終了した。

直掩隊は空母鳳翔の上空5千にて旋回、監視を行う。

第二飛行小隊4機は格納庫にてカタパルトによる発艦に向けて準備に入っていた。

と言っても、まだまだ発艦は先なので、準備だけ行い、機体をワイヤーで固定していた。

滑って壁にでもぶついたら目も当てられない。

◇

偵察機は、南、南南東、南東の3方向へと飛んでいた。

南へ向かった偵察機は、前方に先行する、卯月と輸送船を見つけていた。

「艦隊前方50kmにて艦影を視認。先行部隊と確認。」

との暗号電を発信していた。

受けた秦が声を発する。

「そうか。卯月達は予定通り、かな。」

「そうですね。今のところ攻撃も受けていないようですし。」

秦と鳳翔は、ややホツとしていた。

行程の半分もきていない地点で敵に発見される訳にはいかない。

出来れば、敵に接触すること無く作戦を終えたいと思っていた。あくまでも希望的観

測ではあったが。

偵察機は、哨戒半径200kmほどで帰ってくる予定になっていた。

通常は高高度から敵艦隊を見つける事が役目だ。

ただ、今回はかなり違った。

母艦から離れば離れるほど低気圧に近づき、雲が厚くなる。

海も白波が立ち始め、船の視認が難しくなってきた。

偵察機は高高度から降りてこなければいけなかった。

「前方海域、悪天候のため、雲が低く視界不良。高度3千に降下する。」
と連絡をいれた。

それでも海面は見渡せず、辛うじて雲の切れ間から眼下の海が見える程度だった。

「提督。偵察機の報告では、雲が低く、敵発見は困難、とのことですよ。」

「そうか……。そんなに天候が悪いのか……。止むを得ないな。すまないが偵察機には予定の哨戒半径を探索の上、早めに帰還するよう、連絡。」

空母鳳翔も荒れる波に揺れ始めていた。

「天候が回復するまで、偵察は取りやめよう。次の発艦は延期だ。今出ている偵察機が帰投次第、速やかに格納。その後、荒天対策を。」

「了解しました。」

と鳳翔が応える。

「その代り、対空対潜監視を厳に。朝霜にも連絡を。」

と秦が指示を出す。

鳳翔から朝霜へは発光信号にて連絡が行く。

鳳翔から飛び立った偵察機各機は、予定の哨戒範囲を探索するも、敵艦を発見出来なかった。

もつとも、雲が厚く、波も立ったため、視認困難であった。

各機は「哨戒範囲に敵影発見せず」と打電して帰投していった。

帰投してきた偵察機各機が着艦し終えると、残るは直掩の艦戦だ。

こちらも着艦させ、荒天対策をとらせた。

波に揺られる中を艦隊が進んでいく。

それから数時間、波に揺られる以外に何も起きなかった。

そして……

「先行する卯月からのラジオビーコンを受信しました！」

との報告がきた。

先行する一陣の卯月が、予定通り補給地点に到着したことを知らせるビーコンを発信してきた。

卯月たちとの時間差は30分と無かった。

「提督、卯月ちゃんたちは予定通りに着いたようです。」

と鳳翔が報告する。

「うん。こちらも補給地点へ急ごう。方位はあつてるね？ 進路の微調整は任せる

よ。」

秦が次なる指示を出していた。

「はい。了解です。進路をビーコンの発信点へ向けてちょうだい。」

鳳翔が妖精さんに指示を伝える。

ビーコンの発信点は、僅かに左にずれていた。

その方向に向かつて、朝霜、鳳翔が舵を切っていく。

◇

補給地点では、すでに油槽艦から兵員輸送船と卯月に補給が行われていた。

「うゝ、揺れてやり難いびよんゝ」

とブツブツ言いながら補給作業を行っている。

作業開始後しばらくして2陣、朝霜と鳳翔が到着した。

「司令官ゝ！ こつちびよんゝ!!」

「卯月ちゃん、待たせたわね。」

と朝霜が言う。

「朝霜ちゃん、待ってたびよん。」

「卯月、ご苦労さん。補給作業はどうだい？」

「司令官、うん。順調順調びよん。」

兵員輸送船と卯月への補給が完了し、朝霜へと作業が移った。

そこへ父島から2隻の駆逐艦がやってきた。椿と樗だった。

「司令官。初めまして。近海防衛艦隊所属の松型椿と樗です。」

椿と樗が連絡してきた。

「司令官の楠木だ。二人とも、よろしくね。」
と返信する。

「母島へは二人とも行つてくれるんだよね？」

「いえ。母島へは椿が同行します。樗は司令官の案内役で父島に同行いたします。」
予定とは違つて、母島には一隻がいつて行くという。秦はそれでもいいか、と思つたので、了解した。

油槽船の燃料は、まだまだ余裕があつたため、椿、樗にも補給することにした。波が徐々に高くなりつつあつたが、補給作業が続く。

予定よりも早く補給作業が進んでいたためであるが、それでも予定よりかなり早めに各艦への補給作業が完了した。

艦隊がその場から出発する。

1陣と椿が更に南下する。目的地は母島である。

2陣と樗は、樗を先頭にして父島へと針路をとつた。

両方ともあと数時間で現地に到着する予定だ。

秦は当初の予定通り、現地の役場へ向けて島民の避難開始時刻を暗号文にて連絡した。

あと2時間で現地に到着する、と。

◇

島では暗号文を受信してからの、慌ただしかった。

島民を港まで集めなければならなかった。

何しろ、到着予定時刻は1500の予定だったからだ。

あと2時間で全島民を集めるのだから、役場の係員は大忙しになった。

幸いにも大型の低気圧は速度はそのままだ、針路をやや南に変えていた。

そのおかげで、低気圧の北に位置している島では風はやや収まってきているように見えていた。

とはいえ、避難することは事前に連絡済だったこともあって、30分前には集合を完了した。

そこへ樗を先頭に朝霜、鳳翔が二見港に入港してきた。

「よし、港に着いたぞ。各艦は回頭して投錨。鳳翔は投錨次第、避難民を乗船させて。」

と秦が指示を出した。

「提督、軽巡由良から通信です。」

「こちら、由良です。初めまして。よろしくお願いたします。島民の乗船は、指示

通り、大発にて往復させます。」

由良からの連絡が終わると同時に、岸壁から大発が出発していた。

本心を言えば、栈橋に接岸して乗船させたかったのだが、いかんせん、空母鳳翔の喫水が深く、港の水深が足りなかったのだ。

空母鳳翔からはタラップが降ろされている。

大発が鳳翔に横付けされ、島民がタラップを登っていく。

登って、格納庫へと案内されていた。

鳳翔の艦載機は、港に着くまでにすべて露天駐機に切り替えられていた。

岸壁と鳳翔との間は、4隻の大発で往復していたが、さすがに時間が掛かっていた。

予定では乗船を2000までに終えて出航するはずであったが、2時間を経過しておよそ8割が乗船済となっていた。残り3時間であった。

時間的に間に合いそうだな、と秦は思っていた。

その秦は乗船作業を艦橋から見ていたが、作業が終盤になって、鳳翔、由良と共に岸壁に居た。

地区長らと会うためである。

「提督、ありがとうございます。なんとか時間内に乗船が終わりそうです。」

「ご協力、ありがとうございます、地区長。」

秦が敬礼して返す。

「あと数便で全員が乗船します。提督、後をお願いいたします。」

そう地区長が言った。なにか含みのある言い方だったが、その表情は、堅かった：

「その言い方は……地区長、まさか、残るつもりでは？」

秦は感じたままを口にした。

「ええ。役場の人間数名と、有志が数名、残ります。ですから、島民を、村人たちをよろしくお願いいたします。無事に本土まで送り届けて頂きたい。」

「その顔は……すでに覚悟を決めている顔ですね……。」

「はい。攻撃があつたとしても、自分達の街ですから、最後まで見届けたいと思いません。」

「……攻撃が無ければ、そのまま島で生活は可能ですが……あまりにも危険な賭けですよ……ホントにいいんですか？」

「はい。」

「そうですか……。」

残る地区長らの決意は固く、変わることは無いように思えた。

当初は、島民全員の避難であつたが……

「分かりました。では、残る皆様には、島の安全監視という事で、残っていただきま

しよう。それでいいですね？」

「ご配慮、感謝します。」

と地区長は頭を下げてきた。

これで、残る人の面目が立つだろうと、秦が考えたのだった。

決意の固まった人に、これ以上の説得は無意味だ、と秦は思った。

地区長が由良に向かって声を掛けた。

「由良さん、今まで警護ありがとう。皆をよろしく。道中、気を付けて。」

「地区長さんも、どうかご無事で。」

由良も返答した。

地区長らは港で見送るといふ。

そして、秦が鳳翔と由良に言う。

「では、我々も行こうか。」と。

「帰りは、由良に載せてもらおうよ。由良、鳳翔、いいね？」

と秦が言う。

「えっ？ な、なんで？ 一緒に帰らないのですか？」

と鳳翔が問う。

「うん、帰りは・・・敵との遭遇が予想されるのでね。」

そう秦が言うと、空を見上げた。すでに陽が落ちていている時間であったが、風は以前より落ち着きつつあった。

そのため、敵航空機による索敵があるのでは、見つかる可能性が高いのでは、と思つた。

鳳翔や輸送船には避難民を乗せているから、戦闘には参加させられない。

となると、由良の水雷戦隊で敵をおびき寄せて叩く必要がある。

そのためには、由良に乗るのがいいだろう、と考えていた。

「それでは、私もお供します！」

と鳳翔が言ったが、秦はそれを拒んだ。

「それはダメだよ。避難民を巻き込むことはできない。鳳翔、分かっておくれ。」

鳳翔は顔を紅潮させて、更に言おうとしていたが、秦がそれを止めた。

「みんな、必ず、無事に帰るから。ね？」

微笑んで鳳翔を見つめた。

「お願いだから、聞き分けてくれ。鳳翔・・・頼むよ。」

と説得するも鳳翔は納得しなかった。

そして・・・

「では・・・無事に帰るといふ保証を、ください。」

と言つて、秦を見つめた。

「保証？」

「はい。」

そう言つて、鳳翔は秦に向かい、顔を上げて目を閉じた。

そう。口づけを求めているのだつた。

そう理解した秦が、それに応える。

秦の唇が、鳳翔の唇に重なる。

ちゅ．．

「．．．これでいいのか？ 鳳翔．．」

「はい。これで頑張れます。」

と答えるが、その目にはうつつすらと涙が浮かんでいた。

「それでは、横須賀、で会おう。必ず。」

「はい。横須賀で。必ず、必ず、です。」

最後には気丈に微笑んで見送った。

そう言つて秦は由良に乗り込んでいった。

秦が艦橋に着くなり、

「提督さん．．． 見ていて恥ずかしいですよ．．．」

と由良が言った。

「言うな……余計に恥ずかしくなるだろ……」

秦は恥ずかしくなっていた。

「でも……羨ましいです。相思相愛ですね、提督と鳳翔さんは。」

「そうだな……。だが、それ以上、言うなよ。さあ、抜錨するぞ！」

茶化す由良も、茶化される秦も二人とも顔は赤かった。

予定時間より早く島民の乗船が完了した。

「では、これより我ら艦隊は楠木隊として出港する。楠木隊、全艦抜錨!!」

と秦が号令を発する。

由良が復唱する。

「了解！ 楠木隊、全艦抜錨!! 前進微速!!」

艦隊は抜錨し、港を出ていく。

島に残る、地区長を始めとする10数名の見送りを受けて。

港外で、由良を先頭に鋒矢陣を成し、母島からくる卯月たちと合流すべく、針路を西にとった。

合流

秦たちが二見港を抜錨したころ、既に母島の島民の収容を終えた卯月たちは、会合点へと北進していた。

卯月たちは予定より一時間早かったのだ。

「海は荒れ荒れ、でも、うーちゃん、順調、順調。」

と、脳天気独り言を言っていた。

それを椿が叱った。

「卯月ちゃん、静かにしてよ。駄弁るより、警戒監視をしっかりとやってちょうだい！」

「うー、いいじゃん、いいじゃん!!!」

（はああ．．． まったく、落ち着きが無いったら、ありやしないわ．．． 睦月型ってみ

んな、こんなんなのかしら．．．）

と椿は呆れていた。

合流地点に到着し、ビーコンを発信する。

「予定地点とうちやくぴよん！ ラジオビーコン、はっしいいん！」

「真面目にやって！」

「うー、また怒るうー」

「怒らせてんのはだれかなああ?」

椿の蟬谷にピキピキと音がするほどしわが入っている。

二人がやりあっている間、油槽船と輸送船の乗員乗客達は呆れながら見ているだけだった。

そのうち、東から荒波を蹴って艦隊が接近してきた。

由良を先頭とした、楠木隊だ。

旗艦由良から、“艦隊集合、針路を北にとり艦隊速度20ノットで進め”、との発光信号が発せられ、卯月たちが北に針路を変えつつある秦たちに合流した。

「うーちゃん、合流するびよん!」

「卯月ちゃん? 真面目に、ね?」

という鳳翔の一言で卯月が

「はいいい!」

と大人しくなる。

椿は(私のいう事は聞かないくせに、鳳翔さんのいう事は聞くのね。)と心の中でぼやいていた。

◇

艦隊はここで初めて本格的な鋒矢陣を成した。

先頭は、旗艦由良。

由良より右斜め後方に向かって、椿、櫂。

同左斜め後方に向かって、楓、櫂。

由良の後方に、朝霜、鳳翔、油槽船、兵員輸送船、最後尾に卯月が就いた。

各艦との距離は2500メートル。

波が荒れている事を考えれば、もつと間隔が欲しいところではあるが、秦は敢えてこの間隔とした。

(背が低い駆逐艦が波間に消えない程度の距離のつもりなんだけど……)

だいたいこの陣形では、大将は、傘の柄に陣取る。

今の陣形でいくと、鳳翔の位置にあたる。

しかし、今回、旗艦は由良であった。

陣形の先頭である。

敵と正面からぶつかれば、真つ先に攻撃にさらされる位置である。

秦は、由良に乗るのは初めてであったが、現状においては、初めてであっても由良を頼るしかないのである。

もつとも、秦は由良を信頼している。

由良というより、艦娘を。

彼女たちは、秦よりも多くの戦場に立ち、激しい命の削り合いを潜り抜けている。

そんな彼女たちを疑う事は、全く持つて失礼であるし、人間と共に戦ってくれる同志として思っている。

南にそれていた低気圧は、迷走ぶりを発揮し、北西へ針路を変えていた。

見たかたち、楠木隊が低気圧を引き連れている様にも見えていただろう。

艦隊は低気圧の縁のギリギリを航行していた。

波は高いが、艦載機が発艦できないほどではなかった。

秦は、今後の事を考え、偵察機を飛ばすことを決めた。

北、北北東、北東の3方向だ。

由良より鳳翔へ信号が送られる。

鳳翔の甲板に露天駐機されていた偵察機の発艦作業が始まる。

「偵察機隊第1陣、発艦準備！ 準備完了次第、順次発艦！！」

作業が完了した機から飛び立っていく。

全機がいったん由良の上空を通過していく。

（発艦終了したわね。 由良へ連絡、と。）

連絡を受けた由良が秦に報告する。

「提督さん、発艦終了したようです。」

「了解。さあて、何もなければいいが……」

心配な秦であった。

◇

艦隊は既に聳島を通過し、針路をやや東寄りに変えていた。

北東に向かった偵察機が高度5千で1時間ほど飛んだ頃、針路右手に、航跡を引く多数の艦船を見つけた。

「右舷下方に多数の航跡！」

と監視妖精。

「用心して近づくぞ！」

と操縦妖精。

雲間に紛れながら所属不明艦隊に近づく。

「!! 敵艦船と認む。艦種は、戦艦クラス1、大型空母クラス4、巡洋艦クラス3、小型艦6！」

「旗艦に打電！」

「これだけではあるまいに。まだ居るんじゃないか？」

さらに付近を捜す。

そのころ、北北東に向かった偵察機も所属不明艦隊を見つけていた。

「敵艦船を発見。 戦艦4、小型空母1、小型艦4を認む。」

報告を受けた秦は考えていた。

「2艦隊で20数隻・ 部隊としてはかなりだが、もう一つくらい居るんじゃないか？」

「由良はどう思う？ まだ居るような気がするんだが・・・」

「どうでしょう、北東の艦隊は、艦隊としての規模が大きいので後に2つに分かれるのではないのでしょうか。 空母部隊と水雷部隊と。」

「今は、分かれる前、だと？」

「はい。」

「北北東の艦隊は、明らかに攻撃部隊ですね。」

（そうなると、だなあ・・・ ちよつと、無謀かもしれないが・・・）

秦は一つの案を思いついたが、ちよつと無謀かも、と思っていたが・・・。

「鳳翔？ 私だ。」

「はい？ どうされました、提督？」

「北東方向の、敵艦隊Aとするが、敵Aの空母を潰したい。 艦戦に爆装できる？」

「えっ？」

聞いていた由良も、鳳翔も同時に声を上げた。

「烈風に爆弾、ですか？ 爆弾も積んでいますから、いちおう、できますけど。」

「なら、鳳翔に下命する。艦戦全機を爆装させ、敵Aの空母を爆撃せよ。」

「！ わ、わかりました。露天駐機の全機に爆装をさせます。」

「目標は、空母の飛行甲板だ。沈めなくていいから、甲板だけを狙ってくれ。」

「了解しました。発着艦不能にするんですね？」

「そうだ。大型空母4隻分だと、総数400を超える艦載機があるだろうから、こいつを潰しておかないと、我々に勝ち目はない。」

「了解しました。全機に下命しますね。」

鳳翔はそう言つて艦内に命令を下した。

「全機、爆装！ 目標、敵A艦隊の空母の飛行甲板！」

格納庫内の避難民は一様に驚いていたが、作業はすべて甲板上で行われている為、見る事はなかった。

30分を掛けずに出撃準備が整った。

烈風全16機の翼下と胴体下に25番が3発。

計48発が搭載された。

「全機、発艦!!」

カタパルトから1機また1機と飛び立っていく。

敵Aまでの距離は徐々に縮まっていておよそ150km。

残っていた偵察機の先導を受けてまっすぐに敵空母へと飛んでいく。

片道30分と掛からないが、雲を縫っていくので小一時間掛かる算段だ。

そして全16機が発艦したころ、敵Aの各空母からも攻撃隊が発艦していた。

偵察機から連絡が入る。

「敵A各空母より攻撃隊発艦！ 目標は……われら楠木隊ではありません！」と。

「！ 遅かったか。」

「無理ありません。いつも先手を取れるわけではありませんから。」

と由良が慰めてくれる。

敵攻撃隊はどこへ向かったのだろうか。

続けて偵察機より報告が来た。

「敵A攻撃隊、北西へ向かう。およそ200機。戦爆の構成は不明。」と。

「奴らの目的は……呉隊か？」

そう秦は思ったが、

「方角からすれば、たぶん……。」

と由良が後を押す。

秦たちは知らなかったが、敵の目標は、確かに呉隊であった。しかも、約半分の90

機が航空魚雷を抱いている。

明らかに艦船攻撃だった。それらは第1次攻撃隊で、第2次攻撃隊が甲板で準備に入っていた。

その敵空母に対して、鳳翔を飛び立った攻撃隊が襲いかかろうとしていた。

攻撃

鳳翔を飛び立った攻撃隊は、高度3千で敵前10kmまで来ていた。

その時、隊長機から指示が飛ぶ。

「隊長機より各機へ。これより敵空母に対し、攻撃を開始する。第1、第2小隊1番から8番機は高度5千まで上昇し、急降下にて敵空母に対して投弾。第3第4小隊は水平爆撃を行う。第3小隊9番から12番機は敵左前方、第4小隊13番から16番は敵左舷後方からだ。全機、健闘を祈る！」

第1、第2小隊各機が高度を上げる。

第3、第4小隊各機が高度を下げる。

更に敵に近づいたら2手に分かれた。

敵艦隊から第3、第4小隊へ向けて対空迎撃が始まった。

巡洋艦、駆逐艦からの対空射撃は、艦が重なったりして存分にその威力を発揮できないでいた。

それでも機体のすぐそばを銃弾が飛んでいく。

対空砲弾は、飛行針路の手前で爆発する。

その破片や爆風が機体を襲う。

良く機体が凹む。悪ければ機体を突き抜ける。

爆発の振動も伝わる。

その中を各機は、それぞれの目標、空母の飛行甲板に向けて飛ぶ。

中には曲芸飛行の様に、機体を左右に振りながら敵弾を躲そうとしている機体もある。

1機あたり爆弾は3発。

第3小隊4機が目標の空母に近づいていく。

爆撃侵入コースはバツチリだった。

そして各機が狙いを定めた。

「第3小隊各機、投弾用意！ 投弾!!!」

小隊長機がまず目標に向かって爆弾を投下する。

続いて隣の空母に向けて……

敵空母1隻あたり1機ずつ。

第3小隊各機が投弾を終えた時、第4小隊各機が突入する。

第4小隊各機も爆撃侵入コースに乗っていた。

「第4小隊各機、投下あ!!」

第4小隊各機が各目標の飛行甲板に向けて爆弾を投下する。

第4小隊各機の爆弾が命中する前に、第3小隊各機の爆弾が着弾し、爆ぜる。空母1隻に対して爆弾6発。

飛行甲板のど真ん中に落ちたものがあったが、半数は前部、後部にずれていた。

それでも、甲板上に発艦作業中の機体があったために、爆弾による被害が広がっていた。

艦橋に爆弾2発が命中した艦があった。

艦橋が吹き飛び、黒煙が上がる。

甲板上の航空機に爆弾が命中し、被害が広がる。

投下し終わって敵艦隊の上空を旋回しながら通過していく攻撃隊に対して、送り狼の攻撃を加える敵艦もいた。

旋回中に、後方からの攻撃を受け、海に落ちていく機体がいくつかあった。

撃ち落とした砲では、歓声が上がっているであろうが、次の瞬間、上空から第1小隊と第2小隊の編隊が釣瓶落として突入してきた。

1隻あたり2機。爆弾は6発。

「全機、突入!!」

隊長機が先陣を切って急降下していく。

降下角60度の角度で突入する、いや、落ちていく。
エアブレーキを展開しながら。

ようやく気付いた敵艦からの迎撃が始まるが、既に高度1000を切っている状況では、ほとんど無意味であった。

砲弾が上がるより、落ちる方が早かった。

「投下ああ!!」

高度600で投下し、機体を引き起こしていく。

爆弾はほぼまっすぐに敵艦に向かっていく。

既に煙を吹いている空母の飛行甲板に。

3発が見事に命中する。

続けざまに後続機の3発も命中する。

命中弾は、甲板を突き破り、格納庫内炸裂するのもあった。

そうなれば、目も当てられない。

艦内には航空燃料、航空魚雷、爆弾など、爆発物がいっぱいなのだから、そこに火が入ると、更に爆発する。しかも大爆発だ。

鳳翔攻撃隊の攻撃が終わり、攻撃隊は悠然と引き返していく。

その後方で、敵空母群の飛行甲板はもうもうと黒煙を上げている。

火元をみるとオレンジの炎が立ち上がっている。

4隻のうち、艦橋に直撃弾を喰らい、指揮不能になった艦が1隻、その艦の飛行甲板では直撃弾と誘爆で甲板に大穴が空いていた。

2隻は飛行甲板に直撃弾6、格納庫での誘爆を起こし、傾斜していた。航行不能状態だった。

残り1隻は誘爆が機関部におよび、航行不能のうえ、艦尾から沈み始めていた。

その様子を上空の偵察機が見ていた。

「攻撃隊の攻撃終了。敵空母、大破2、中破2、艦隊の行き足が止まった。」と連絡した。連絡を受けた秦たちは、「よしっ!!」と声を上げた。

(これで、こちらの壊滅的打撃を被ることは無くなったか……)

だが、秦は気になっていた。

こちらの攻撃隊が到着前に敵の攻撃隊が発艦していたからだ。

「呉隊、無事だといいいんだが……」

そう呟く。

「大丈夫ですよ、きつと。」

と由良が応える。

応えるが……由良も根拠があるわけでは無かった。



その頃、既に呉隊は敵深海棲艦の艦載機による空襲を受けていた。

呉隊は護衛空母からの直掩はしていたものの、数が違った。

我が軍の大型空母は、横須賀隊の赤城、加賀の2隻と大湊隊の翔鶴、瑞鶴の2隻の計4隻。

呉隊には軽空母の2隻があるだけだったが、そのくせ戦艦は6隻いた。

呉提督は、敵側面から打撃を加えるつもりだったようだが、敵はそんなに馬鹿ではなかった。

戦爆連合の200機にもおよぶ攻撃は熾烈を極めた。

爆撃機は戦艦を、攻撃機は中小型艦船を狙っていた。

爆撃機は、戦艦の上部構造物の破壊を目指していた。

戦艦は、航空機による上空からの攻撃には、比較的弱い。

大和、武蔵を有する呉隊であったが、船体中央部の高角砲群は、上空からの攻撃には弱いのだ。

上空から攻撃機が飛来するたび、機銃や砲が破壊されていく。

46センチ砲を3基9門揃える大和、武蔵も航空機のやりたい放題にさらされていく。

傍を行く長門、陸奥も巨砲を持つが、対航空機には不向きだ。

そのうち、旗艦武蔵が被弾した。

しかも艦橋に、直撃だった。

攻撃機は小中型艦を目指した。

快速で小回りが利く小中型艦は、魚雷による肉薄攻撃を得意とするが、その攻撃をさせまいと、先手を打って航空攻撃が行われた。

駆逐艦も回避運動を繰り返して、攻撃をかわしていくが、次第に命中弾がでる。

敵航空魚雷が1本、また1本と命中していく。

大型艦ならば数本あつたところで持ちこたえる事はできるが、駆逐艦クラスでは1発で致命傷だ。

1時間にもおよぶ敵の空襲が終わったとき、呉隊の全艦が被弾していた。被害は・・・

撃沈：戦艦2、軽空母2、駆逐艦4

大破：戦艦1、重巡2

中破：戦艦3、軽巡2

一次攻撃だけで半数が沈んでいた。

結果からすれば、壊滅である。

大破、中破の8隻は辛うじて航行が可能であったが、攻撃能力は大きく落ちていた。

◇

鳳翔攻撃隊の攻撃終了から小一時間。

攻撃隊が帰還してきた。

出撃数16、帰還13、未帰還3という結果だった。

「鳳翔、よくやってくれた。飛行妖精たちを労ってやってくれ。」

「了解です。提督。」

そう会話をすると

「では、本土へ急ごう。」

と指示を出した。

「提督さん？ 敵の、呉隊を攻撃した攻撃隊はどうしますか？」

「放っておいても大丈夫だ。もう帰る家は無いから、海に落ちるしかないさ。ただ、

とばっちり嫌だから、対空警戒は厳にね。」

臨時指揮権

攻撃隊を收容した楠木隊は、本土を目指して海上を全力で航行している。

低気圧は更に方向を変え、今は西に向かっている。

艦隊は、航空攻撃にさらされやすくなっていた。

逆を言えば、攻撃も出来る状況とも言えた。

今の楠木隊の航空戦力は、空母鳳翔搭載の艦戦13機と偵察機6機と由良搭載の水観測機だけ。

秦としては、航空攻撃にさらされるのはゴメン、と思っていた。

また、少ない機体で攻撃するのもゴメンとも思っていた。

そこへ北へ向かった偵察機から連絡がきた。

「呉隊と思しき艦隊を発見するも、被害甚大の模様」と。

また、北北東の敵艦隊Bが西へ変針した、との連絡もきた。

「どう思う、由良？」

「そうですねえ、敵Bは、呉隊の殲滅を狙っているのではないのでしょうか。」

薄いピンクの長い髪を風に靡かせながら答えた。

軽巡由良の艦橋は、当初は露天だった。そこへ天蓋を張っていたのだが、今はちゃんとした屋根がある。屋根と言っても雨風をしのぐためだけなので、防弾の意味は持っていない。

そんな艦橋のデッキに秦と由良は居る。

「そうだとすると、呉隊は、危ないな。」

「報告では残存8隻で、全艦が被弾しているようですし……」

（さて、どうするか……）

秦は考えていた。

楠木隊が北上すれば、呉隊に近づく。

敵Bが近づいている艦隊に近づくのだ。

楠木隊には、避難民を載せている艦がある。無闇に戦闘はできないと思っていた。

そんなとき、電探から報告がきた。

北方100kmに正体不明艦探知、と。

これ以上近づくと退避も困難になるだろう、戦闘は避けられないだろう、と秦は思った。

そして……

「ただいまを以て鳳翔以下朝霜、卯月、各輸送船は北西に針路を執り、呉隊の後ろ50k

mを廻つて、本土へ。目的地は武山だ。」

「は……」

朝霜と卯月が驚く。

まあ、無理もない。細かな指示は鳳翔にしかしていないのだから。

「はい、了解しました。」

と鳳翔が返答する。

「え？ 鳳翔さん？ 聞いてたの？」

朝霜が聞く。

「ええ。提督から聞いてましたよ。だから……みんな、針路を変更して。」

「わ、わかったびよん。」「り、了解です。」

卯月と朝霜が返答すると、鳳翔らは左へ、北西へと舵を切った。

朝霜を先頭にして。

「由良、椿、楓、樺、檜で単縦陣へ移行する。由良、我々は右10度に変針だ。」

「了解しました。」

由良を先頭に単縦陣となし、艦隊速度を上げた。

電探が2つ目の艦隊を探知した。

艦隊の動きから、呉隊と判断された。

既に敵Bとも100kmを切っている状況で、秦は呉隊に連絡をする。

「こちら、横須賀鎮守府所属、楠木だ。呉隊に告ぐ、応答されたし。繰り返す……」
すぐに返答があった。

「……こちら呉隊、長門だ。よく聞こえる。何用であるか?」

「そちらに向けて、深海棲艦の艦隊が向かっている。そちらの状況知らせ。」

「! 敵の空襲を受け、半数が沈んだ。残存は、大破3、中破5だ。」

長門が被害状況を秦に伝える。

「呉提督は? どうした?」

「旗艦武蔵に直撃弾、提督を含め首脳陣が壊滅状態だ。」

「!! そうか…… わかった。では、私が臨時に指揮を執るが、いいかね?」

「それは有り難い。よろしく頼む。今の状態では、艦隊全艦まで目が行き渡らないのだ。助かる。」

と長門はそう言って了解した。

「長門、各艦は、主砲は撃てるかい?」

「大破した艦は無理だ。射撃管制がやられている。中破している、私長門、陸奥、大和は大丈夫だ。」

「では、中破した艦は、長門を先頭に、単縦陣をなし、方位0—1—5へ。右から来る敵艦隊に対し砲撃戦を準備せよ。大破した艦は戦線を離脱せよ。」

「了解した。」

「距離3万になったら砲撃開始だ。それまでは耐えてくれ。いいね？」

「ああ。分かった。全艦に伝える。」

そして・・・

見張妖精から報告が入る。

「右舷、3時の方向に敵艦隊発見！ 距離およそ3万5千！ 複縦陣と思われませう。」

これに各艦が対応する。

「主砲、右舷、砲撃戦、用意！」と。

次の瞬間、敵先頭艦から炎が確認された。

距離3万5千で敵が砲撃を始めたのだ。

およそ30秒後、測的が甘かったのだろう、艦隊の右に水柱が2本、上がった。時間が経つにつれ、当然のごとく距離が縮まる。

3万5千・・・3万4千・・・3万3千・・・3万2千・・・3万1千・・・

その間にも敵は発砲してくる。が、まだまだ当たるにはほど遠かった。

ついに距離3万になる。

「各砲、交互打ち方、撃てえ!!」

残存艦の長門、陸奥、大和の各砲が火を噴く。

戦艦の砲撃は、1発目から命中させることは、本当に稀である。

撃つ方も、撃たれる方も動いており、さらに波がある。飛翔中に風の影響もある、な
どと様々な影響を受けてしまうのだ。

だから、長距離になればなるほど、当てる方が珍しいと言える。

2射、3射と打ち込んでいくが、ついに4射目に、長門の放った徹甲弾1発が敵先頭
艦に命中した。

敵艦の艦中央部、左舷側に徹甲弾が飛び込んでいた。

飛び込んだ先は・・・機関室、ボイラー室だった。

弾頭が爆発する!

辺りかまわず爆風と衝撃が襲う。

そして・・・機関室が轟音と共に爆発した。

「敵先頭艦に命中弾! ん? 先頭艦が落伍します!」

「先頭艦はもういい! 目標変更して砲撃!!」

敵弾も命中してくる。

「ギヤツ 第2砲塔に命中弾―」

と大和が叫ぶ。

幸いにも外郭で弾き返したようだった。

2つの艦隊の距離が2万5千となったとき、深海棲艦側の小型艦に砲撃とは別の水柱が上がった。

1本ではなく、数本。

長門達からは、砲撃による水柱か、と思われたが、水柱の高さと上がった位置が違っていた。

それは、魚雷による水柱だった。

必殺の酸素魚雷だ。

「よし。魚雷攻撃は凶にあたったな。」

「はい。提督さんの思った通りになりましたね。」

そう。秦率いる艦隊からの雷撃だった。しかも超長距離雷撃だ。

「魚雷命中―!」「やったね!」

敵艦隊の左後方からの雷撃に、全く気付かれることがなかった。

旗艦由良と駆逐艦4艦からの雷撃は各艦2本ずつの10本。

そのうち命中は5本だった。

敵が秦たちの存在に気が付いて小型艦が針路を変えてきたが、既に遅し、だった。

変針中に第2撃の魚雷10本が襲ってきたのだ。

舵を切つて躲そうとする。が！

命が出た。水柱は4本だった。

計20本の魚雷攻撃で駆逐艦と思しき小型艦3が沈没、1が航行不能、小型空母1も航行不能だった。

深海棲艦には更なる不運が続く。

砲撃と雷撃に気を取られている間に、空からの攻撃に曝されたのだ。

戦爆連合で120にもおよぶ航空機による攻撃だった。

「こちら、赤城航空隊。これより攻撃を開始する。」

「同じく、加賀攻撃隊、推参！ 敵を潰せえ!!」

既上空援護もなく、長門らからの砲撃と由良達からの雷撃で無傷な艦は、既になかったが、赤城、加賀の攻撃隊が止めを刺した。

攻撃隊は容赦がなかった。

航行不能になっていた艦に、航空魚雷と爆弾の止めが刺される。

かくて、航空魚雷と爆弾を打ち尽くして、赤城、加賀の攻撃隊が引き上げていった。

残されたのは、沈みゆく敵戦艦が2隻、あとは既に海上には姿が見えなかった。

だが、秦も油断していた。

秦たちの後方から敵艦隊が接近してきていた。

「電探に感あり。本艦・由良後方3万に不明艦隊。」

「なにー!」

背後に現れたのは・・・空母を失った敵Aの残存艦隊だった。

「戦艦と思しき大型艦を先頭に、複縦陣。およそ10隻。大型艦1、巡洋艦3、駆逐艦6
!」

この時点ですでに敵艦が発砲した後だった。

艦隊の最後尾・樫の後方に着弾した。

「よし、今のうちに、艦隊、反転180。」

「ですが、提督さん、駆逐艦たちは、もう魚雷はありません!」

そう。松型の駆逐艦は魚雷を4本しか装備していない。しかも予備も無いのだ。

今の秦が率いる5隻で、魚雷があるのは由良だけで、残存数は4本のみだった。

「由良、横須賀隊と大湊隊に対して、航空支援を要請して。現在位置も伝えておくれ。」

「了解です! 直ちに!」

そうは言ったものの、横須賀隊の航空隊はさつき帰って行ったばかりで、すぐに来てくれるわけでは無いことは、わかっていた。

残るは・・・大湊隊の翔鶴、瑞鶴の2隻からなる、攻撃隊だ。

ただ、間に合うか、どうか、である。

秦は更に、

「長門へ。時計回りに針路を変えつつ、距離3万になったら、敵艦隊に対して砲撃を開始。」

と指示をしていた。

由良と敵A艦隊とはすでに2万まで接近していた。

敵戦艦からの主砲攻撃にさらされていたが、この距離になると副砲からも砲撃が始まった。

「副砲からの発砲を確認！」

主砲弾ほど大きくは無いが、多数の水柱が上がる。

しかも、発砲間隔は主砲より短い。

距離1万9千、1万8千・・・と近づくと、

後続の巡洋艦からの砲撃も始まった。

こちらにも、回避の為にジグザグ運動や不規則転舵を繰り返し、砲撃を躲そうとする。

そして由良も主砲砲撃を開始した。

14cm砲を打てる限り放つ。

「由良を敵の左舷へ転進。左舷、魚雷戦用意！」

酸素魚雷の超長距離雷撃を行う。

回避運動をしながら、敵に近づき、左舷を敵に向けた。

「魚雷全門、発射用意！ 撃てえ！」

由良から4本の魚雷が放たれた。

その時、由良の船体が大きく揺れた。

敵弾が命中したのだ。

「ぎゃー！」「うわあああ！」

由良も秦も、爆発の衝撃で身体を飛ばされ、壁や床に叩きつけられた。

「うう、直撃?！」

そう。由良の艦橋基部に敵砲弾が命中した。

「だ、ダメージコントロール！被害状況確認……」

と由良が言っただけで倒れてしまった。

痛みを苦しむ秦は、飛び込む通信を聞いていた。

「こちら、翔鶴攻撃隊。これより敵艦を攻撃する！」という通信を。

大湊隊空母翔鶴からの航空支援だ。支援要請は、届いていた。翔鶴隊の攻撃までに、由良に2発、楓、椿に各1発の敵弾が命中していた。由良に、艦橋基部に1発、後部7番砲塔付近に1発が命中。7番砲塔が使用不能だった。

楓は、煙突付近に直撃を受け、船体中央部の上部構造物が吹き飛んでいた。

椿は、艦首付近に被弾。前部砲塔が使用不能だった。

翔鶴隊はまず戦艦に対して魚雷攻撃を行った。

右舷から8本、左舷から2本の魚雷の攻撃だ。左右からの攻撃で回避することができずに10本のうち9本が命中した。

命中から間をおかずに右に傾き、横転してしまった。撃破だ。

残りの巡洋艦、駆逐艦に爆弾と魚雷が襲いかかった。

その時、さらなる増援が到着した。

「瑞鶴攻撃隊、とうちゃあああく！ 全機、突入ううう!!」

敵艦から必死の対空射撃が行われるが、1機また1機と突入してくる攻撃機の爆弾が命中していく。

艦戦は艦橋に向けて機銃を放っていく。

急降下爆撃隊は爆弾を投下し、敵艦の対空能力を削いでいく。

攻撃隊が魚雷を放ち、敵艦の舷側を破っていく。

かくて、翔鶴、瑞鶴両空母の攻撃隊による攻撃が終了した。

この時点で海上に浮いていたのは、横転した戦艦と傾き沈みかけた巡洋艦2だった。

その他は、辺りには見当たらなかった。

「ふう．．．さすが翔鶴、瑞鶴の攻撃隊だ．．．。」

秦が感嘆の声を上げていたが、最後の命令を下した。

「敵艦を、沈めよ．．． 稼働可能な砲塔で攻撃開始。」と。

比較的被弾の少ない樫、檜から主砲砲撃が行われた。

秦は、完全に沈めてやろうと思った。

復活が戸惑われるくらいに。

数射ののち、敵艦は完全に水没した。

そこには傷ついた秦たちが居るだけだった。

「はあ、はあ．．． 終わったかな．．．。」

「ええ．．． 終わった．．． ようです．．．。」

痛みに耐えながら由良が応えた。

「では．．． 帰ろう。横須賀に．．．。全艦、針路、横須賀へ。」

「ここに、全ての戦闘が終了した。」

被害は・・・少ないものではなかった・・・。

帰港

すべての戦闘を終えた艦隊が港に帰ってきた。

横須賀に一番近い布陣の横須賀隊は既に全艦が接岸していた。

大湊隊は港外に錨を降ろしている。

損害のある艦は入渠していた。

最後に、秦に率いられた呉隊が入ってきた。

武蔵に座乗していた大本営首脳は、敵の砲撃による武蔵艦橋の破壊により、艦娘武蔵は辛うじて無事であったが、大半が死亡していた。

生き残りは元帥が重傷、参謀数名が重体、という有様であった。

また、呉隊での喪失艦は半数の8隻にのぼり、中破以上もあった。

黒煙を吐きながら消火をしつつ帰ってくる艦もあった。

臨時で呉隊の旗艦となった由良も艦橋付近に被弾し、中破していた。

横須賀港4番バースに由良がなんとか接岸してきた。

既に自力で微調整出来るような状態では無かったため、タグボートの力を借りていた。

接岸し、舳をしてタラップが架けられた。

すぐさま救助隊が由良に乗り込む。

艦橋から煤けた軍服姿の秦が由良を抱きかかえて降りてきた。

「あの・・・提督さん？ 私、歩けますから・・・」

由良の頬がほんのり赤い。

「無理するんじゃない。」

被弾により手足に裂傷、火傷を負い、被弾の衝撃で身体を壁にぶつけて負傷していた。秦も額から血を流していたが、止血処理され、ガーゼが当てられ、包帯を巻いていた。

「由良を、後を頼む。」

由良を救助隊に委ねた。

救助車の荷台で由良の応急処置が行われていた。

陸に降り立った秦が呟く・・・

「ふう・・・ やつと地に足が着いたな・・・」

そう言つて、今まで乗艦していた軽巡洋艦由良を見あげていた。

左舷を中心に被弾の痕が痛々しい。

小口径砲とはいえ、直撃弾を受けると結構被害は大きい。戦艦クラスなら、どうとううことはないのだろうが、小型艦に近い軽巡では、結構な被害である。

そう思っているとき、一人の女性が走ってきた。

「提督！ 提督!!」

声の方を見やると、長い黒髪を揺らし、息を切らしながらやってきた。

鳳翔だった。

「提督！ ぐ無事で！」

そう言つて秦に抱きついた。いや、飛びついた、方が適切かもしれない。

秦も手を広げるまもなく、鳳翔を抱き止めた。

「提督、提督、ていとく……」

涙声になつていく。

「鳳翔も無事だったか？」

「はい。提督の指示通り、避難民も無事、送り届けました。」

目には涙が溢れていた。

「ぐ無事で……良かった……載っていた由良が、艦橋に被弾したと聞いた時は、

心配しました……」

そこまで言つて秦の胸に顔を埋め、泣いていた。

「心配掛けたね。でも、もう大丈夫だよ。」

そう言つて鳳翔を見つめた。

「別々に行動したのは短い間だったけど、会いたかった……」
煤けた顔の秦の目にもうつすらと涙があった。

そして……秦の手が鳳翔の顔を捉えた。

両手が鳳翔の頬を挟む。その手が頬をゆっくりと撫でる。
撫でる手を鳳翔が捉えた。

「はい。」と。

秦の顔が鳳翔に近づく。

鳳翔もそれに気づき、秦を見あげ、目を閉じた。

次の瞬間、二人の唇が重なる。

唇が離れると、今度は、鳳翔が求めてきた。

背伸びをして、秦の唇を捉えた。

そして……鳳翔の腕が秦を抱きしめる。

また、秦の腕も鳳翔を抱きしめる。

唇が深く強く重なる。

緩くなったかと思えばまた強く重なる。

これを数度繰り返し返していた。

二人はそのまましばらく動かなかった。

ただ、二人は忘れていた。

ここは・・・そう。

岸壁の上で、周りは作業員や妖精さん、艦娘の目がみている。

あちやく、あらあら・・・という声があたりから聞こえていた。

そのうち、秋吉がやってきた。

「ゴホン！」

二人は、そんな事には見向きもせず、未だに二人の世界の中であった。

「まったく。お前さんたちはいつまでやっているつもりだ！ この大衆の面前で!!」

と少々お怒りモードな口調であった。

その声でようやく二人の世界が終わった。

「こ、これは中将。お見苦しいところをお見せしました。」

鳳翔が顔を赤め、秦の後ろに隠れてしまった。

「鳳翔も鳳翔だ。隠れるくらいなら、余所でやればいいんじゃない。まったく。」

呆れ顔である。

秘書艦の赤城も顔を赤めている。

「お母様・・・大胆すぎます・・・」

と呟いていた。

「赤城ちゃん・・・見てたのね・・・ 恥ずかし・・・」

両手で赤い顔を覆ってしまった。

「とにかく！ 楠木、ご苦労だった。 呉隊の損害は大きいが、なんとか敵を撃退できた。 島民の避難も無事に終えた。 作戦は成功だ。」

「確かに、成功、ですね。 しかし・・・ その内容は、悲惨なモノですが。」

「そうじゃな。 勝利とは言え、損害が大きすぎるわい・・・」

「はい。 再建が思いやられます。」

「ともかく、修理と補給じや。 ドックへの入渠は順次行うことでしょうか。」

「ええ。 呉隊は自力航行出来るところまで修理し、呉に帰ってから本格修理をしてもらいましょう。」

「では、手配いたしましょう。」

と赤城が横から声を掛けてくれた。

「頼む。」

そこへ呉隊の長門がやってきた。

「提督、楠木提督。 呉隊各艦に代わってお礼申し上げます。 我らの窮地を救って

いただき、ありがとうございます。」

「いや、負けるわけにはいかなかったから、思わず手を出してしまった。こちらこそすまなかつたね。」

「何を言われる！ あなたがいなければ、いったいどれだけの被害があつたか、分かりません。それを防いだのです。」

長門は必死に訴えている。 秦のおかげだと。

秦はそれを聞きながら微笑んでいた。

「楠木提督。これは私の希望ではあるのだが……」

「ん？」

「楠木提督に、呉に、呉の提督として来てもらえないだろうか？」

「は？」

秦も秋吉も、その言葉に驚いていた。

「ここ横須賀には、秋吉提督がおられる。かつ楠木提督もおられる。ならば！ 楠木提督に……」

「まった!!」

と秦が割つて入った。

「長門。それはここで言う話じゃない。」

「——ツ」

「気持ちには分からなくてもないが、その話は、大本営が決める事じゃ。」
と秋吉が纏めた。

「しかし!!」

「長門。君には呉提督の代理を命じる。正式に提督が配属されるまで、呉鎮守府の運営を適切に行う事を命じる。いいね?」

と秦が、呉隊の臨時提督として命じた。

命令となれば従うしかない長門だったが、

「分かりました。が、今後の事もお考えください。」と。

秦は心の中で笑っていた。

(この台詞、以前にも聞いたことがあるなあ・・・まだ、結論が出てもないのに、あちこちから誘われるのも、いい加減にしてもらいたいが・・・)と。

◇

岸壁での再会を果たした秦と鳳翔は、秋吉、赤城と共に秋吉の執務室に帰ってきた。

秋吉が椅子に座り、赤城、秦、鳳翔ら三人はソファーに座った。

「ふう。ようやく落ち着いたかの。」

「ええ。」

そう赤城が応えると、お茶を煎れに席を立った。

「さて、と。楠木よ。今回の結果で、ワシは少々考えがあるんだが、きいてくれるか？」

「はい？ その“きく”は、聞くだけ、ですか？ それとも、言う事を聞け、ですか？」

「ん？ えらく警戒してるな。」

「警戒もしますよ、そりゃあ。今までずっと中将に嵌められっぱなしですからね。」

「おう？ そんなことはあるまい？ 人聞きが悪いぞ。ワシはそんなふうに教えた覚えは無いが？」

「今までの事を考えたら、必然ですよ。」

そう秋吉と秦が言いあつた。

その二人の話を傍らで聞いている赤城と鳳翔は、クスクスと小さく笑つていた。

「んっ！」と秋吉が咳払いを一つする。

「ともかく、話を聞くだけ、聞け。」と言う。

「明日、大本営で会合があるだろう。なにせ、元帥が重体、参謀どもも重体、重傷ばかりだからな、必然的に今後の体制の話が出るだろう。そこでワシは引退するつもりだった……だが、この有り様だから……引退どころでは無くなつた。そこで、入院して治療することにした。」

「！！！」

その言葉に皆、驚いていた。

当初は治療を拒否していたのに、だ。

しかし、秦だけは、いやあーな顔をしていた。

「で、ワシの入院中の、ここ横須賀を楠木、貴様に後を託す事にする。」

そこまで言った秋吉の口角筋が上がっていた。

「やっぱり……」

と秦は秋吉とは対照的な表情をしていた。

「私は…… またしても、してやられたのですね。」

諦めに似た、溜息をつきながら秦が答えていた。

秋吉は、がははははと笑いながら

「そう言うな。 貴様にはふさわしい地位だと思いが？」

赤城の目も、秦を憐れむように見ていた。

「楠木提督…… 愁傷様です。」と。

「赤城さん、それ、ここで言う？」

「あら？ 違いましたか？ そうとなれば、ここ横須賀の運営は、楠木提督とお母様のお

二人で行っていたいただきますね。」

「あら？ 赤城ちゃんは、どうするの？」

「はい。秋吉提督のお側に居ようと思ひます。」

と言つてふふふと笑つていた。

「楠木提督とお母様のお二人の様に、です。」

そこまで言われて皆、顔が赤くなる気がしていた。

その後しばらく話をして、秦と鳳翔は寮に帰つていった。

◇

「ただいま。」

と秦と鳳翔が寄り添つて一緒に入つてきた。

「おかえり！」

と睦が飛び出してきた。

「心配だったよ〜」

と言いながら、秦と鳳翔に抱き着いてきた。

「無事に戻つたよ、睦。」

「ただいま、睦ちゃん。」

秦と鳳翔が睦に声を掛けた。

居間の入り口で三人が抱き合っている。

睦は、顔を秦と鳳翔に、スリよせてる。

「よかったあ。」

と安堵の声を出しながら。

睦を抱きとめた秦は、鳳翔も一緒に抱きかかえて。

しばらく抱き合っていたが、秦が改めて報告した。

「楠木 秦、及び鳳翔、ただいま帰還いたしました!!」と敬礼をする。

そして睦が、「ご苦労様です。無事のご帰還、おめでとうございます!!」と二人に向かって敬礼をした。

ぷっつと三人同時に笑い出してしまった。

「あははは。とにかく、無事に帰ったよ。睦。」

と改めて言う。

「うん、お帰り。父さん、鳳翔さん。」

ここに三人が再開し、笑いあえることに喜びと安心感を感じていた。

宴～告白事件～

作戦終了から2日。

呉隊の各艦の最低限の修理が明日には終わる、との報告がきた。

この日は、大本営で緊急の会合が行われていた。

秋吉の推測通り、今後の体制の話だった。

重体の元帥はそのまま療養に入るようになった。

重傷の参謀たちは何とか仕事に付けそうであったが、いかんせん、ほとんどが武蔵被弾時に死亡したため、急な配置転換で大本営の人員刷新が図られることになった。

秋吉は先の話のとおり、病氣治療に入り、横須賀の提督を秦に任せる事になった。

呉は・・・しばらく空席となり、一時的に大本営が直轄することになった。

で、横須賀の鎮守府では・・・

明日には大湊隊、呉隊の各艦が帰るため、今日はお別れ会として宴会が行われることになっていた。

食堂での大パーティーである。

しかも昼の1時から。

秋吉は呆れていた。まったく、酒飲みどもめ、と。

秋吉と赤城は会議のため、遅れて参加することとなったが、酒飲み艦娘にとっては、その辺はどうでも良かったらしい。

「ういいうい！ 酒が飲めるぞお！」

「隼鷹？ 待ちな！ あつ！ もう呑んでる??」

「うへへへっ、いいじゃんかああ。 どうせ呑むんだしい！」

もうすでに出来上がっているヤツもいる。

傍からは、いいじゃん、いいじゃんと煽る奴も。

食堂には、横須賀、呉、大湊の艦娘たちが勢ぞろいしていた。

もちろん、提督も。

総勢50人にはなろうか。

テーブルには、間宮と鳳翔の手による料理が・・・もとい、酒のアテと化すであろう料理が並んでいた。

料理は、和洋中なんでもござれ。

揚げ物、焼き物、煮物、フルーツなどのデザート類も。

酒類は、日本酒、ビール、ウイスキー、焼酎などなど、こちらもなんでもござれ、だ。

さすがに鳳翔と間宮の2人で料理を用意するのは大変だろうと思ひ、秦は楠木隊の各

艦娘に手伝いをさせていた。

卯月はぶーぶー言っていたが、秦は楠木隊だけであとで慰労会をやるつもりだと言うと、みんな素直に手伝ってくれることになった。

一通りの料理の用意が来ると、宴の始まりを告げた。

「え、僭越ながら開会のあいさつをさせてもらう。呉と大湊のみんなは初めてだね。横須賀の副提督をやっている楠木だ。以後、よろしく。で、堅苦しい挨拶はなし、でいこう。」

そう秦が言うと、あちこちから、おおおー！ と声が上がった。

「とは言え、まずは今日ここに参加できなかった、沈んでいった者たちに哀悼の意を表させてもらう。」

この瞬間だけは、皆静かになった。

今回は、呉隊に多大な損害が出ていた。

もちろん、救助された艦娘もいたが、全員の救助はならなかった。

「その犠牲の上に、今があることを認識してもらいたい。と、悲しい話はこれくらいにして、と。みんな、グラスは持ったか？ では、今日この日に集ったみんなに感謝して、乾杯!!」

【かんぱあああ!!】

画して、宴が始まった。

我先に料理に飛びつく輩、酒に飛びつく者、それを遠目に呆れて見ている者、いろいろだ。

「うううん、この煮物、いい味しみてるう」

「このお肉、やわらかあい」

「こつちのスープ、冷たくておいしいいい！」

みな料理に舌鼓を打っている。

特に駆逐艦たちは料理に夢中だ。

隣をみると加賀を始めとする空母娘が大皿の料理を平らげていく姿が見える。

（もうちよつと、味わつたら？）と思うほどのスピードで料理が消えていく。

瑞鶴も結構な食いつぶりであった。

翔鶴がそんな瑞鶴を「急いで食べないでも沢山あるんだから」と注意していた。

秦はそんな中で大湊の提督と話し込んでいた。

「支援頂いて、助かりました。あれが無ければ、今頃は海の底でしたよ。」

と苦笑して言っていた。

「いや、君の連絡が的確だったから、上手くいったんだよ。にしても、少ない航空機で

空母をよく攻撃しようと思ったもんだ。そこん所は感心するよ。」

そう言われて秦は、はははっと苦笑していた。

「あの時は必至でした。とにかく、なんとかしなければと。鳳翔の飛行隊が良くやってくれました。」

そう言って、頭を掻いた。

「ところで・・・立華提督の秘書艦は・・・確か・・・」

「ああ、彼女だよ。曙。綾波型8番艦の。」

小柄なセーラー服の少女がこちらを向いていた。

「曙よ。よろしく。」

「楠木です。こちらこそ、よろしく。」

「あら？ 楠木提督の秘書艦は、どうしたの？ 一緒じゃないの？」

「秘書艦？ 鳳翔なら、あそこですよ。」と指を指す。

厨房で調理の真っ最中だった。

「楓ちゃん、これ持つて行ってちょうだい！ あ、由良さんはこれ、お願いね！」

大忙しのようなだった。

その姿を、目を細め、微笑ましく見ている秦に、

「信頼しているのかね？ 彼女を。」

と立華が聞く。

「ええ。信頼、よりも愛情、でしょうか。既に我が家の一員、ですしね。」

「なかなか、恥ずかしい事を言うねえ。聞いてるこつちまで恥ずかしくなるわ。」

「はははつ。ですが、立華提督は、既に指輪を渡しているのでしよう?」

曙の左手には、銀色に光る指輪があった。

「ああ。俺の最愛の秘書艦様さ。いつも傍に居てくれるし、な? 曙。」

「よく人前でシャーシャーと言えるわね。だからクソなのよ。」

曙の頬が赤くなつていくのが分かる。

「まあまあ、二人とも落ち着いてよ。噂通りの仲の良さですな、立華提督?」

そんな会話をしているうちに、厨房での作業がひと段落ついた鳳翔がやってきた。

「ああ、鳳翔? 一区切りついたの?」

「ええ。何とか、みんなに手伝ってもらつて、やつとです。」

と二人はにこやかな顔をしていた。

「紹介するよ。こちら大湊の立華提督とその妻艦の曙。」

秦の一言で立華と曙の顔が一気に赤くなる。

「ま、そうですもの? よろしくお願いいたします。鳳翔です。」

「はい。」

「はい、ちよらいそ。」

楠木提督の秘書艦を

(咬んだ……)

今度は、立華からの攻撃だ。

「そ、そういうえば、楠木提督。岸壁では大胆な行動でしたなあ。」

ニヤニヤした笑いで秦を攻める。

「あ・見られていましたか・。お恥ずかしい。」

秦の頬が赤くなる。

鳳翔は両手で顔を覆って「や、だ・・。」と秦の後ろに隠れてしまった。

「で、楠木提督は、ケツコンはするのかな？」

との質問に秦が答える。

「んんっ?? そう思ってますが、今はまだ。いずれは、と思っておりますが。」

「なら、今はつきりすればいいじゃないか？」

立華の顔が、ニヤける。

「はい??」

二人が同時に声を上げて驚いていた。

「今ここで、君が鳳翔を妻にする、と言うんだよ。ここにいるみんなが見届け人だ。」

「どうだい？」

それを聞いていた艦娘たちが便乗する。

「お？ なになに？ 告白？」

「ヒューヒュー!! 新婚さん、いらっしやああいってか!!」

冷やかしの目が秦たちに集中する。

「どうだい？ 楠木提督？ てか、早くしないと、この場は収まらないぞ。」

立華が急かす。

「いや、こういうのは、雰囲気も大事だから、ここではね？ ね？」

と秦がおろおろしながら答えるが、鳳翔は・・・両手を胸の前で重ねて、目を潤ませて秦を見つめていた。

それを見た秦は・・・（可愛い・・・）と思ってしまったが、逃げ道は・・・無かった。

そして・・・覚悟した。

皆の視線の中、秦は、鳳翔に向き、口を開いた。

「こんなところで、こういうのは場違いだとは思いますが・・・ 鳳翔、俺とケツコンしてくれるかい？」

鳳翔の目から、涙がこぼれ落ちていくのが見えた。

「はい。 お受けします。」と。

次の瞬間、拍手と歓声が上がった。

「ビュービュー!! 新婚さん誕生!!!」

「よっ、いいよお、ご両人!!!」

「お母様、おめでとうございます。」

秦は、優しく鳳翔を抱きしめた。

秦の胸の中で泣く鳳翔に、「こんな形でゴメンね」と囁いていた。

「つぎは、ケツコン式だあ!!」

なんて騒ぎ立てられていた。

「よく言ったな。 楠木提督。 お幸せに。」

と立華は笑っていた。

そんな賑やかな、騒がしい宴会は進んでいく。

昼過ぎに始まった宴会は、ゆうに5時間続いていた。

すでに酔いつぶれているヤツもいた。

未だ食い足りないのか更に食い物を求めているヤツもいた。

各自の部屋に帰っているヤツもいたが、呉や大湊の連中はそのままテーブルに倒れ込んで寝ていた。

秦は、宴会の終了を宣言し、名目上は終わったことになった。

そんな連中を横目に、片付けを終えた秦と鳳翔、由良をはじめとする楠木隊の面々は、

秦の執務室に居た。

そこによくやく帰ってきた秋吉と赤城が間宮を伴ってやってきた。

「壮大な宴会だったようだな？」

「はい。そうりやあもう、大変でしたよ・・・。」

「お疲れ様、父さん。」

睦もやってきていた。

「間宮さん、鳳翔、お疲れ様。 由良や卯月たちもありがとう。」

朝霜や卯月たちは、どう見てもへとへとな様子だ。

「みんな、好き勝手言つて、ちつとも楽じゃない。 あんなの相手に間宮さんも鳳翔さ

んも疲れないの??？」

「あれくらい、大丈夫ですよ。 私なんか、みんなが手伝つてくれたから、楽な方です

よ。」

そう聞くと、ふえええつとへたり込んで脱力する駆逐艦たちだった。

宴～ささやかな宴～

食堂での大宴会が終わり、時刻は1900となっていた。

楠木隊の秦、鳳翔、卯月、朝霜、楓、椿、樗、櫟、由良と、秋吉、赤城、睦、間宮の13人で、寮のダイニングルームに椅子を持ち込んでささやかな宴会を催していた。

ここでの料理は、鳳翔と間宮、そして秦の三人の手によるものだった。

赤城の食欲には、みな驚いていたが、このメンバーであれば、そんなに大食いも大酒飲みも居なかったから、平穏であった。

「やつとご飯にありつけるびよん!!! お腹ペコペコびよん!!」

「ホントにみんな、働かせてくれたよ」

と文句を言いながら料理に箸を伸ばす。

「みんなありがとうね、手伝わせてしまつて。さあ、文句言つてないでたくさん食べな。」

「ねえ? これつて、司令官が作ったの? うつそおお!」

と驚くのは朝霜だ。

「ひどい言われようだが、俺を含めて三人で作ったんだぞ。」

「やるじゃん!! 司令官!! うん、美味しいぞ! 美味しい!」
と褒めてくれている。

「提督の手料理は久しぶりですね。ね、睦ちゃん。」

「そうだね。最近の間宮さんところが多いし、鳳翔さんも作っちゃうし。」

それを聞いてた秋吉が秦に向かつて、

「なんだ、貴様はいっぱしの料理ができたのか?」

「ええ。鳳翔や間宮さんみたいにはいきませんが、出来ますよ。それに、結構、料理って楽しいですよ。」

「ワシには出来ん芸当だ。」

と秋吉は肩をすくめて言った。

「そんなことはありませんよ、中将。今からでも始められては?」

「無理を言うな。」

苦笑いをする秋吉だった。

「今の感じですと、お母様は楠木提督の料理を食べたことがあるんですか?」

「ええ。ここに来る前に。なかなかの腕よ。」

それを聞いた赤城が、へえ〜と言った。

「料理のレパートリーもそれなりに?」

「ああ。 鳳翔や間宮さんみたいには無理だけど、普段の食事くらいなら、これくらいなら何ともないから。」

「そうだよ？ 父さんの料理、結構美味しいよ？」

と睦がフオローしてくれる。

そして秋吉から、

「今回の作戦の最大の功労者は、楠木、貴様だからな。」

と秦を褒めた。

が……

「中将…… それは違いますよ。」

と秦はキツパリと否定して言った。

「今回、鳳翔を始めとする各人の働きによるモノですよ。 私がやったことではありま

せんよ。」

「えらく、謙遜するな。」

「そりゃあ、謙遜もしますよ。 まずは、鳳翔攻撃隊による敵大型空母への攻撃です。」

秦は席を立ち、鳳翔の後ろに立った。 両手を鳳翔の肩に載せて、微笑みながら続ける。

鳳翔の手が秦の手に重なる。

「烈風を爆装して、かつ爆撃を見事に成功させてくれました。4隻の空母の飛行甲板を見事に破壊してくれました。これは大きい戦果です。」

続いて、由良達の後ろに回って、頭を撫でていく。

「次に我が楠木艦隊、由良、椿、楓、樫、樺からの超長距離雷撃です。結果的に24本の魚雷で11本命中ですから、たいしたもんです。あとは・・・赤城、加賀、翔鶴、瑞鶴の各攻撃隊による戦果です。」

そして、朝霜、卯月の後ろに回った。右手で朝霜の頭を、左手で卯月の頭を撫でた。

「朝霜、卯月も避難船を良く護衛してくれました。結果的に戦闘にはならなかったですが、この娘たちが居る、居ないでは安心感が違います。」

自席に戻ってきて、

「私の戦果ではありませんよ。」と。

そう言って、なお秦は思っていた。

（横須賀隊、大湊隊の支援が遅ければ、俺は、今ここにはいなかったかもしれない。

まったく以て、運が良かったただけなんだが・・・。）

「司令官がそう言ってくれると、アタイ達は、嬉しいよ。今までそんなに言ってもらったことないし。」

へへへっと朝霜が笑っていた。

その目にはうつすらと光るものがあつた。

「そうだぴよん！ うーちゃんも、がんばったぴよん!!」

卯月も胸を張っていた。

「そうだよねえ。でも、だいたい、手柄は持つて行っちゃうしさ。」

「どつかの鎮守府では、それが当たり前、つていうところも聞くよ。」

みんな、思っていた愚痴を言っていたが、

「まあまあ、文句はその辺にして。過ぎたことはどうしようもないさ。これからは、

俺がいるウチは、まっとうな評価をするつもりだよ。嘘偽りのない、ね。」

「うん、期待してるよ、司令官!」

皆の期待は大きかった。

「あ、そうだ!」

急に思い出したように椿が声を出した。

「ねえ、司令官? 卯月ちゃんていつもこう、うるさいの? 睦月型つてみんなこんな感

じなの?」

「どうしたんだ、椿?」

「え、作戦中なのに、いちいち、ぴよんぴよん言つてうるさいんだもん!!」

「あ、あれは、椿ちゃんが怒るからぴよん！」

「アタイは怒ってないって言ってるんでしょがああああ!!」

眉間にシワが寄って、怒り面だ。

「うー、また怒るううう・・・。」

涙目の卯月だ。

「まあまあ、落ち着きな、二人とも。」

二人の間を割って秦が声を出す。

「まあ、卯月がうるさいのは今に始まったことじゃないから、テキトーに流しておいてくれ。こいつの性格は変わらないから、さ。」

「椿ちゃんも短気を起こさないで、ね?」

秦と鳳翔が二人を説得する。

「ううう、司令官の言い草は、フォローになってないぴよんよ・・・。」

「そうか? ごめんごめん。」

ははっ、みな呆れ顔であった。

「そうだ、みなに言っておかなければならんことがある。以前にも話したとおり、ワシは明日から長期治療に入る事にした。そのため、暫くここを離れるから、後は楠木、貴様に託すことになった。これは、大本営の決定だ。」

「やはり。 そうなりましたか・・・。」

「貴様に相応しい役職だと、ワシは思うが、楠木提督はそうは思わんようだな。 だが、先の結果からして、貴様以外にはおらんのだな。 嫌でもやつてもらおうことになる。」

「ま、悪く思わんでくれよ。」

嘆息しながら秦が答える。

「仕方がありませんね。 微力を尽くさせてもらいましょう。」

「頼んだぞ。」

そこまで言つて、秋吉が別件の話をし始めた。

しかも口角が上がつて・・・。

「そういうえば、楠木？ 聞くところによると貴様、鳳翔にプロポーズをしたそうじゃないか？」

「な！ なんて知つて・・・。」

「立華に聞いたぞ。 貴様がプロポーズして、そして鳳翔が受け入れたと。」

秦と鳳翔は、互いを見て頬を赤めていた。

「で、それがあつて、隣あつて座っているのかな？」

今、秦の右隣に鳳翔が座っている。 左は睦だ。

「いえ、そういう訳ではないのですが・・・。」

と頭を掻きながら答える秦であつたが、

「少なくとも、鳳翔は、すでに楠木家の一員と思つていましたので、そのままを口にしただけ、と言えますが、しかしながら、そういう事はきつちりと思ひたいと思ひますので……」
改めて鳳翔を見つめた。

「鳳翔には、改めて言うつもりでいます。その方が記憶に残るでしょうから。」

鳳翔は左手を左頬にあて、頬を赤めながら

「はい。期待していませんよ。提督？」

と応じていた。

「やつとなのね、父さん？　そう言う事は早めに言つてよ？　期待してるよ、父さん、お

母さん！」

にひひと笑いが見える顔で睦が秦と鳳翔を焚き付けている。

「睦！」「睦ちゃん！」

二人が同時に声を荒げた。

そのあとは、皆で秦と鳳翔を揶揄する話で盛り上がり、楽しくも愉快的な時間は過ぎていった。

◇

翌日、早朝から横須賀の港は慌ただしかった。

まず、大湊隊が抜錨した。

大湊へと帰るためだ。

各艦が房総半島を廻つて北を指すコースをとる予定だ。

続いて、呉隊が抜錨した。

呉へと帰るため紀伊半島を超えて四国を廻るコースをとる予定だ。

被弾した艦艇を中心に、港を出て行つた。

横須賀の作業員や艦娘らが岸壁で彼ら彼女らを見送っていた。

またいつか会おうと、約束を交わして。

それぞれの艦からの汽笛が、その姿が見えなくなるまでいつまでも響いていた。

二人の先は・・・

ケツコンカツコカリ

8月になろうとしていた、暑い日の昼下がり。 秦に一通の手紙が来た。

「提督さん、手紙が来ていますよ。」

今日は由良が秘書艦代理だった。

「ご実家からですね、この差出人は。」

ぶっ。

お茶を吹き出しそうになった秦だった。

「実家だあ？」

手紙を受け取って差出人を見ると、確かに、お袋からだった。

訝しながら開封する。

「なになに・・・えつとお・・・」

そこには、手紙と写真が入っていた。

写真には、女性が一人、椅子に腰かけてこちらを見ているようなポーズだ。

振袖姿の一見、綺麗な女性だ。

手紙には、こう書いてあった。

（親戚から、「いい加減、嫁をもらいなさい」と見合いの話が来ているから至急、連絡されたし。）（要約）と。

「まったく……」

秦が嘆息する。

写真を改めて見るが……

（ん？ あれ？ 幼馴染に似てる気が、しないでも……ないか。）

「そう言えば、鳳翔はどうしたんだい？」

「奥さまですか？ 今日はずちやんと街へ買い物に行ってますよ。」

告白事件以来、鳳翔を奥さまと呼ぶ奴らがいる。秦の事を旦那さんとも。

由良もその一人だ。

「だからあ、まだケツコンしてないって、何度も言ってるでしょうがあ。」

「みなとの共通認識ですから、抵抗しても無駄ですよ、提督さん。あれだけ派手に告白したんですから、諦めてください。」と畳み掛けていた。

さらに、「さっさとケツコンでもなんでもすれば変わるんじゃないですか。」と、つれない一言だ。

こんなやり取りがほぼ毎日だ。

何回やっても慣れないもんで、秦も毎回ドキドキするのだった。そんな時、鳳翔と睦が帰ってきたようだった。

執務室の扉を開けて入ってきた。

「提督、ただいま戻りました。」

「父さん、ただいま。」

「やあ、二人ともお帰り。」

にっこりと二人を迎える秦だった。

「今日は何をしてたんだ？」

「えへへへっ。ひみっだよ。ねえ、鳳翔さん。」

「ええ。秘密です。」

そう言つて、ふふふつとほほ笑んでいる。

「なんだよ？ 二人して。教えてくれないんじゃない？」

「ひみっは秘密だよ。じゃ、あたしは帰ってるね。」

そう言つて寮に帰って行つた。

「私も荷物を置いてきますね。」

鳳翔も睦に続いて出ていった。

その姿に「もう母娘ですね、あの二人は。」と由良が言う。

ヤ、

「提督さんも覚悟を決めたらどうです?」

「ん? 覚悟? 覚悟は決まってるよ。あとはタイミングだけさ。」と秦。

「提督さん? その手紙の返事はどうされますか?」

「ああ・・。 そうだな・・。 この件は鳳翔とちよつと相談するよ。彼女にもかかわる話だしね。」そう言つて実家からの手紙を懐にしまった。

その夜。

夕食、入浴を終え、就寝までの時間を居間でゆつたり過ごしていた。

そこへ睦がニコニコしながらやってきた。

「へへっ。 父さん! じゃあーん!!」と。

何かと振り向けば、着物を着た睦が腕を広げた状態で立っていた。

「お? 着物か? ん?」

着物と思つた秦だったが、ちよつと違う事に気が付いた。

「あれ? 着物・・。 だけど・・。 何か違うなあ・・。」

睦が笑っている。

「あれ? おはしよりが無いのか? いや、胸元が結構、ゆつたりしてるし、帯も細い

し……」

そして気が付いた。

「あ！ それ、小袖だな？」

「正解あい！ そう。小袖だよ。 どう？」

着物に見えた和装だが、小袖だった。

淡い山吹色の小袖に、薄い水色の湯巻を付けている。

「良くわかりましたね、提督？」

そう言つて鳳翔もやってきた。

睦とおそろいの小袖姿だ。

「今の時代は、着物が多いけど、小袖とは思わなかつたなあ。」

睦がクルリと回つて見せた。

「へえ。 似合つてるじゃないか、二人とも。 可愛らしいし。」

「小袖は、昔の普段着ですし。 着物より動きやすくていいんですよ。 着物より夏は

涼しいですしね。」

鳳翔と睦が並んで立つと、まさに母娘だ。

二人して小袖の感触を確かめあっているが、秦にとつては微笑ましい時間だった。

「お茶を煎れてきますね？」

そう言つて鳳翔が台所へ入つて行つた。小袖姿のまま。

「睦？ ひよつとして鳳翔と二人で街へ買い物に出かけたのは、コレか？」

「うん。 そうだよ。 この間、TVドラマで歴史ものをやってたんだけど、その時の着物が気になつて鳳翔さんに聞いたら、小袖だつていうから、以前にお店に注文してたの。」

「へえ。 それで以前から二人で街へ出てたのか？」

「うん。 似合つてるでしょ。」

「まさしく、町娘つて感じだな。 可愛いよ、睦。」

そう言つて頭を撫でてやつていた。

へへへつと笑つていた。

そこへ「お茶が入りましたよ。」と鳳翔がお盆を持つてやつてきた。

冷えたお茶が入つたグラスを持つてきた。

「ありがとう。」

お茶を一口飲んでから秦が話を始めた。

「ところで、今日、お袋から手紙が来たんだ。」

「え？ おばあちゃんから？」

「ああ。 で、二人には悪いんだけど、今度の休日、三人で帰省するからね。」

「三人で、ですか？」

「うん。で、話がちよつと込み入ってそうなんだ。手紙の内容を話すと、だな……どうも親戚連中が、俺に見合いの話を持って来たらしい。」

秦が実家から届いた手紙をテーブルの上に出した。

「えっ？ お見合いですか？」

と鳳翔が驚いていた。次の瞬間、顔色が暗くなつていくのが分かった。

「ああ。お袋も断つてはくれているみたいんだけど、親戚の押しが強くて、困つていらっしゃる。それで一度連絡をくれ、という事なんだが、いつその事、直接、話たほうが早いと思つて。」

そこまで言つて、お茶を飲みほした。

「俺には、鳳翔しかいないと思つているから、親戚連中がなんと言おうと、俺の気持ちは変わらんのだけど。」

そう言つて秦は鳳翔を見つめた。

また鳳翔も秦を見つめていた。

鳳翔の顔色は……頬を赤めていた。

「で、向こうで2泊ほどして、ちようどいい機会だから、そのまま鳳翔のご両親にも挨拶を……」

と鳳翔を見ながら秦が言った。

「え？　うちの両親ですか？　た、確かに、いつかは挨拶を、とは思っていましたが……。」
ちよつと考え込んでしまった鳳翔だが、しばらく悩んで、

「分かりました。　両親に話しておきます。　でも……　ちよつと恥ずかしいですね。」
「ははは。　いつかはしなきゃな、と思つていたからね。　ちようどいいとも取れるし、
ついでとも言えるけどね。　じゃ、そう言う事で。」

そして……

「鳳翔……　話は戻るけど……　その小袖姿、よく似合ってるよ。　やっぱり鳳翔は和装
が似合うね。」

両手を小さく広げて

「ありがとうございます。　そう言つて頂けると、嬉しいです。　睦ちゃんとお揃いで
仕立ててもらいましたが、良かったです。」

とニコリを微笑んでいた。

◇

翌日早朝、陽はまだ昇つてはいなかったが、既に空は明るかった。
今日は快晴になるだろう。

鳳翔は既に朝食の準備で台所にいた。

秦も身支度をして台所に入つて行つた。

「鳳翔、ちよつといいかな？」

とちよつと真剣な声で鳳翔を寮の外まで誘つた。

もう少しで日の出の時間になる。

海から日が昇りかけていた。

徐々に水平線が青からオレンジに、グラデーションが掛かつていく。

二人して日の出を見に来た、わけではなかった。

「すまないね。朝の忙しい時間に。」

「あ、いえ。大丈夫ですよ。あの、ところでいったい……」

怪訝そうな表情で秦を見た。

その秦が、意を決したような顔で鳳翔を見た。

いつになく、真剣な顔で。

「鳳翔。俺は、女性に上手い気遣いが出来るわけでもない、廻りに流されやすい性格なのに、曲がつた事が嫌いな性分だ。そんな俺が唯一、隣に、傍に居て欲しいと思つた女性が出来た。それが君だ。あの大雨の日に、初めて見たとき、なぜか他人のような感じはしなかつたし、その時から傍に居て欲しいと思つたんだ。」

秦が鳳翔の手を取つて、目を見つめた。

「もう、俺の気持ちは、みんなの前で言った通りだけど、改めて、言わせて欲しい。あの、昇る旭に誓って。 鳳翔。 私、楠木 秦とケツコンしてくれるかい？」

ちよつと驚いた顔をしていた鳳翔だったが、段々と表情が穏やかになっていく。

「やつと、やつと、言つてくれましたね・・・」

とほほ笑みながら、その目にはうつつすらと光るものがあつた。それが朝日に光つて綺麗に見えた。

両手を胸の前で合わせて、俯いたが、顔を上げて答える。 顔はニコリと嬉しそうに。

「はい。 お受けします。 不束者ですが、末永く、よろしくお願いいたします。 提督。」と。

秦の顔が、心が、ホツとした。

「ありがとう、鳳翔。」

そして、これだけは受け取ってほしい、と差し出した。

指輪だった。

「カッコカリなんて余計な名前が付いているけど、この指輪を鳳翔、君にしてほしい。」

「

「これを？」

「ああ。・・・カッコカリが嫌なら、本物を用意するが・・・」

「いえ。頂きます。カッコカリでも、ケツコン指輪に違いはありませんでしょ？」
頬を赤めながら左手を差し出した。

朝日が昇り始めた、雲一つない空の元で、秦が鳳翔の指に指輪をゆつくりとはめる。
はめたところで、秦が鳳翔の手を握り、身体を引き寄せた。

「ありがとう。鳳翔。いつまでも、ずっと、俺の傍に居てくれ。」

秦の腕が鳳翔の身体を包み込む。

鳳翔は秦の胸に顔を埋めている。

「私も、提督にお会いした時から、全くの他人と言う感じはしませんでした。同じように、一緒に居たいと思っていました。ですから、嬉しいですよ。」

ここに一組の夫婦カッコカリが誕生した。

「ところで、鳳翔？ やっぱり、ウチにいる間だけでも、〃提督〃は、やめない？」

「えっ？ やっぱり、そう思いますか？」

「うん。」

頬を赤めながら、

「では、・・・秦さん・・・」

「それは、そうだけど、なんだか、余所余所しいな。」

さらに赤みを濃くしていく。

「じゃあ、・・・あ、あなた？」

鳳翔も秦も、頬が赤い。

「・・・うん。それがいい、かな。」

「は、はい・・・。」

と鳳翔の頬が、いや、頬どころか、顔全体が、耳まで真っ赤つかった。

睦の友達

ダイニングルームで秦と鳳翔が向かい合って、朝食を摂っている。目が合うたびに、微笑んで。

朝食を終え、秦が居間で一休みする。

鳳翔が後片付けを終え、睦を起こしにかかった。

「睦ちゃんを起こしてきますね。」と。

2階の睦の部屋にやってきた。

睦はまだ、夢の中だった。

相変わらず、寝相がいい。

ベッドの傍までやってきて・・・

「睦ちゃん、朝よ。起きて。」と優しく声を掛ける。

が、いつこうに起きる気配はない。

そして・・・

フフフと不敵に笑った途端、

(こちよこちよこちよ・・・)

布団に手を突っ込んで、睦の脇腹をくすぐり始めた。

「!! くわあ! わ、わはははははははっ! は、ひい!!」

と睦が声をあげた、いや、悲鳴に近い。

「起きなさい!」と鳳翔が声を掛ける。

「もう! 起きるじゃん! 毎日、まいにち・ち・ち・あれ? また、鳳翔さん?」

くすぐるのが秦ではなく、鳳翔だったことに睦が驚いていた。

くすぐりは秦と鳳翔が交互にやっていたのだった。

上半身を起こした状態で、

「えい!!」

「わあ!」

鳳翔が飛び着いて二人してベットのの上に倒れた。

「起きなさい。もう朝よ。」

「わ、わかったよ、起きるから……」

睦は気づいた。鳳翔の左手の指に光るものがあることに。

「あれ? それ、その指輪……」

ふふつと笑って「提督にもらったの。」

(いつの間に……)

「え？　じゃあ・・・」

「ええ。　提督とケツコンしたわ。　これからもよろしくね、睦ちゃん。」

頬を赤めながら鳳翔が答える。

一拍の間を置いて、今度は睦が鳳翔に抱き着いた。

「やったあ！　鳳翔さん、おめでどう！　これでお母さんって呼べるよ！」

「ふふふつ。　ありがとう。　さ、起きて朝ご飯にしましょ？」

「うん!!」

睦と鳳翔がダイニングルームに入ったそのすぐ後から秦が入ってきた。

「おう。　やつと起きたか。」

「あ、父さん！」

へへへと笑いながら秦に抱きついた。

「父さん、おめでと。　やつと決心したんだね。」

抱きついたまま、涙を流していた。

睦は嬉しかった。

鳳翔が、自身の母となること。

自分の所為で秦が幸せにならないのではないかと考えていたことからの解放。

秦が睦の頭を優しく撫でる。

そして、両腕でキュツと抱きしめた。

「ありがとう、睦。これで、三人で家族だぞ。誰一人欠けることのない楽しい家族にしような。」

「うん！」

「睦ちゃん……」

二人を見ていた鳳翔の目に涙が浮かんでいた。

「鳳翔も、おいで。」と秦が誘う。

涙を浮かべた鳳翔がゆつくりと秦と睦に抱きついた。

“疑似三大家族”だったが、実質的にも形式的にも“三大家族”となった。

「これからも、よろしくな。鳳翔、睦。」

「うん！ 父さん、お母さん！」

「はい。睦ちゃん、あなた……」

しばらくの間、三人は抱き合ったままだった。

朝から、それはそれは熱い抱擁だった。

「さあ。睦、朝ご飯を食べちゃいな。それからでもゆつくり出来るから。」

「うん！」

今、ダイニングで睦が朝食を摂っている。

そのそばで鳳翔と秦がニコリと見ていた。まるで父と母が娘を見るように。

睦は、母が出来たことに喜んでいた。

睦は、母といっぱい、話がしたかった。

その為か、急いで食べた。

「そんなに急がないのよ。 ゆっくり食べなさい。」と鳳翔にたしなめられていた。

まさに、母が娘を叱っているがのごとくだ。

「ほら、ちゃんと食べないと、母さんに怒られるぞ。」

「分かったよお。」

そう言いながらも目はキラキラとしていた。

◇

「そういえば、今日は友達が来るんだったよな?」

「うん。 10時過ぎに着くバスで来るって。」

ここの鎮守府の入口の真ん前に、バス停がある。

それも「鎮守府前」。

友達らはそのバスに乗って来るらしい。

10時少し前になって睦がバス停まで迎えに行った。

途中、「あら？　睦ちゃんじゃない。どこかお出掛けかしら？」と声を掛けられた。

「あ、こんにちは。加賀さん。今日は友達が遊びに来るの。」

「どこへ？」

「うん。父さんの、提督の許可はとってあるから。」

「そう。じゃ、気を付けて遊ぶのよ。」そう言って行ってしまった。

睦が鎮守府の入り口で、門番と一緒に立って外を見ていると、バスがやってきた。

バスが止まって、ドアが開く。

開くと同時に、「とうちゃあああく!!」と和美が飛び出してきた。

続いて由美とあおいが降りてきた。

「やつほ。いらっしやい。ようこそ横須賀鎮守府へ。」

と睦が出迎えた。

「おはよう。来ちゃったよ！」と3人とも微笑んでいる。

門番で受け付けをした。

一応、部外者を入れるわけなので、立ち入り許可証が渡された。

首から許可証を下げる格好だ。

3人はそれを受け取ると、睦と一緒に寮に向かった。

「ここからはちよつと歩くよ。」

「遠いの？」

「ちよつとね。」

入ると正面は海だ。岸壁を右手に見て歩いていく。

「わあ、すごい！ 軍艦をこんな近くに近くで見るとなんて。」

岸壁や棧橋には何隻かの船が停泊していた。

「向こうの一番大きな棧橋に係留されているのが、航空母艦の加賀。その向かいが同

じく航空母艦の赤城だよ。」

「へえ〜 大つきい！」

「ねえねえ、あつちに泊っているのは？」

「あれは……」

小型艦だ。

「あれはね、駆逐艦の朝霜だよ。隣り合っているのが、卯月。駆逐艦だよ。」

「じゃあ、あつちの大きな船は？」とあおいが聞く。

「あ、あれね。あの船は、父さんの旗艦、航空母艦・鳳翔だよ。」

「あの陰に隠れているのは？」

「あれは、巡洋艦の由良。」

（あれ？ もう改装は終わったのかな？）

「あの向こうの、のっぼな船は？ 戦艦、かな？」

「うん、戦艦。 あれは高速戦艦・霧島だよ。」

睦が質問攻めに会いながら寮へと進む。

入渠ドック、工場、鎮守府本館と過ぎ、寮へとやってきた。

「「デカ！」」

三人が驚いていた。

それを見た睦は（アタシも最初に来たときはそうだったよなあ）と思い返していた。

「さあ、はいって。」

と睦が促すが、

「え？ いいの?? てか、ここなんだ。」

と三人が唸っていた。

「ただいま。 連れてきたよ。」

と寮に入っていく。

つられて三人が「お、おじやまします。」と小声で入ってきた。

「あら、いらつしやい。 ようこそ。」

と奥から鳳翔がにこやかに出てきた。

今や私服の定番となった小袖姿で。

「紹介するよ。あたしのお母さん。」

「は、初めまして。由美です。」

「和美です。」

「あおいです。」

三人が挨拶する。

「こんにちは。睦がいつもお世話になってるわね。ありがとう。」

と鳳翔がにこやかに応じていた。

「じゃ、三人とも、部屋へ行こう。」

そう言つて四人は2階の睦の部屋に向かつていった。

「ねえ、睦ちゃん？ お母さん、綺麗だね？」

「そうかな。」

と謙遜して答えた。

四人で、勉強する……つもりもなく、女子トークで盛り上がっていた。

睦の部屋の床には、寝ころがるように床マットを敷いてあった。

みんな、そこに座り込んでいた。

しばらく経つて、鳳翔が冷えたお茶を持ってやってきた。

「さ、冷えたお茶を持って来たわよ。」

「お茶？」

「うん、ウチはだいたい、お茶派なの。」

「へえ〜」

「このお茶は、甘いですよ。一口どうぞ。」と。

最初にあおいが飲んだ。

「！ なにこれ。甘っ！」

なになに、とほかの二人もお茶を飲んだ。

「確かにい。これ、甘くておいしー！」

「お茶のイメージが変わるよお。」

「ちよつと、玉露を入れてみたの。」

「「へえ〜」」

その時、鳳翔が思い出したように言う。

「あ、そうそう。睦ちゃん、お昼を食べたら、提督が執務室までみんな来てつて言っ

てたわよ。」

「父さんが？」

「ええ。」

「なんだろう？」

と首を傾げる睦だ。

「それは・・・行つてからののお楽しみ、ね。」

と鳳翔がニコリとしていた。

なにか、知っている、と言わんばかりの不敵な微笑みだった。

「あああ。お母さん、何か知ってるの？」

「それは・・・ひみつよ。」

と人差し指を左右に振つて部屋を出ていった。

その後も子ども達の女子トークは続いた。

そしてお昼時。

「睦ちゃん、お昼ご飯よ。」

と鳳翔が声を掛ける。

「はああい。」

と大きな声で返事をして、

「みんな、行こう！」

と、三人を誘う。

ダイニングでは鳳翔がお昼ご飯の準備をしていた。

デミグラスソースのいい匂いがしていた。

お昼ご飯は、ハツシユドビーフだった。

四人によそつた鳳翔が

「みんなの口に合えばいいんだけど．．．どうかしら？」

と少々不安気味に睦たちを見ていた。

「いったただきまあす！」

「おいしそう!!」

四人がほぼ同時に口に運ぶ。

「ん！ おいしく！」

「うん、美味しいね。」

それを聞いて「良かった。おかわりはたつぷりあるわよ。」と。

四人の箸が、いや、スプーンが止まらない．．．。

おかわりの一番は睦だった。

「お母さん、おかわり！」

「はいはい。」

ご飯をよそい、ハツシユドビーフを掛ける。

「はい、どうぞ。」

すると、和美らが

「あのう。おかわりを・・・」と小声で言ってきた。

「はい、おかわりね。」

「アタシも。」「私も。」

「あらあら、ちよつと待ってね。」

結局四人ともおかわりをした。

「ごちそうさまでした!!」

「ああ、おいしかったあ。」

そう言ってお腹を擦っている。

「でも、くるしく・・・」

四人とも、お腹がパンパンになっている。

見るからに、食べ過ぎだろう、思うくらいに。

「ふふつ、よかったわ。その様子じゃ、食後の休憩が必要ね。」

四人はリビングに何とか移動し、ソファに倒れ込んだ。

「お腹いっぱいになったら、眠くなってきた。」

「うん、あたしも・・・」

みな、ふわああああ、と大あくびをして、寄り添って眠ってしまった。

鳳翔がリビングの窓を開け放ち、風を入れた。

今日は天気がよく、海からの風が心地よい日だった。

薄手の掛け布団を掛けてもらって、まるで四人姉妹のようだった。眠っている間に鳳翔は秦の執務室までやってきた。

「あ、鳳翔、睦らはどうした？」

「お昼ご飯を、お腹いっぱい食べて、いま、お昼寝中です。」

とほほ笑みながら答えていた。

「えっ？ 昼寝？ まったく・・・」

秦は呆れ顔だった。

「起きてくるかな、せっかく用意してるのに。」

とちよつと心配になる秦だが、

「その時は、また起こしますから。」

と鳳翔がにっこりと答えていた。

四人がお昼寝に入ってからほぼ一時間。

和美たちが、もそもそと起き出してきた。

「ふわあああああつ」と伸びをする。

十分すぎる昼寝であった。

そして、睦は思い出した。

秦に呼ばれている事を。

「あ、そうだ！ 父さんに呼ばれてるんだった!! みんな、行くよ！」

三人を起こし、四人で秦の執務室へと向かった。

執務室では、秦と鳳翔が睦たちへのサプライズプレゼントの用意をしていた。

「よし、これで準備完了だな。」

それは箱に入れられ、渡し主が来るまで保管されることになった。

そして……

コンコンと扉を叩く音がして、「父さん、入るよう？」と睦たちが入ってきた。

「あら。どうぞ、みんな入って。」

と鳳翔が声を掛けた。

四人をソファーに案内して、秦が話す。

「ようやく、来たね。 ゆっくり休めたか？」

「うん。 ちよつと、寝過ぎちゃったけどね。」

と四人が顔を見合わせ、笑った。

「ところで、何の用なの？」

「ああ。 実は、四人にプレゼントがあるんだ。」

「『プレゼント?!』」

「鳳翔?」

「はい。これよ。」

そういつて箱から取り出した。

「和美ちゃん、由美ちゃん、あおいちゃんには、ウチの睦ちゃんがお世話になつてゐる事へのお礼を込めて、四人にお揃いで作つたの。」

「これつて・・・」

「着てみてくれるかい?」

「うん。着てみるね!」

そういつて隣室へと入つて行つた。

しばらくして四人が鳳翔と共に戻つてきた。

藍色の生地、淡い朝顔の染がしてあつた。

浴衣だつた。

藍色生地はお揃いだつたが、四人それぞれで朝顔の花の色と大きさが違つていた。

淡い赤、薄い青、白、黄色の花ビラがあつた。

「お、よく似合つてるじゃないか、四人とも。」

「ありがとう。父さん」

「「ありがとうございます！」」

四人はキャツキヤツツ言いながら浴衣姿を楽しんでいた。

「すまないね、鳳翔。着付けまで頼んじゃって。」

「いいえ。浴衣の着付けくらい、なんでもありませんから。」

四人の浴衣姿は、よく似合っていた。

四人はまた睦の部屋へと戻って行った。

再び女子トークで盛り上がっていたが、楽しい時間はすぐに過ぎ去ってしまった。

もう陽が傾きかけていた。

鳳翔が、睦たちに声を掛けた。

「あなたたち、晩ご飯は食べていく？」

「あ、大丈夫です。もうそろそろお暇しようと思っっていますので。」

「はい、お父さんが迎えに来るんです。」と。

「あら、そうなの？ 残念だね。せっかく、私の料理を食べてもらおうと思ったの

に……」

と、ホントに残念そうな顔をしていた。

「あたしたちも、残念ですう。」

「そうだよねえ。睦ちゃんのお母さんのご飯、美味しかったから、期待しちゃうんです

けど、今回は・・・すみません。」

ちよつと申し訳なきような顔をしていたが、こどもが勝手に夜遅くまで遊んで良い訳はない。

そして・・・鳳翔と睦が三人と鎮守府の入口まで来ていた。

入口の前で三人の親たちが待っていた。

「父さん、ただいま。」

と駆け寄って行く。

三人は浴衣のまま迎えの車に乗って行く。

鳳翔から、浴衣の件は説明はしておいたのは、当然として。

「睦ちゃん、バイバイ！」

「またね!!」

と声を掛けあつて。

三人は家族の運転する車で帰って行った。

残された鳳翔と睦。

「帰っちゃったわね。」

「ウン・・・」

「ちよつと、寂しい?」

「ウン、ちよつとね。 あんなに賑やかだったし、ね。」

睦は、三人が帰って行つた方をしばし見ていた。

「さ、私たちも帰りましょうか。」

「うん！」

そういつて睦は鳳翔と手を繋いで帰って行く。

夜空に浮かぶ月を二人で見ながら歩いていく。

「明日もいい一日になればいいね？」

「そうね。 いいお天気で、いい日にしましょ。」

母娘二人の影が寄り添いながら帰って行つた。

“お母さん”の役目

最近、執務室に朝霜がちよくちよく遊びに来る。

遠征や訓練の空き時間になると・・・

「しれーかん！ 邪魔するよー！」

とドカツつと、入口のドアをノックもすることなく勢いよく開けて入ってくる。

まるで、片言の日本語をしゃべる、某高速戦艦娘みたいに・・・。

「あ？ 朝霜か。」

といつもの事か、と秦が溜息をつく。

「あんだよ？ 連れねえじゃんか？」

「何言ってるんだよ・・・いつもの事じゃないか。もう、驚かんよ・・・。」と。

「あ、冷たい事いうじゃん。せつかく遊びにきてやってんのにさ。」

溜息をつきながら秦が朝霜のそばまで進んで・・・

パカーン！

書類で朝霜の頭をはたいた。

いい音！

「我ながら、いい音だな。」

「ひいひいひい、イテエ！」

と頭を押さえる朝霜。

「あ、あにすんだよ！」

「ここは仕事場だ。遊ぶところじゃない!!」

「ええええ？ 遊ぼうぜ、しれーかん！」

そこへ鳳翔が執務室に帰って来た。

「あら、朝霜ちゃん？ また、遊びに来たの？」

「ほ、鳳翔さん、ち、違うの！ しれーかんが遊びたいって思ってるだろうなって、さ

？」

「誰がじゃ？ 朝霜はソファーにでも座つとれ。 まったく。」

秦は呆れて、更に溜息をついていた。

「提督、これが今回の島民帰還護衛任務の報告書です。 廊下で第1艦隊の霧島さんか

ら受け取りましたよ。 第1艦隊、第2艦隊全艦無事、とのことですよ。」

「ああ。 ありがとうございます。 そうか、無事に終わったか。 霧島は何か言ってたかい？」

「いえ、特には。 小笠原諸島への避難民の帰還は無事完了したと。 ただ、敵の姿を見

なくなつて、残念がっていましたよ。 いても小物ばかりで艦隊の頭脳としての働きが

不十分だと嘆いてましたよ。」

「そうか。島民の帰還がスムーズにいつて良かった。ま、戦闘にならなかつただけでも、いいことだよ。不安は残るけどね。」

敵深海棲艦の前回侵攻時に避難した小笠原島民の帰還を、横須賀鎮守府の艦艇で護衛していたのだ。

あの侵攻以来、敵の動きは弱い。いや、無いに等しい。だから、秦は、不安だった。

秦と鳳翔の会話をよそに、ぶーぶーとソファに座っている朝霜が言っていたが、その座り方がちよつと、女の子らしからぬ座り方だった。

ソファアーとは言え、胡坐をかいて座っていた。もともと、スカート丈は短いのに、だ。

秦からすると、ちよつとスカートの中が……という状況だった。そうしていると朝霜の傍まで鳳翔が近づいて……

ピシャ!!

と膝を叩いた。

「もう! いつも言ってるでしょ? スカートの注意してっ!」

「イテ! いいじゃん? 座り易いんだよお」

「いけません！ 女の子なんですから、もっと慎みを持ちなさい！」といって、また、ピシヤ!!

と膝を叩く音がした。

「イテツ！」

「ほら、ちゃんと足を揃えて！ スカートを直して！ いい？ 周りの視線、スカート注意、人生の基本ですよ？」

「はああい。」

と渋々言う事を聞いていた。

「これじゃあ、足が痛いよお。 しれーかん、なんとか言つてよお？」

「泣きついてきても、ダメ。 鳳翔のいう事は、ちゃんと聞きなさい。 お前たち艦娘の

お母んが言ってるんだ、いいね？」

「うう〜」

秦にはつつかつかたて来る朝霜だが、鳳翔には頭が上がりず、言う事を聞くのだった。

「はあ。 そこで大人しくしとれ、まったく。 大人しくしていたら、遊んでやらんこともないぞ。」

「ホントかい？」

「提督？ だめですよ。 お仕事が終わってないんですからね。」

「ああ。分かつてるよ。だから、早めに片づけるぞ。その時は鳳翔も一緒にな。」

「え？ 私もですか？」

「ああ。みんなであそぼ。」

「仕方ありませんね。じゃ、頑張りましょう。」

「やったあ！」

そう言つて秦と鳳翔は残りの処理にかかった。

艦娘のお母さん……

秦と鳳翔がケツコンカツコカリしたため、鳳翔が秦の妻としての座を得た。

それだけならまだいい。赤城と加賀が鳳翔を“お母様”と呼ぶものだから、同時に、艦娘たちの母、という地位が必然的についてしまった。

もつとも、在籍の艦娘のなかでも、霧島や矢矧、阿武隈、由良の“お姉さん”組はお母さんとは呼ばないが、一目置いている。駆逐艦娘たちは、完全に“母”と慕っている。

また、鳳翔も“母”と呼ばれることに、満更ではなさそうで、いつもニコニコとほほ笑んでいた。

その行動も“母”と言つても誰も疑わないほど、母性感満載の鳳翔であった。

あの、霞でさえも、鳳翔を母と慕っている。

ある日、鳳翔を目の前にして、モジモジしていた。

「あ、あの！ その・・・」

霞は鳳翔をまともに見ていない。俯いて話そうとしている。

「何かしら、霞ちゃん。」

「え、つと・・・ 鳳翔さ、ん・・・」

緊張からか、顔は真っ赤だ。

「はい?」

「あ、あの、お・・・」

言葉が続かない。

「お?」

「おか、あ・・・さ・・・ん」

やっと出た。

鳳翔は理解した。

霞は、甘えたいのだ、と・・・。

「はい。 どうしたの、霞ちゃん?」

ニコリとして霞を見つめていた。

霞の顔は真っ赤だ。

そして・

鳳翔が霞を、そつと抱いた。

「ふえつ」と霞が変な声を上げた。

「はい。お母さんですよ。緊張しちやつたかな？」

優しく声を掛けると

霞は声を出すことなく、鳳翔に顔を摺り寄せていた。

「へへへつ お母さん……」

提督たる秦には、なかなか見せない、霞の一面は、鳳翔にだけ見せるのだった。

しかし、その姿は見られていた……。

「霞ちゃん、甘えてますねええ。」

とニヤニヤした顔の皐月、五月雨、初霜に。

その声に霞がギリギリと音を立てているかのように首をまわした。

その顔は……ヤバいところを見られた！、という引きつり顔をしていた。

「あ、あんたたち、い、いつから、そこに居たのよ？」

「ええ？」「おか、あ……さ……ん」つて言ったあたりからかなあ。」と皐月が答えた。

ほぼ全てであった。

霞の顔が赤くなつていく。

「司令官には、突つかかるくせにいい。お母さんには甘えるのねえ。」と初霜が弄る。

「う、うっさいわね！ いいじゃない！ 鳳翔さんはあたしたちのお母さんなんだから！」

そう言いながらも、鳳翔から離れようとはしなかった。

「ほらほら、みんな喧嘩しないの。」

と鳳翔が声を掛けた。

「だって、ねえ？」

三人は互いの顔を見やった。

そして、鳳翔が左手で霞を抱えたまま、右手を広げた。微笑みながら。

「ほら、いらつしやい。」

「「えっ?」「」」

三人は一瞬、戸惑った。

戸惑ったが、みな、鳳翔に、お母さんに甘えたかった。

だから・・・

わあつと抱き着いた。

皐月も、五月雨も、初霜も甘えたかったのだ。

「ふふふつ。もう、甘えたさんね、みんな。」

と言つて微笑んでいた。

抱き着いた方は

「「へへへ、お母さんだあ」「」

と笑つていた。

母、とは言え、この状況はまるで保母さんに群がるこども達のようにあつた。

帰省　く見合い話、秦の決意く

今、秦、鳳翔、睦の一家三人は、秦の実家に向かつて帰省中だ。

目的は……

秦の親戚連中が持つて来たという、見合い話にケリを着けるため。

今朝は早朝から慌ただしかった。

朝食を済ませた後、執務室で

「前もつて言つてある通り、今日から3から4日間、ここを空ける。提督代理に加賀、

秘書艦代理に由良、阿武隈の体制で運営するように。緊急に連絡が必要なら私宛の携

帯電話に連絡してくれ。」

「分かりました。何かありましたら指示を仰ぎます。道中、お気をつけて。」

と加賀が言つてくれた。

そう言つて、三人は鎮守府を出てきたのだ。

秦は白の軍装。　軍人さんだからねえ。

睦は白のブラウス、藍色のチェックのスカート。　しかも、かなりのミニだ。

鳳翔はというと……涼しげな、白地に花の刺繍がある訪問着を着て、手にはレース

がついた白の日傘を持っていた。左手には、秦からもらった指輪をしていた。

横須賀鎮守府から横須賀駅まで車で送ってもらって、そこからは列車を乗り継いで行くのだ。

「前と同じだよな？」

と睦が聞く。

「そうだよ。同じルートで帰るんだよ。」

「おばあちゃんに合うのも、久しぶりだなあ。」

「私もお義母さんに合うのは久しぶりですね。前はホンの一刻だけ、話しましたけど。」

「はははっ。ま、今度も短い時間にはなるだろうけどね。鳳翔の方は連絡してくれ

た？」

「はい。ウチの両親にも連絡済みです。一応、明後日に行く、と言ってあります。」

「うん、上出来。」

横浜から高速度列車に乗り換えていく。

最高速度250kmで疾走する。

右側に霊峰・富士を見ながら列車は西に向かって走る。

所要時間は約3時間だ。

秦の実家は、関西地方にある。最寄りの大都市は神戸だった。

高速度列車から更に乗り換えてほぼ1時間。

ようやく、秦の実家の最寄駅に辿りついた。

ここから徒歩で10分ほどで到着となる。

実家についたのは午後も2時になるうとしていたころだった。

「ただいま。 帰ったよ。」

と実家の玄関を秦が開けて入っていく。

「ただいまー」と睦。

「お邪魔します。」とは鳳翔。

すると奥から母親が顔をだした。

「おや、帰って来たのかい？ ま、上がんなさい。」

と広間に通された。

広間と言っても、畳敷きで12畳はあろうか。部屋の真ん中にテーブルがあり、蚊帳が掛かっていた。

「秦？ お父さんに挨拶しなさい。」

「ああ。」

そう言って隣の仏間に向かった。

秦の父親は5年前に亡くなっていた。

死因は、肺癌だった。

仏壇に向かい、正座し手を合わせる。

すると、秦の隣に、睦と鳳翔が来て、同じように座って手を合わせた。

仏間から居間に戻った秦に、

「お昼は、食べたんか？」

「いや、食べないで来たから、腹ペコでさ。」

「そうか。ほんなら、ちようどよかったわ。これ食べなさい。」

と言つてテーブルの蚊帳を外した。

そこには、大皿に盛られた、巻き寿司があつた。

食べる前に、秦が母親に報告したいことがあつた。

「お袋、食べる前に報告やねんけど。実は、俺、この鳳翔とケツコンしたからな。よ

ろしく頼むわ。」

とぶつきらぼうに言った。

面と向かつて言うのは、恥ずかしいと秦は思っていたから、あえてぶつきらぼうに

言つてみたのだ。

ところが、母親の方が一枚、上手だったようで・・・

「ん？　ほうか。　鳳翔、あんた、こんなむさ苦しい男で良かったんか？　あんたはそこそ別嬪さんやしな。　無理せんでもええんやで。」

「はい。　お義母さん。　私には何の異存もありません。　秦さんは、私の、旦那さまの理想ですから。」

そう言つて顔を赤めていた。

「それやったら、なんにも言わん。　あんたらは、もう立派な大人やし、わしはとやかく言わん。　好きにしたらええ。」

その言葉に、内心、驚いた秦だった。

「・・・お袋、えらい、あつさりしてんなあ。　てつきり、反対するもんやと・・・。」

「なんでや。　睦ちゃんの時やて、独身でいきなり10歳の女の子の子持ちになる、言うたときの方が驚いたわ。　“娘”より“孫”の方が先に出来るなんてあるかいな。」

それに比べたら、大したことあらへんわ。　ま、前にいたところから知ってるし、話もしたことがあるからな。」

「なるほど。」と納得する秦。

「父さん、お腹空いた。　食べていい？」

「ああ、いいよ。　鳳翔も食べて。」

「はい。　頂きます。」

母親はお茶を出してくれた。

「ようやく私にも娘が出来たわけやから、喜んどかんな。お前にはもつたないくらしいの別嬪さんや。鳳翔、よろしゅうな。」

「はい。お義母さん。こちらこそ、不束者ですがよろしくお願いいたします。」

母親も、鳳翔も微笑んでいた。

大皿から小皿に取り分けていく。

三人で巻き寿司を食べていた。

「この巻き寿司、美味しいね。中の具もいっぱい美味しい！」

太巻きほど太くは無いが、厚焼き玉子、椎茸、干瓢、茹でた海老、桜デンプが入っていた。

秦にすれば、お袋の味だったのだが。

「俺からすると、お袋の普通の味だけど。」

「あら、そんなこと言ってはダメですよ、あなた。普通でも十分、美味しいですよ？」

「秦、そないなコト言うんやったら、食んでよろし。お茶だけ飲んどき。」

母親が怒った……。

「睦ちゃん、いっぱい食べや。この男はほつといてええからな。」

秦が慌てて、

「いやいや、文句、言つてないやん。ほら、美味しいし。ほら。」

そのやり取りをみた、睦と鳳翔が笑つていた。

「はははつ。父さん、頭上がんないのお。」

「ホントね。」

と言つて二人で見あつていた。

「で、秦よ。あの手紙の件で、遠縁の従兄妹が、今日の夕方に来る、言うてたで。」

「従兄弟つて言うても、ほとんど会うことないやん。」

「従兄弟つて?」

と睦が秦に聞く。

「ああ、お袋の父方の田舎で、俺からして5親等以上も離れてるんだけど、確か、お袋と
同い年くらいのお叔父貴がいるんだ。田舎特有の繋がりがりつてやつでな。何でまた?」

「知らんわ。今日、来る言うてるから、直接聞き。」

あつさり母親に返された秦だった。

「あ、そう。また、めんど臭い・・・」

遅い昼食後、秦、睦が縁側に座つて、吹き抜けるそよ風に身を任せていた。

「あゝ、涼しいなあ。」

「うん、気持ちいいね。」

鳳翔は母親とともに後片付けをしていた。

「鳳翔は、大丈夫そうやな。」と秦が呟く。

「そりやそうだよ。お母さん、家事はなんでもござれ、なんだからね。」

「そうだったな。」

そのうち、後片付けを終えた鳳翔が縁側にやってきた。

親子三人で、縁側でくつろいでいる。

そして母親が部屋の中でお茶を啜りながら三人を見ていた。

(ホンマに家族みたいやな・・・)

そうしているうちに時間が経ったようで、玄関から声がした。

「おおい、居るか?」と。

秦が出迎えると・・・

「ん? 秦君か! やあ、立派になったなあ!」

と遠縁の伯父貴だった。

秦にすれば、生まれてこのかた、話をしたことなんて2度くらいか? と思っていた

のだった。

「はあ・・・」と言うしかなかった秦だった。

居間に通して、遠縁の伯父貴と向い合せに、秦、母親、睦が座った。

早速、遠縁の伯父貴が話し出した。

「秦君。今は何をしているのかね？」

「今は、海軍横須賀鎮守府で働いていますよ。」

「おお、では、提督、だな！」

「まあ、一応……」

「君のお母さんにも、言つた事だが、秦君、そろそろ身を固めてはどうかね？　いい相手が居るんだがね。」

テーブルの上に、写真を出してきた。

そこに鳳翔がお茶を持って来た。

「粗茶ですが、どうぞ。」と。

「叔父貴、早速ですが、この話は無かつたことにしてくれませんか？」

「なぜだね？　この御嬢さんは、私の知り合いの、県会議員の……」

「言いたいことは分かりますが、私は既にケツコンしていますので、話も聞く気にもなりません。どうぞ、お引き取りください。」

「なに？　ケツコンしてゐるってえ？　ホントかね？」

「ええ。ホントですよ。相手は、この鳳翔です。」

と秦が鳳翔を紹介した。

「はい。秦さんとケツコンさせて頂いています、鳳翔と申します。」

と言つて正座で手を着いて礼をした。

その左手の指輪が見えるように。

遠縁の伯父貴は鳳翔を見た。まじまじと見た。

「いつの間に・・・。秦君、それでいいのかね？」

「はい？」

「確かに、この娘さんは美人だとは思うが、素性は知っているのかね？」

「ええ、ある程度は。それが、なにか？」

「どこの馬の骨ともわからん娘を・・・」

「ちよつと待った!! そこまでにしてもらいましょう!」

と秦が怒気をはらんだ声を上げた。

「叔父貴こそ、この鳳翔の事を何も知らないでしょう? それで文句は言わせません。

見合いはしませんから、写真を持ってお帰りください!」

「! ホントにいいのかね? 後悔しないね?」

「本当にいいんです。後悔なんてしませんから。どうぞ、お帰りください。」

「:分かった。この話は無かつたことにしてもらおう。秦君、後悔しても知らんぞ、

私は。」

「くどいです。どうぞ、お帰りください。」

「そこまで言うなら、失礼させてもらおう。」

そう言つて、遠縁の叔父貴は帰つて行つた。

納得していないのは、見え見えだ。帰りの車のエンジン音が激しい。

(大丈夫かいな・・・ 事故でも起こさなければいいが・・・)

車を見送つた秦と母親だったが、母親が・・・

「秦よ。お前の選んだ道やで、あの娘を不幸な目にあわせたらあかんで。」と。

「ああ。そんなん、分かつてる。」

玄関の前で帰りを待つていた鳳翔を見つめて、

「鳳翔と、決めた時点から、覚悟は決まつてる。これが、俺の行く道だと、ね。」

気が付くと、陽が山の向こうに沈もうとしていた。

「さ、家に入ろか。長旅で疲れたやろ？ 今日はずっくり休みや。」

と母親の声を聞きながら、秦、鳳翔と母親は家に入つて行つた。

遅めの夕食を摂り、順々でお風呂に入った。

「今日は母屋で寝なさい。2階の部屋に布団、敷いといたから。」

と母親に言われていた。

離れでも良かったのだが、母親のいう事を聞くことにした。

そして、就寝時、部屋に入ると、3枚の布団が並べて敷いてあった。真ん中の布団がやや小さい。

明らかに、「川の字」になって寝ろ、という事だ。

「へへへっ、いっちばあん!!」

そう睦が言つて、真ん中の布団に潜り込んだ。

「あらあら、そんなに慌てなくても、いいのよ?」

「へへへっ。はら、父さんもお母さんも、早く、早く。」

「はいはい。」「ったく」

そう言つて秦と鳳翔が布団に入った。

睦が両手を広げて、秦、鳳翔と手を繋いだまま寝入ってしまった。

「お休み、睦。お休み、鳳翔。」

「お休みなさい、あなた。」

秦と鳳翔は、睦を挟んで、お互いを見つめたまま、寝入ったのだった。

帰省　　ゝ実家にてゝ

時間は0600。

ほぼいつもの時間に秦は起き出した。

もう少し寝ていたかったが、反対側の布団の主は既に居なかった。

階下の台所から声がする。

朝から母親と鳳翔が何やらやっているようだった。

隣の睦はというと、まだまだ起きる気配は・・・全くない！

階下に降りていくと

「あ、おはようございます、あなた。」

と声を掛けられた。

定番の小袖姿だ。

当の本人も結構、気に入っているらしく、わざわざ持つて来たのだった。

「おはよう、鳳翔。　相変わらず、早いねえ。もつとゆつくりしてもいいのに。」

「いえ。　お義母さんから教わることはいっぱいありますから。」

「今日は、特にすることもないから、ゆつくりしてね。」

「はい。」とにこやかに返事をする鳳翔だった。

「これ、鳳翔。梅干しはこうするんやで．．．．．」

母親が、楠木家の梅干し作りを教えていた。

「ここまで漬けたら、天日干しするんや。そしたら．．．」

まだまだ掛かりそうな感じだ。

母親の作る、楠木家の梅干しは、実家の裏庭にある梅の木の実を使っている。

だから、大きさは大小取り混ぜである。

しかも、表面は、真つ白なのだ。塩がふいて．．．。

だから、すっぱい、よりも、しょっぱい、のだ。

鳳翔は母親の話すことをメモしている。

(どこにあつたんだよ、そのメモ．．．)

「次は、らつきようの甘酢漬けや。」

楠木家のらつきようの甘酢付けは、ややすっぱめだ。

らつきよう自体は市販されている、鳥取砂丘産を使っている。

母親によると、実が大きくて、歯ごたえがいいのだそうだ。

「この漬け瓶に、ここまで入れて．．．」

まだまだ続くようだ。

「……ここまでしたら、あとは時間や。浅漬けやったら数日で食べられるけど、ま、普通はかなり漬けとくけどな。」

「はい。」

そう言つてメモを取る鳳翔。

「疲れたやろ？ お茶でも煎れよか。」

ようやく、終わったらしい。

「秦、あんたも飲むか？」

「ああ、貰うよ。」

そう言つて、三人で朝のお茶を飲むことになった。

実家のお茶は番茶だった。

一番番茶が安いんや、と言いながら母親が番茶を入れてくれた。

夏の日の早朝。

三人が居間でお茶を啜っていた。

「秦。あんたらはいつ帰るんや？」

「ん？ 帰り？ 明日のつもり。明日は朝から鳳翔の実家へ行くんだ。早朝に車で

行こうと思つてるけど。」

「ほうか。もっとゆっくりしたらええのになあ。鳳翔の実家は、何をしてるんや？」

「私の実家は、ここから車で2時間くらいでしょうか。 兼業農家ですね。 どちらかと言うと、地主なんですけど。」

「そうか。 畑を持つてるんやったら、ウチの野菜でも、と思たけど、止めとこか。」

なに? ウチの野菜を持っていかさうとおもってたらしい・・・。

「あ、それやったら、鎮守府に送って。 向こうで食堂で使こうたるわ。」

「そうか。 今年は、特にようけ摂れてな。 腐らすのは勿体ないと思うてたんや。」

「あとで送付先を教えるから。」

そうやって朝の時間が過ぎて行つた。

睦が起きて、四人となつた実家では、睦を中心に話が盛り上がっていた。

その睦も小袖を着ている。

「二人とも、お揃いか? よう似合うとるな。 今や、小袖の方が珍しいのに。」

「へへへ、いいでしょ? お母さんと一緒に買ったんだよ。」

「お義母さんも着ますか? もう一つくらい、縫いますけど。」

「え? お袋も着るの? そうなると、俺だけ、のけ者やん。」

「あら? あなたの分も、ちゃんと縫いますから。」

「なら、いいけどさ。」

「ふふ。 作ってくれるんやったら、作ってもらおうか。 楽しみにしてるわ。」

「はい。お任せください。」

そして、夕食後、お風呂に入って寝るだけになった。

「秦、先にお風呂に入ってしまった。」と母親が言った。

「じゃ、お先に。」

と言ってお風呂へと向かった。

そして……

「鳳翔、あんたも入りなさい。」

「えっ？ いえ、後でいいですから。」

「なに言うてるんや。夫婦なんやろ？ 一緒に入って、なんの問題がある？ 睦ちや

んはおばあちゃんと入るよね？」

「うん！」

「はあ、それでしたら、お先にいただきます……」

そう言ってお風呂場に向かった。

脱衣所で、秦と鳳翔が鉢合わせになった。

「おわっ！ どうした？」

「あの、お義母さんが、一緒に入れ、って……」

「……」

しばし、見つめあった二人だったが・

「あー、一緒に入るか？」

「・・・はい・・・」

そうは言うものの、広いスペースがあるわけでは無いので、秦が先に脱いでお風呂に入った。

掛け湯をして湯船に浸かった。

後を追うように鳳翔が入ってきた。

長い髪を頭の上でお団子にして、胸からタオルを巻いている。

掛け湯をして、秦が入っている湯船に入ってきた。

「お邪魔しますね・・・。」と。

向かい合ってお湯に浸かっていたが、

「何気に、二人で入るのって、初めて、だな。」

「そうですね。あの時も睦ちゃんが居ましたね。」

と二人で笑いあった。

二人とも、頬はピンク色だった。

「こっちにおいで。」

鳳翔を膝の上に座らせた。

「綺麗な肌だね。」

白くて、艶やかで、弾力があって・・・

鳳翔が秦にもたれかかる。

秦が鳳翔を背中から抱きしめる。

お互いの体温が直接、伝わってくる。

「こんなに華奢な身体なのに、俺たち軍人より、危険な戦闘に身を置いているなんて、今でも信じられんよ。」

戦艦や空母組は、“大人な女性”が多いが、駆逐艦組は明らかに“少女”だ。

楠木隊に属している、朝霜にしる卯月にしろ、大半が明らかに未成年の、十代の前半の少女たちだ。

「いつかは、みんなにお礼を言わなきゃと思ってるんだ。俺は直接戦えないから、余計に思うのかもしれないが。」

「・・・大丈夫ですよ。提督たるあなたが、そう思ってくださいるのなら、みんな、命を懸けて戦えるというものです。」

「命を懸けて、だなんて・・・そんな悲しい事を言わないでおくれよ。」

「でも・・・その中でも、私は、あなたに出会えました。艦娘でなければ、出会う事は無かったと・・・。」

鳳翔が秦に向い合せになる。

「ですから、この出会いを大切に、離さないでいたいと思います。そして、あなたも、離さないでください……。」

「ああ。離すもんか。君と出会えたことは、奇跡じゃない。運命だと思ってるよ。」

二人はお互いをみつめる。

互いの距離が縮まっていく……

鳳翔が目を閉じる……

秦の唇が、鳳翔のを捉らえた。

んっ。

唇が離れると、二人の間に、水の糸が掛かっていた。

そして、改めて二人は抱き合った。

強く、確かめるように。

秦も、鳳翔も思いは同じだった。

離してなるモノか、と。

二人とも、まだ理性の方が強かった。

色白ではあるが、厚い胸板の秦に抱かれない、と思う鳳翔。

華奢とは言え十分に膨らみのある、柔らかそうな乳房、つややかな肌を独り占めした

いと思う秦。

ずっと、このままで居たかったが、ここは湯船の中だ。

そう。長い時間入っているわけにはいかない。逆上せてしまう。

まだ、意識があるウチに、二人してお風呂から上がった。

脱衣所でも、互いに身体を拭き、また抱き合う。

裸のまま、再び唇を求めて。

十二分に唇を求めた後、浴衣を着て居間に戻っていった。

「お風呂、先にもらったよ。」

と声を掛けた。

「おや、長かったな。ま、ゆっくりできたやろ。」

と母親に言われて、二人して顔を赤めていた。

続けて睦と母親と一緒にお風呂に入っていた。

秦と鳳翔のお風呂上がり。

冷蔵庫から、冷えたコーヒー牛乳を取り出してきて、二人で飲んだ。

「ふう。冷たくて、美味い。」

「そうですね。ちよつとお風呂は、長かったですかね？ この牛乳がいつもより美味

しく感じられますね。」

そうやって二人、寄り添い、見つめ合っていた。
そうやって今日一日が過ぎていった。

帰省　　（義理の息子）

帰省3日目の早朝。

秦、鳳翔、睦の三人は、秦が借りてきたレンタカーで実家を出た。

目的地は、鳳翔の実家である。

そして・・・ 秦と鳳翔のケツコンを報告するためである。

実家を出ておおよそ2時間。

途中、休憩を挟み、ようやく鳳翔の実家に到着した。

既に昼過ぎだった。

門の前で、三人が見あげた。

「それなりに大きな家だね。」

「はい。一応、旧家で地主だったようですので・・・」

と鳳翔が答えた。

「お入りください。」

と案内する。

母屋の玄関を開け、

「ただいま戻りました。」

と声を掛けると、奥から女性が出てきた。

母親のようだ。

「はいはい、あら、鳳翔なの？」

「お母さん、ただいま戻りました。」

「お帰りなさい。で、そちらの方が・・・」

母親が秦を見た。

「ええ。電話で話した、私の旦那様よ。」

「初めまして。楠木 秦と申します。この度は・・・」

「まあ、ここでの立ち話はなんですから、お上がりください。」

と居間に通された。

居間のテーブルには既に鳳翔の父親らしき男性が、上座に座っていた。

胡座をかいて、腕を組んで座っていた。

緊張する秦と睦。

母親が奥からお茶を煎れて持ってきた。

そして、その男性のとなりに母親が座り、向かい合わせに、鳳翔、秦、睦が座った。

「お父さん、お母さん、ただいま。大事な話があって、彼を、この人を連れてきたの。」

「初めまして。楠木 秦と申します。こちらは娘の睦です。」

「こんにちは。楠木 睦でございます。」

「ご報告が遅れてしまい、申し訳ありません。鳳翔さんと一緒に住んで、先日、ケッコンさせてもらいました。そのご報告に参りました。本来ならば事の前にご報告すべきところですが、順序が違ひまして申し訳ありません。」

と秦がお詫びを含めて話を始めた。

ケッコンに居たる経緯も含めて。

「……という訳で、鳳翔さんとケッコンさせていただきました。」

「お母さんには前に話した通りでしょ？ お父さん、私はこの人、秦さんに付いていきます。ですから……。」

そこまで黙って聞いていた父親が口を開いた。

「話は分かった。」と。

「楠木君。君は、提督なんだよね？」

「はい。横須賀鎮守府で提督をしております。」

「この子は、鳳翔は、役に立っているかね？」

「はい。それはもう。私の秘書艦として、戦場においても、また鎮守府においても、艦娘達の母としても、優秀であり有能であり、誰よりも頼りになる存在です。また、私

の心の支えにもなってくれています。」

「そうか。」

父親はその一言だけを言ったが、その顔は、娘の活躍に微笑んでいるように見えた。

「娘も、もう子供では無い、と言うことは分かっているつもりだよ。ただ、ウチには鳳翔の下に娘がいるが、息子はおらん。以前は、鳳翔に婿を取らせ、この家を継いで貰おうと考えていた……」

父親はそこまで言つて秦をみた。

「連絡してきて、ケツコンしたんだと、それも提督と、と。」

「最初は、殴り飛ばしてやろうと、思っていた。どんなヤツであろうと、ね。」

「はい。その覚悟はしてきております。それで許されるならば……」

「君たちの話を聞いて、その顔を見れば、その決意は固いと分かった。」

「鳳翔や。いいんだね？ 彼で、本当にいいんだね？」

「ええ。秦さんがいいんです。それに、お父さんに反対されたら、家を出るつもりできたの。」

「そうか。そこまで……。分かった。お前の好きにすればいい。」

父親は秦を改めてみた。そして・

「娘をよろしくお願ひします。」

そう言つて頭を下げた。

「頭を上げてください。こちらこそ、よろしくお願い致します。お義父さん、お義母さん、よろしくお願ひ致します。」

父親、母親、秦、三人はお互いに頭を下げあつた。

「ううう、よかつた、よかつたですう。」

目に涙を浮かべながら鳳翔が秦に抱きついた。

「睦ちゃん、だつたかな。この二人はどうなんだ？ 喧嘩とかしてないかい？」

「ううん。」

と首を振つて、

「私が居るのに、ラブラブのイチヤイチヤの恋人みたい。こつちが目も当てられないくらいだよ。」

「そう。」

と母親がにこりと答えた。

母親も父親も微笑んでいた。

「秦君？ 今日泊まっていきなさい。」

「え？ よろしいのですか？」

「私には、初めての“息子”ができたのだ。今晚、杯を交わしてくれないかね？」

父親が秦を見て、優しい笑顔で、秦を誘った。

「分かりました。 それでは、お供させていただきます。」

この時点で初めて秦と睦は気を緩めた。

すると、玄関が開く音がした。

誰かが来たようだ。

「ただいまあ。 お？ お姉ちゃん、帰って来たの？」

「どうやら、妹のようだ。」

「あら、お帰り。 尚子。 こつちへおいで。」

5人がいる居間に入った。

「尚子、こちらが鳳翔の旦那さんと娘さんだ。」

「初めまして。 楠木 秦と言います。 こちらは、娘の睦です。」

「初めまして。 睦です。 よろしくお願いしますにや！」

「にや？」

「あ、あまり気にしないでください。」

「あたしからすると、姪になるのかな？ お父さん？」

「そうだな。 睦ちゃんから見ると、叔母さんだけど？」

「う・・・、その言い方は、拒否するわ。 花のJKにその言い方はないわ。」

睦ちゃん、

「お姉ちゃん」って呼んでね？」

「じゃ、尚子お姉ちゃん。よろしくお願いします、尚子お姉ちゃん。」

「へえ、睦ちゃん、か。なんか猫っぽいわね？ 髪の毛も栗色で綺麗だし。」

そういつて尚子は睦を抱き寄せ、両手で頬をフニフニしていた。

「あたしにも、妹が出来たのかあ。へへへっ。」

といつて笑っていた。

「うう、お姉ちゃん、い、痛いじゃ。」

フニフニがグリグリになったように、睦が痛がった。

「あ、ごめんごめん！ 大丈夫？」

「だ、だいじょうぶじゃ。」

「これ、尚子。睦ちゃんをいじめないでちょうだい。私の娘なんだから。」

「わ、わかったわよ。鳳翔お姉、そんなに怒らないでよお。」

どうやら尚子は高校生になったばかりらしい。鳳翔とは10才近く離れているらしかった。

その日の夕食は、鳳翔と母親の、親子による手料理だった。

「提督さんだったら、もつといいものを食べてらっしゃるのでしょうか、ウチはそんなに裕福ではないので、お口に合えばよろしいのですけど・・・」

と母親が謙遜して言うが、彩り豊かな、美味しそうな料理が並んでいた。

「いいえ。私ももとは田舎の兼業農家の子ですので、そんなに、いいものなんて食べられませんよ。それに、鳳翔が作る料理ほど、美味しいものはありませんよ。」

みなで「いただきます。」と。

「うん、父さん、これ、美味しいよ！」

「美味しいかい？」

「うん。おばあちゃん、鳳翔さん並に美味しい。」

「あらあら。よかったわ。」

母親がニツコリと微笑む。

「この子の料理はどうかしら？」

「ええ。鳳翔の料理は、すごく美味しいです。鎮守府一の腕前だと思います。」

「あ、あなた、恥ずかしいです。」

と言つて頬を赤めていた。

「で、でも、秦さんもお料理はお上手ですしね？」

「お、そうなのかね、秦君。」

「うん。父さんも料理はするよ。結構、いい腕前だよ！」

と睦が秦にかわつて答えていた。

「いや、それほどでもありませんが……」

「それじゃあ、今度は秦君に作ってもらおうとするかね。」

と賑やかな夕食となった。

夕食後、父親と秦は居間に残って、二人でお酒を呑みながら話し込んでいた。

日本酒の冷や酒と漬物。

話と言つても、難しい話では無かった。

父親が杯を空ける。

「ふうー。秦君。繰り返すようだが、あの子を頼みます。家を出て以来、帰つてき

た事の無いあの子が連れてきた君に、全てをお願いするのはお門違いと思うが、今は君

しかない。よろしくお願いします。」

そう言つて再び頭を下げてきた。

「頭を下げないでください。私はあなたの義理の息子ですよ。その息子にそこまで

しないでください。お願いですから。」

と云つて頭を上げさせた。

「私の全力をもつて、二人で、いや、睦もいるので三人で幸せになつて見せますから。」

「そうか。期待させてもらうよ。」

と話は尽きそうになかった。

そこへ鳳翔が追加のお酒を持ってやってきた。

「男二人で何を話してるんですか？」

「いや、大したことはないよ。お義父さんに、鳳翔を幸せにしますって言わされているのさ。」

「ま、お父さん！」

そう言つて、父を睨んだ。

「おお？ 秦君、その言い方は無いだろう。幸せにすると云つたのは、君じゃあなかつ

たのかね？」

「はははっ、そうでしたかな？」

と秦と父親が大声で笑った。

「もう、二人とも、呑み過ぎです！ このお酒は飲ませられません！」

と鳳翔がプンプンと怒った。

「それはそうと、睦はどうしたんだ？」

「今、尚子ちゃんと一緒にお風呂に入ってますよ。尚子ちゃんが引つ張つていきまし
たから。そのまま二人で寝るんだって言つてましたよ？」

「え？ そうなの？」

「ええ。」

「それじゃあ、うちもそんなに広いわけじゃあないから、秦君はこの子と一緒に寝てくれ。」

とシレつと父親が爆弾を投げ込んだ。

秦と鳳翔の二人の顔が、一瞬で真っ赤になった。

「お義父さん!」「お父さん!」

二人の叫び声が重なっていた。

はははつと父親が笑っていた。

そうやって夜が更けていった。

翌朝。

秦たち三人は、鳳翔の両親と妹の三人に見送られながら、帰路についた。

「鳳翔や、また帰ってくるのよ。」

「はい。お母さんも元気だね。」

「睦ちゃん、また、遊びにおいで。」

「うん。バイバイ、尚子お姉ちゃん! またね!」

「秦君、娘をよろしく。遠慮なく、いつでも帰ってきていいからね。」

「はい。そうさせて頂きます。」

と挨拶を交わして・・・

「では、お世話になりました。」

と。

レンタカーを駅で返却して、横須賀へと向かった。

「昨日はどうだったんだ、睦？」

「およ、何が？」

「尚子ちゃんと一緒にお風呂に入って、一緒の布団で寝たんだろ？」

「うん。楽しかったよ。でも・・」

「でも？」

「もう、尚子お姉ちゃん、あたしをぬいぐるみか、何かだと思ってるんだよ？ 扱いが人

じゃなかったよお？」

「はははッ。 そうなのか。 それは、ある意味、災難だったなあ。」

「ごめんね、睦ちゃん。 あの娘ったら、もう。」

「で！」

ん？

「父さんとお母さんは、どうだったの？」

「どうって？」

「昨日は、一緒の布団で寝たんでしょ？」

「ぶっ。」思わず秦が吹き出してしまった。

「尚子お姉ちゃんが言つてたよ？」　　“ラブラブな二人なら、何かあるよ、きつと”　　つて。」
ニヒヒヒと笑っていた。

確かに、秦と鳳翔は一つ布団で寝た。

寝たけど、何も起こらなかつた、いや、起こすことは出来なかつた。

強いて言えば、二人で手を握り合つて、抱き合つていたことくらいだろうか。

秦は酒の呑みすぎでスグに寝入ってしまったし、鳳翔は鳳翔で、気疲れからこちらにもスグに寝入ってしまったのだった。

それでも二人は、口付けだけは交わしていた。

それを思い返して、二人とも真っ赤になった。

ケツコン式

帰省から帰り着いて数日。

鎮守府では、朝から秦と鳳翔のケツコン式の準備に大忙しだった。

遠征と訓練の合間を縫って、いつもの食堂でケツコン式で飾り付けの真っ最中だ。

ケツコン式の総監督は加賀だった。

赤城が秋吉の付添で、遠征が無いときは不在なのだ。

「さあ、パハッとやりなさい。時間との勝負よ!!」

飾り付けの実施は、駆逐艦娘たちが行った。

ワイワイガヤガヤと賑やかにやっている。

「こっちは花飾りを置いて、あっちはレースの布を……」と。

今準備ということは、ケツコン式は今日の昼なのだ。

衣装は由良たちが用意した。

「やっぱり、鳳翔さんは、白無垢だよねえ。」

「そうだねえ。ウエディングドレスも用意したけど、やっぱり、白無垢が似合うよね。」

「そうなるよ、提督さんは、紋付だね。」

「軍服って言わないかな？」

「そう思う？」

「うん。」

「うくん、やつぱり、紋付を着させようよ。白無垢に合せてもらおうよお。」

それを言うのは、由良の妹分、阿武隈だった。

秦と鳳翔は執務室に居た。

「ケツコン式だなんて・・・大げさな事を・・・」

「いいじゃないですか。私はいいですよ？」

「いや、嫌じゃないんだ。嬉しいんだよ。でもなあ・・・結局のところ、隼鷹あたり

が、騒ぎたいだけなんじゃないのか？って思うんだけどさ・・・」

「それは、ご愛嬌、ということ。もし、そうなる、いつもの事ですね。」

と、いって、ふふと笑っていた。

「鳳翔・・・お前さん、楽しんでるだろ？」

「ええ。楽しみです。ケツコン式は、女の子の夢ですから。」

満面の笑みで答える。胸の前で手を重ねて。

「つたく・・・」

そういう秦も、楽しそうにしている鳳翔を見ているのが嬉しかった。

「ねえ。早くお母さんの花嫁姿、見て見たいなあ。」

と興味津々、と言った顔で睦が言う。

「もうしばらくだよ。」

と微笑みながら秦が言っていた。

◇

今日のケツコン式。

ケツコンカツコカリにもかかわらず、ケツコン式を挙げることにした秦だったが、その思いは、カツコカリではなかった。

最高練度の上限を解除する、という意味を持つケツコンカツコカリだが、秦はそうとは思っていない。

艦娘が相手とは言え、自分が惚れ、選んだ女性なのだ。

カツコカリなハズはない。

受ける方も、その気がなければ、受けることもないはず。

だから、秦は通常の結婚式と同じように挙式を挙げることを選んだ。

秦としては、鳳翔を生涯の伴侶として、周りに認めさせるため。また、自身へのケ

ジメとして。

挙式を挙げることで、鳳翔にもわかって貰いたかった。

鳳翔は鳳翔で、思い人たる秦と夫婦になることを望んでいたし、気持ちもカツコカリではないことを示したかった。

故に、今日このケツコン式なのだ。

◇

時間になつて、由良と阿武隈が二人を呼びに来た。

鳳翔は阿武隈に連れられ、秦は由良に連れられて、執務室を出て行つた。

婚礼衣装に着替えるためだ。

秦は由良たちによつて、執務室の別室で紋付袴に着替えさせられた。

軍服はダメですからね！と念を押されていた秦だったが・・・

「うくん、やつぱり、体格がいいと紋付は似合いますねえ。」

「そうか？」

「もち！　きれいかん、かつこいいです！」

そう言われて、悪い気はしなかった。

とは言え、男は簡単だ。

どちらかと言うと、花嫁の方が大変だった。

阿武隈に連れられて控え室にきた鳳翔だが、いつもの袴姿から白無垢に着替えさせ

れたのだが・・・

結構、着物は重いし、嵩張る。

それに、白粉をして、紅をさして……と化粧も本格的に行っていた。髪も結い上げようとしたが、そこは鳳翔が断った。

文金高島田ではなく、今の髪型で綿帽子にすることにした。化粧が終わって、白打掛を着る。

懐剣を差して、着替えが終わった。

「わああ、鳳翔さん、キレイ。」

阿武隈が目をキラキラさせて言う。

「うううう、お母さん、きれいですううう。」

手伝っていた五月雨が、涙を浮かべていた。

「そ、そう？　ありがとう。」

と頬を朱に染めて鳳翔が答えていた。

式の開始時刻前になって、秦が鳳翔のいる別室にやってきた。

「入るよ。」

と言って扉を開けて部屋に入った。

そこには、手伝った阿武隈、五月雨と共に白無垢、綿帽子姿の鳳翔が椅子に座っていた。

扉からは後姿しか見えなかったもので、秦が鳳翔の前に廻りこんだ。

「どう？　ほうしょ　う、おわ　．．」

そこまで言っただけ言葉が失った。

そう。その姿に見惚れた。そして思わず、

「美しい．．．」と。

秦からすれば、和装の鳳翔は想像できたのだが、こう印象が変わると、出てくる言葉も、それしか出てこない。

「は、はずかしい．．」

と言っただけ俯いてしまった。

「司令官。綺麗ですよね？　ね、ね!!」

「ああ。本当に、綺麗だ。」

頬を赤めて、しばし見とれていた。

「鳳翔、ホントに綺麗だよ。」

「あ、ありがとうございます。はずかしいですけど．．．　そう言っただけだと、

嬉しいです。」

秦を手伝っていた由良も部屋に入ってきて、

「わあ！　すっごく綺麗！　提督さんにはもったいないです。」と。

「なんだよ、それ？ もったいないって、どういう事だよ？」

「へへへつ、それほど、綺麗ってことでしょ。」

相変わらず、からかわれる秦だった。

会場となる食堂では、全ての準備がおわり、みなが秦と鳳翔が来るのを待っていた。

この時の為に、近くの神社から神主さんと巫女さんと呼んでいたのだ。

開始時刻となった。

既に、鎮守府の艦娘たちは席にて待っていた。

現実では神前に向かって右側が新郎、左側が新婦の親族が座るのだが、今日はそんなの関係なく座っている。

扉が開かれ、秦と鳳翔が入ってきた。

巫女を先頭に、紋付き袴姿の秦、白無垢に綿帽子姿の鳳翔が続いた。

「きれいかん、かつこいいですう。」という声が掛かるが、やつぱり・

「わあ、鳳翔さん、綺麗〜。」「素敵ですう〜。」の声の方が多かった。

艦娘と言えども、ひとりの女の子だし。

二人が神前の前まで歩いて行く途中でも、声がかかる。

「お母様、おめでとうございます。それに、とても綺麗です。」と、加賀と赤城。

二人の目に涙が浮かんでいた。

「ありがとう。加賀ちゃん、赤城ちゃん。」

そう答える鳳翔も目に涙をためていた。

神前まで来ると、斎主からお祓いを受けた。

お祓いが終わると、祝詞が読み上げられた。

この時点で秦と鳳翔のケツコンが、神様に報告された。

次は、三三九度だ。

神酒を杯で二人で飲み交わした。

ここで神楽が舞われるのだが、今回は省略だ。

そして・・・

秦と鳳翔による、誓詞。　そ。“誓いの言葉”だ。

秦と鳳翔が神前に進み出て、読み上げる。

「今日のこの日に、私達はケツコン式を挙げます。今後は、互いに敬い、苦楽を共にし、

穏やかに、明るく温かい生活を営み、終生、互いに愛することをお誓いいたします。」

「新郎、楠木　秦。」「新婦、鳳翔。」と。

次は、指輪の交換だ。

カッコカリでは、秦用の指輪はないのだが、それではいけない、と秦用の指輪を用意

したのであった。

改めて、秦が鳳翔に、鳳翔が秦に指輪をはめた。

「鳳翔、綺麗だよ。何度でも言うよ。綺麗だ。」

「は、恥ずかしいです。そう、何度も言われると、余計に恥ずかしいです……。」

秦が鳳翔の綿帽子を外した。

誓いの口付けのために。

二人の唇が触れる。

一瞬の短い間だったが、今はそれで十分だった。

「父さん、お母さん、おめでどう！」

「お母様、ケツコン、おめでどうございます!!」

出席している艦娘たちはみな、誓詞を神妙に聞き入り、中にはうれし涙を流すものもいたが、みな拍手を贈った。

秦と鳳翔が皆に向かい、

「私、楠木 秦と、鳳翔はケツコンした。したとは言え、何ら変わらず、みんなと、楽

しく、愉快にやっていきたい。そして、誰も失うことなくね。今後ともよろしく。」

と改めて挨拶した。

皆からは「はい!!」と。

こうして、二人のケツコン式が終わった。

そしてお待ちかねの、披露宴、ならぬ、宴会だ。それも大宴会。

「仕切りは、この隼鷹さまがやるよお！ さあ、みんな！ グラスを持った、持ったあ。」
 グラスにお酒、ジュースを注いでいく。

「いいね??」 じゃあ、今日この良き日の二人に。 プロージット!!」
 「プロージット!!」

とグラスを上げ、重ねる。

今日の話題は、秦と鳳翔だ。

この二人を中心に輪ができた。

二人の元に行つては、おめでとう、と言ひ、涙を流す。

そんな光景がずっと続いていた。

今この瞬間、皆、幸せを噛みしめていたが、この後に来る別れを誰も考える者は居なかつた。

◇

大宴会も終わり、秦と鳳翔は秦の自室にいた。

既に、同じ部屋で過ごし、同じベッドで寝起きしている二人だったが、今はベッドに腰掛けて話し込んでいた。

「まったく。結局、みんな、騒ぎたかつただけじゃないのか？」

「ふふふ。 そうだとしても、今日は楽しかったですよ。 みんなに“おめでとう”と言われて、うれしかったんですから。」

「鳳翔がそう言ってくれるのなら、何も言えないよ。 鳳翔、改めて言わせておくれ。 今後ともよろしく、と。 そして、愛している。 誰よりも。」

涙を流しながら鳳翔が答える。

「はい。 わ、私も、あなたを、愛しています。」

そう言つて鳳翔は秦にもたれ掛かった。

何度も交わした口づけを、また、お互いが求めた。

今度は、強く、長く……。

その夜、二人は互いを求め、愛し合った。 何度も……。

二人の、時間・

秦と鳳翔が同じベッドで寝るようになって久しい。

カーテンから漏れる日差しが徐々に強くなってきた時間……
ベッドの中で一人……

「う……うううん……」

と、息が漏れる。

徐々に意識が覚醒するが、まだまだ頭はぼーつとしていた。

「あ……あの人の匂いがするう……」

枕に鼻をこすりつけて匂いを嗅いでいた。

（スウー……スウー……）

存分に感じた後、再び眠りに落ちていった。

そして……

「いってきまあああすー！」

「ああ。行ってらっしゃい！ 気をつけてな！」

と階下から聞こえてきた気がした。

(え!?)

(今の、睦ちゃんど、あの人の声だったような……)

そこに至ってやつと、状況を理解した。

「ハッ!!」

と飛び起きた。

(い、いま何時?)

すでに0730を廻っていた。

「い、いけない!!」

と、ベットの反対側を見ると……誰もいない・

もう秦はいなかった。

急ぎ、草履を履いて階下に降りていく。

食堂を覗くと、秦が調理をしているようだった。

「あ、あなた!」

そう言つて秦に近づくと鳳翔。

「やあ、やつと起きたかい?」

鳳翔の声に顔を上げた秦だったが、その顔はものすごく、優しい表情だった・

その表情を見て、一瞬、見惚れた。

見惚れて頬を赤める鳳翔だった。

「あ、あの、睦ちゃんは・・・」

「ああ。さつき学校へ行つたよ?」

「え? じゃあ、お弁当は?」

「ん? ちゃんと作つて持たせたよ?」

「そ、そうなんですか・・・」

そして・・・

徐々に意識が明確になってきた。

「それはそうと、な、なんで・・・ なんで起こしてくれなかつたんですか!!」

頬を赤めた顔から、プンプンと怒り顔へと変わった鳳翔。

「起こしてくださいれば、ちゃんと・・・」

そこまですつたところで、秦が、右手で胸元辺りを擦っている事に、気が付いた。

え?

「鳳翔・・・ お叱りは受けるから、その・・・ 胸元・・・ はだけてるよ・・・」

と秦が、顔を赤めながら、細々と言った。

はい?

と、自身の浴衣を、確認すると・・・

寝間着としての浴衣は来ているものの、胸元が・結構、はだけていた・。

乳房までは見えないものの、覗き込めばそこそこ見えてしまうほどに。

一瞬で顔が赤くなる！

「きやあああああ!!」

と叫びながら、後ろを向いて、浴衣を直し始めた。

「もう!! スケベです! エッチです!!」

と散々な言い分であった。

そんな赤い顔の鳳翔を、秦が後ろから抱きしめた。

「鳳翔。」

「ふえ!?!」

と驚いた声をあげた。

そして、秦が鳳翔の耳元でささやく・。

「起こさなかつたのは、悪かつたよ。でも・あんなに可愛い寝顔を見てると、起こ

せなくって・。ホントに、可愛かつたんだぞ・。誰にも見せたくないと思うほど

に、ね。」

「も、もう! そんなこと言つて!!」

「じゃあ、鳳翔は、俺の事、キライ?」

と聞いてみた。

「そ、そんなわけないじゃないですか！」

とそこまで言ったのだが、

「じゃあ、どうなのかなあ？ キライじゃないとすると・・・」

「イジワルですね・・・す、好きですよ。」

「じゃあ・・・こつち向いて言つて？」

もう、と鳳翔が首をまわす。

それに併せて、秦が顔を前に倒していく・・・。

鳳翔が半身を廻したところで、秦に唇を、奪われた。

んっ、ふっ・・・

最初は、優しくつえばむように・・・

次第に、強く・・・

口づけのまま、互いに正面を向き、なおも抱き合っていた。

唇が離れると・・・お互いの顔は赤かったし、目はトロンとしていた。

「もう・・・強引なんですから・・・」

そう言った鳳翔だったが、そのまま身体を秦に預け、秦の胸に顔を埋めていた。

「昨晚、寝るときは・・・こうやって寝たはずなのに・・・起きたら、いないんですから・・・」

目が覚めたら、寂しかったんですよ？」

と、二人以外にいない食堂で、抱き合つたままだった。

そのうちに、クウウーつと、鳳翔のお腹の虫が鳴いた。

「ヤダ・・・」

と更に顔が赤くなる鳳翔・・・

「さあ。着替えてきて。ご飯にしよう。準備は出来てるからね？」

「あ・・・はい。」

一端、寝室に戻り、いつもの着物に袴姿で身支度をしてきた。

食堂に入ったときには、既にテーブルの上には、朝食が用意されていた。

一人分だけが・・・。

秦は既に、睦と済ませていたから・・・。

「アジの味醂干しがあつたから、焼いてみたんだ。それと、卵焼き、サラダと、お味醂

汁。」

席につくと、秦がご飯をよそつて持つて来た。

ご飯から湯気が上がっている。

アジも、お味醂汁も暖かそうな湯気が・・・

「さあ、召し上がれ。」

「あ。はい。いただきます。」

と言って、食べ始めた。

（うん、お味噌汁、シジミですね。お味噌の具合がいいですねえ。）

（アジの味醂干しも、火を通すと、また美味しい・・・）

箸を進めていた鳳翔だったが、ずっと秦がこちらを見ているのに気が付いた。

「あ、あの・・・そんなに見つめられると、お箸が進みません・・・」

「あ、ゴメン。困らせるつもりは無いから。でも：鳳翔は美味しそうに食べるね。

作りがいがあるよ。」

「はあ・・・」

（そう言われても・・・）

終始、にこつりと見つめている秦。

意識しだすと、気になって仕方がなく、余計に顔が赤くなる鳳翔だった。

それでも、なんとか食べ終えたのだが・・・

「ごちそうさまでした。」

「お粗末様でした。」

食後のお茶を二人で啜っていた。

「あ、そうだ！　ところで、あなた。

睦ちゃんにはなんて言っているんですか？」

「ん？ 睦に？」

「はい。」

「んーとね．．． あまりにもぐっすり眠ってるから、起こしづらくて．．．とは言ってるんだけど？」

「ホントにそうなんですかあ？」

鳳翔は疑いの眼差しを秦に向けている。

「なに、その目は？ ホントだって。」

焦っている秦を、ジーっと思つめる鳳翔。

暫くそうしていたが、間もなく0800になろうかと言う時間になった。

鳳翔に問い詰められる秦であったが、鳳翔に対する気持ちは変わらない事だけは分かってもらって、

「ごめんよ。 ホントだから、さ．．．」

と言つて再び唇を合わせる二人だった。

◇

鳳翔が寝坊？しても、秦が睦のお弁当を作ったために、残るは．．洗濯くらいだった。それもいつもの調子で、すぐ終わる。

その後、秦は提督としての執務に。

鳳翔は秘書艦の仕事に。

午後になると、睦が学校から帰ってくる。

「たっだいまあ！」

その足でまず、執務室に来るのだった。

「父さん、たっだいま。今帰ったよ。」

「お帰り、睦。」「お帰りなさい。睦ちゃん。」

秦と鳳翔が迎える。

「あ、お母さん、大丈夫だったの？」

「え？ なになが？」

「なになが？ って、体調不良で寝込んでるって、父さんが……」

その言葉を受けて、鳳翔が秦を、キツとみた。

「あ、あなた!! さっき聞いた内容と、違いますけど!!」

「え？ そんな説明、したっけ？」

と、すつとぼける秦だったが、ジーっと見つめる鳳翔には、敵わなかった。

「分かったよ。ちよつとフェイクが入ってるけど、ぐっすり寝てるから、起こさないで来た、と言っただよ。」

「ほんと？ 睦ちゃん？」

「うん、私はそう聞いたよ？」

さらに、

「ぐっすり寝てるって事は、体調不良なのかなって。そうじゃなかったの？」

「ええ。ちよつと疲れていただけだよ。ごめんね、睦ちゃん。もう元気だから。」

「良かった。心配したんだよ。毎晩、父さんがお母さんを寝かさないんだって思っちゃったんだ。」

ぶー！

「睦！　なんてこというんだ！　そんなことは、無いからな！」　「そうよ、無いからね！」
と二人して否定したが、その顔は赤かった。

だから、まんざらでは無いんだなあと思う睦だった。

幸せの前に

先の戦闘から半年あまりが過ぎたこの日、秋吉が退院してきた。

摘出手術は成功し、術後の経過も良好、とのことだった。

退院後、秦の執務室に直行してきた。

何の前触れもなく、

「入るぞ」と。

中に居た、秦、鳳翔、由良もいきなりの事で驚いた。

「だ、誰かと思えば、提督ではありませんか！　いつ退院されたんですか？」

「はははっ、驚いたか！　さつき、退院したばかりだ。」

秦は、一応、そう聞くが、疑いはあつた。

鳳翔も含め、みな疑いの目で見っていた。

「ん？　お前さん達のその顔はなんだ？　信じてないな？　じゃあ、赤城、応えてやって

くれ。」

後から入ってきた秋吉の秘書艦、赤城が呆れ顔だった。

「もう！　提督ったら、ちゃんとお話ししてくださいね。」

また、私ですか？」

「ははっ、悪いな、この癖は治らんわい。」

“むう”と赤城が膨れている。

「まったく、もう。では、お話しします。確かに、ドクターから退院の許可をもらっていますし、病状も完治したと見て良いだろう、との意見をもらっています。」

「そうでしたか。完治と。」

秦たちはホッと胸を撫で下ろした。

「で、その足でここ、執務室ですか？」と鳳翔が聞く。

「いやあ、毎日、毎日、赤城が気にしててなあ……」私が居なくても、ちゃんと運営できてるんでしょうか？」ってな？」

「！」

「よく言いますね、あきよししていとく！」と強めの口調で赤城が言う。

さらに、

「“ワシの後にはちゃんとやってるんだらうか”、とか言つて、毎日毎日、気にされていたのは、どこのどなたでしたっけ?」

「う・・・そこは、黙つとれ、と言つたらうに。」

「嘘はいけませんよ、嘘は。違いますか?」と上から目線になっている赤城だった。

その勢いに押されて「わかったわい……」と押し切られた秋吉だった。

そのやり取りを見ていた三人は、ぷつと嘖き出して笑ってしまった。

「提督も、ひとの事、言えませぬね。あはははは！」

「お前らなあ、ちよつとは労つてくれても？　ま、ええかい……。」

そんな会話の中で、秋吉が気が着いた。

鳳翔と秦の左手薬指に指輪が光っている事に。

「そうか。楠木は鳳翔と、か。話は聞いていたが……それが、お前たちの答え、なのだな。」

「ええ。」

秦と鳳翔が見詰め合つて、応えた。

「そうならば、ワシがとやかく言う事は無い。すでに、お前たちの人生だからな。」

そう言つて、秋吉は自らを納得させた。

鳳翔が秦に寄り添い、

「これが、私たちの幸せの第一歩と思つています。」と。

そう言つて二人は見つめて頷いていた。

◇

そして、大本営では重傷を負つていた元帥が復帰してきた。

昔と変わらず、威張り散らしたいヤツが帰つて来たのだ。

そして、いきなり、会議で秦を解任せよ、と吠えた。

理由は、首脳部に大きな損害を与えた作戦遂行能力の不足、と、秦一人の手柄となった事への妬みから来る、秦への疑惑のため。

会議に出席した面々から、いつの話だよ、と諫められたようだが、そんな意見には耳を貸さず、己の失敗にも係わらず、他人の所為にした。

また、秦への疑惑は、我が海軍へ恩を売るために、敵と内通し、自身が活躍したように見せかけた、と。

とんでもない話だった。

秦が敵と内通することはなかったし、そんなそぶりも見せてはいない。

秦は、ただ、純粹に、敵を攻撃したに過ぎないのに……。

元帥は、即刻実施せよ！ と吠えまくったようだが、そうはならなかった。

疑惑はあくまでも疑惑であり、確定ではなかった。

大本營の陣容は……昔のような、元帥の意を汲む連中ばかりではなかった。

とは言え、元帥に対して強く反発する者も数は少なく、大半は、元帥にも、反対派にもつかない、中道派が多かった。

このため、元帥の意向は、半分聞き入れられ、半分は却下される格好に落ち着くことになった。

当然、秋吉は抵抗した。

戦闘による被害は、個人によるものではなく、敵によるもので、秦には何の落ち度もない事を、懇々と話した。また、疑惑のような事は、あるはずが無いと話したが、元帥他は聞く耳を持たなかった。

大本営での会議はその後も続いた。

その結果は……

会議後、秋吉は、その足で秦に会いに向かった。

「楠木は居るか？」

「はい、なんでしよう？」

と秦が答える。

「おお。いたか？ 短兵急で申し訳ないが、身边を整理してくれ。」

「はっ。」

秦も鳳翔も、赤城も、何を言っている？ という顔をしていた。

「大本営会議で、貴様に、敵との密通の疑いあり、として、憲兵による取り調べが行われる。いや、憲兵では無いな。もはや元帥直属の私兵だな。」

「なっ！」

「敵と密通なんて、ありえませんか!!」

秦が怒気をはらんだ声を上げる。

「そんな事は分かっている。」

「これは、元帥の妬みだよ。はつきりいつてな。」

秋吉が大本営会議の状況を説明した。

それを聞いて、赤城も鳳翔も、呆れにもたた溜息をついた。

「やはり、私はまだまだ、目の敵にされているんですね。」

「すまん。いろいろな抵抗はしたのだが、な。」

「で、どうしますか？」

と鳳翔が聞く。

「どうもこうも無い。今ここから逃げれば、奴らに“密通は本当だった”と思われる。

それだけは避けなければ。」

「では、素直に、取り調べに応じる、と。」

鳳翔の声が低い。

「・・・そうだな・・・」

俯き加減で答える秦を、胸の前で手を重ねている鳳翔が見つめていた。

「証拠があるわけでは無いから、殺されることは無いだろう。その代り・・・」

「そうだな。軍籍剥奪の可能性もある、か・・・」

と秋吉が続ける。

「ええ。 退役では納得しないでしようからね。 前回の事もありますし。」

そこまで言つて、鳳翔を見た。

「鳳翔。 もしもに備えて、指示を出しておく。 これより秋吉提督の指示に従うように。」

「!?」

「それは、そうですが・・わ、私も、お供します!」

「付いては来れないからな。 ここ、横須賀で待つてくれ。 大丈夫、必ず戻るから。」

そう言い終わると同時に憲兵、もとい、私兵が入つてきた。

「失礼する。 楠木准将ですな? 敵との密通の疑惑につき、我々と一緒に来ていただきたい。 抵抗すると容赦はしませんぞ。」

と言つて付添の兵士が秦に銃を突き付けてきた。

「まずは、君の所属、官、姓名を名乗つてもらおうか。」

「ふん。 反乱分子めが。 貴様に名乗ることもないわ。」

「そうかい。 では、憲兵の少佐風情が、将官に対する言動ではないな? 本件は憲兵本部が行っている事なんだな?」

「そ、そうだ。 憲兵本部長の命令である!」

少々、言葉が詰まる、憲兵の少佐。

秦は、何かある、と確信する。

「間違いないんだな？　どの様な証拠があつての事か、説明してくれるんだらうな？」

「それは、一緒に来ていただければわかる。」

と説明すらしようとしない。

「こちらが黙つていれば、いい気になつて!!」

と鳳翔がキツク言うが、憲兵は意に介さない。

「艦娘に用はない！」

「ただの艦娘ではないぞ。　提督の秘書艦は、佐官位を持つ。　それをわかつての言い

草なんだな？」

と秋吉が憲兵に対して威嚇の態度をする。

秦は目を瞑り、しばし考えていたが、

「良かろう。　こちらから赴いてやる。　それでいいだらう？」

「了解だ。」

「そんな！　提督?！」

驚いたような表情をする鳳翔だが、秦の顔は・・・落ち着いているように見えた。

「では、秋吉中将、行つてきます。　後の支援、お願いします。」

そう言つて頭を下げた。

「ああ。任せておけ。」

そう秋吉が返答すると、憲兵三人とともに秦が出て行った。

「提督、提督!! あなた! 待つてくください!! 待つて!!」

と鳳翔が追いますがつきそうだったのが、

「ちよいと行つてくるよ。 帰るまで待つて。 あと、睦のこと、よろしくね。」

とニコリと微笑み、出て行った。

鳳翔が、秦が出て行った扉を、絶望に近い思いで見つめ、その場で立ちつくし、拳を力いっぱい握っていた。

「そんな・・・」

「赤城? 楠木の無実を訴える準備を始めてくれ。 ヤツは今の海軍には必要だからな。」

「はい! 提督。」

と返答をして、鳳翔に話しかける。

「お母様、大丈夫ですよ、きつと。 ですから・・・。」

「ええ・・・」

そう返事をするものの、その顔は、今にも泣きそうであった。

そのうち、耐えられなくなつて、うううう……と泣きながら、ソファアに倒れ込んだ。そこへ、たまたま通りがかつた睦が入つてきた。

「ねえ、父さん、出かけたの？」と。

しかし、部屋の空気は、重かつたし、鳳翔がソファアに倒れ込んで、肩を震わせて泣いていた。

「ど、どうしたの？ お母さん!?! ねえ、赤城さん、何があつたの?!!」

当然、その状況からして、赤城に問うた。

赤城が秋吉を見た。

その秋吉が無言で、頷いた。

「実はね、睦ちゃん、……」

赤城が睦に、全てを、包み隠さず、話した。

「そ、そんな! ま、また、またなの? 提督さん! またなの?」

睦が声を張り上げて、机を叩き、秋吉に詰め寄つた。

「睦、スマン……」

そう。

睦は知っている。

秦の前任地である舞鶴でのことを。

そこでの出来事の繰り返しだ、と、思った。

睦も拳を握ったまま、立ったまま、涙を浮かべていた。

その顔は、理不尽に対する、怒りが現れていた。

「くつ。人って、大本営って、そんなに、父さんを悪者にしたいの!」

睦が言ったその言葉は、その場にいる皆が思っている事だった。

睦が、倒れ込んでいる鳳翔の肩をたたいて、

「お母さん、泣かないで。父さん、きつと、帰って来るよ。ね? 一緒に待つてよう

よ。ね、お母・さ・ん・」

声を掛ける睦も、悔しくて泣いていた。

怒りで叫びたいくらいだった。

顔を上げた鳳翔が睦を見て、

「睦ちゃん、あのひと、あの人がああああ・」

泣き叫びながら睦に抱き着いてきた。

鳳翔と睦の二人が抱き合って悔し涙を流していた……。

二人の幸せ

憲兵本部。

ここに秦が連れてこられていた。

取調室に、秦と憲兵2名の三人がいる。

「外は今日もまた一段と寒いですな。」

それで・・・と。

「敵との内通の事実は無い、と言うのですな？」

「そうだ。 そんな事実は無い。」

「本当かね？ 火の無いところには煙は立たない、とも言うぞ？」

「内通の事実は無い。 何度聞かれても、同じことを答えるだけだ。」

こんな調子で1日中、朝から夕方まで続く。

明らかに、目の前にいる憲兵の意図を感じる秦だった。

「ところで、提督。 食事を召し上がらないそうですな？ なぜです？」

「私は、命を大事にしたい、と思っただけだよ。 望まぬ死を受け入れるほど人間が

出来ているわけでは無いのでね。」

直接的な言葉は言わないが、過去の憲兵や公安に属する輩の常套手段で命を落とすことは避けたかった。

つまり、毒を盛られることを恐れていた。

「我々憲兵も、そのような無茶はしませんよ。信用してくださいよ。」

そう言われても、現時点で、信用するなど秦には出来なかった。

留置所での食事に手を付けない秦だった。

2, 3日はどうという事は無いが、日数がかさめば、身体がついてこなくなる。

(さてさて、いつまで我慢できるかな)、と思っていた。

◇

その頃、秋吉は、反元帥派の面々に連絡していた。

なんとか無事に秦を解放するために、動いていた。

反元帥派に連絡し尽くし、中道派にも連絡していった。

さらに、会議には出席していなかった、各地の提督にも声を掛けて行つた。

その中には、大湊の立華もいた。

「秋吉提督、話は了解しました。私の方でも動きましょう。まだ戦闘が続くという

のに、大本営のヤツらは、大バカすぎますな。」

と。

協力を惜しまないと言ってくれた。

しかし、具体的な動きがないまま、日数だけが過ぎていった。

秋吉が連絡しまくった先に、地方自治体がいくつかあった。

そう。避難作戦を行った、あの小笠原を管轄する自治体も含まれていた。

知事からすれば、島民の非難を、犠牲も出さずにやってくれた秦を“英雄”扱いにしたかったのだが、大本営に拒絶されていたこともあって、秦の無罪放免に動いてくれることになった。

その動きは、知事から自治省に繋がりに、内閣にまで話が上がっていった。

この国の海軍は、文民統制が基本となる軍隊だったため、内閣総理大臣にまで上がった話が、今度は国防省から軍隊へと降りていくことになった。

国防大臣に、元帥が呼ばれた。

「軍隊の詳細には、首を突っ込むことは無いが、無実の者を罪に問うという、冤罪を、軍は平気で犯すのかね？」

「はははっ。大臣は何をおっしゃっているのか、理解に苦しみますな。」

「分からないのかね？ この件は、内閣まで上がっている話なのだがね？ では、はつきり聞くと、憲兵本部に勾留している楠木提督は、何の罪なのかね？」

「アヤツは、敵との密通の疑惑ですよ。」

「ほほう。疑惑という事は、確固たる証拠は無いのだね？ 無いのならば冤罪だね？」
「何を根拠に。現在、調査中ですからね。証拠は見つかりますから。」

「彼の勾留から既に1週間以上が経過しているそうじゃないか。それでも証拠は見つかつていないのであろう？」

「大臣もしつこいですな。軍内部にまで口を挟まれるのは、いかがですか？」

「それを言うなら、文民統制が原則なのだ。軍による統制が唯一ではないのだよ？」

「軍の最高指揮官たる首相の意見を伝えているのだ。それに反するのだね？ 元帥は。」

「いや、反するなど、何を言われる？」

「聞くところによると、元帥は、かなり無茶をしているようだね？ 大臣である私のところ」

「に、軍高官から意見書がいくつも届いておるよ。あなたは、無茶をし過ぎているよ」

「うだね。ここいらで潔く身を引いてはどうかね？」

「それは、私に引退をしろと、言われるので？」

「有態に言えば、そう言う事になるかね。」

「そのようなことは聞き入れかねますな。何の権限があつて……」

「元帥、あなたもくだいですな。これは首相からの命令ですぞ。文民統制を嫌がる」

「のなら、それはそれでも結構だが、我が国を相手に、あなたに付く者はどれだけいます」

かな？」

ここまで言われて、元帥はようやく気付いた。

全てにおいて根回しが出来ている事に。

もう、逃げ道すらない事に。

「くっ、これは楠木からの情報漏れですか？」

と大臣を睨みながら言うが・・・

「何を言っている。さつきも言った通り、あなたと数名を除くほぼすべての将官の意見であり、国民の意見だよ。」

この会談をもつて、元帥の引退が決まった。

そんな会談が行われている裏で、秦もある男の面会を受けていた。

すでに勾留が10日を有に超え、断食を続ける秦の体力は、そろそろ限界に近づきつつあった。

動きが鈍い秦に対してその男が言った。

「生きているか、楠木？ この頑固者め。」

なぜか、官僚言葉でも憲兵らしい言葉づかいでもなかった事に違和感を覚えた秦だった。

男は、帽子を取って、頭を搔きながら、

「覚えてないかあ。ほれ、お前んちの2軒隣の井藤だよ?」

「え?」

まじまじと見る。

「お前さん、昔つから意固地の頑固者だったよなあ。俺の親父にも怒られたのに意地

張りやがってさあ……」

そう言えば……そんなことがあったな、と。

「え? あの井藤のヒデボンか?」

「ああ。やつと思いい出したか? この頑固モン!」

容赦のない言葉だ。

「ヒデボンが、なんで、ここに居る?」

「俺は、いま、ここの本部長をやっている。」

「へ?」

驚いた。正直、驚いた。

まさか、幼馴染が憲兵本部長とは!!

「ちよつとした調査で遠出している間に、お前さんがここに入つてるとは思わなかった

ぞ?」

「ははは。」

「大丈夫か?」と言つても、10日以上、飲まず食わずだつて? この寒い時期なのに、よく生きてんな、お前。」

「扱いは酷いけどな。まだ生きてるよ。帰るつて約束したからな。」

「そうか。お前さんがここに居ると聞いて、調べさせたんだが、証拠はないし、疑惑は元帥とやらの嫉妬だな。」

井藤の役職権限を使えば、簡単に分かつたことだ。

「そうだろうな。」

「なんだ? 分かつたのか?」

「ああ。自分の事だからな。」

「それだけ喋れたら、まだ大丈夫だな。今日からは飯をちゃんと食え。俺が責任を

持つから。」

「信用していいんかい?」

「ああ。」

そう言つて井藤の顔が笑つた。

「ん? なんだ?」

「どうも聞くところによるとだな、お前さんがここに來てからずっと、ひとりの女性が面会を求めてきているらしい。」

「!?」

「和服姿の後ろ髪の長い女性だそうだ。」

(そうか・・・)

「いつもは入口で追い返していたそうだ。明日からは面会させるからな。いいな？」

「おう。ありがとな。」

「良いって。ただ、正式な手続きには時間が掛かるからな？　もうしばらくはがんばれよ？」

そう言つて面会は終わった。

改めて、なんであいつが本部長なんだ、と思つていた。確かに、世渡りは上手かつたけどよ？

しかしながら、秦の体調はその日の夜から悪化した。

飲まず食わずが10日以上続くと、さすがに体力的にも精神的にも、無事なわけがなかった。

だから、面会も出来ずに、さらに数日が過ぎた。

そして・・・

「楠木提督、釈放です。」と言つて扉が開いた。

「し、しゃく、ほう……」

既に自力で立てる状態ではなかったので、監視員の肩を借りて外にでた。応接室にやってきたが、そこには既に井藤がいた。

秦はその姿は確認した。

が、他に何人かの気配を感じたが、意識は朦朧としていた。

「楠木、遅くなつたが、これで無罪放免だ。よく耐えたぞ。」

と秋吉が迎えに来ていた。

「秋吉提督、ここいつをよろしくお願いします。」

と井藤が言った。

さらに……

「面会も出来ないような状態になつてしまつて、いつもの女性にはお詫びしておいてください。」

「ああ。了解した。」

すぐさま車に秦を乗せ、横須賀へと急ぎ帰つて行つた。

横須賀鎮守府では、秋吉からの連絡を受け、執務室で睦が待っていた。

そわそわしながら待つていた。

鳳翔は、というと今まで厨房にいた。

（帰ってくる、あの人が、帰ってくる。）と嬉しさ半分で、涙を浮かべながら、飲まず食わずだった秦の為に、胃にやさしい食事を作っていた。

出来上がった料理を持って執務室まで来ていた。

もつとも、秦がいきなりアツアツの料理を食べれるとは思っていない。

まずは、ひと肌くらいの温度でないと、と思っていた。

今、鳳翔と睦の二人が、待っていた。

そこへ、鎮守府に1台の車が到着した。

秋吉と赤城が秦を抱えて降りてきた。

そこへ・・・

「あなた!!」と叫びながら鳳翔が飛び出してきた。

そして、秦に抱き着いた。

「あなた、無事で・・・」

と言って涙が止まらない。

しがみついても、なおも止まらない・・・

睦も抱き着いてきた。

「父さん!! お帰り!!!」

こちらも涙だ。

そして・・・秦が、力なく、二人を包む。

「た、だい、ま。」

どこにそれだけの水分があったのか、と思うほど涙を流している。

話を聞きつけた艦娘たちも集まってきていた。

「お帰りなさい、司令官!!」「おかえりいいいいい」

「すまないが・・・腹、減った・・・」

「はい！ 用意出来てますから!!!」

と。

食事を終え、自室のベッドで眠る秦を、鳳翔と睦がベッドサイドで見つめていた。

「お帰りなさい。あなた。」

と涙を流しながら。

「お帰り。 父さん。」

と睦も涙を流していた。

そこへ、秋吉がやってきた。

「入るぞ？ すまんが、ちよつと、いいかな？」

「はい。」

と答えながら、涙を拭った。

そして、秋吉が言う。

「これからの事だが、実はな．．．．」

と話し始めた。

二人はそれを聞いて驚いた。

「えっ!?!」

◇

次の日。

朝から雨が降っていた。

そこそこの大雨だ。

雨粒が地面を叩き、水たまりができていた。

その雨音を超える声があった。

「しれーかん、邪魔するよ!!」

と言って扉を激しく開けて朝霜が入ってきた。
が!

執務室には誰もいなかった。

「あれ? 誰もいないじゃん。」

時刻は0900を過ぎている。

通常ならば、執務が始まっている時間だ。

そこへ赤城が入ってきた。

「あら、朝霜ちゃん。朝からどうしたの？」

「ねえねえ、しれーかんは？ 鳳翔さんは？」

「あら？ 楠木提督は療養でしばらくここ横須賀にはいないわよ。お母様は当然、付添よ？」

「え？ そうなの？ 横須賀にいないの？ なんで？」

「みんなにこれ以上、無様な姿を見られたくないって。」

ニコリとして言う。

「ええく???」

「大丈夫よ。元気になれば戻って来るわよ？」

「そうかも知れないけどさあ・・・」

ぶー垂れる朝霜であったが、

「ふふふ。朝霜ちゃんはしれーかんの事が好きなのかな？」

「ぶー！ 赤城の一言で顔が赤くなった。」

「もう！ 赤城さんてばっ！」

そう言っ出て行った。

入れ替わりに秋吉がやつてきた。

「おはよう。赤城。」

「おはようございます。提督。」

「もう、楠木は出たのか？」

「はい。昨夜のうちに、お母様の艦で。雨に紛れて出航しました。行先は聞いて

おりませんが……」

「行先は、ワシも知らないのでな。鳳翔に任せてあるからな。」

ニヤリとする秋吉だった。

昨夜のうちに、鳳翔が秦を連れて、ここ横須賀を離れていた。

「そうですか。なら、大丈夫ですね。」

「睦ちゃんも一緒だから、何も心配することはないだろう？」

そう言つて秋吉は細く微笑んでいた。

「そうだ、由良を呼んでくれ。」

「はい。由良さんですね？」

「ああ。しばらく、楠木がいらないから、ワシが代わりに指揮を執る事を伝えておかない

とな。」

「じゃあ、伝えておきますね。」

「ああ。頼む。」

そこへ、執務室の扉を叩く音がする。

「失礼します。秋吉提督はご在室か？」

「おお、いらつしやい。井藤本部長。」

憲兵本部の本部長、井藤だった。

「昨日は、世話になったね。」

「いえ。それほど事はありませんよ。私が居ない間にやられた事ですからね。

きつちり落とし前はつけさせますよ。」

と挨拶が交わされた。

本部長の井藤がいない間に、勝手に本部長印を使われ、知らぬ間に命令書を偽造されていたことが発覚し、現在、憲兵内部でも調査が行われていた。

「ところで、ご依頼の『呉』の件ですが、これが報告書になります。」

と言つて、かなり分厚い書類を差し出した。

「ありがとう。で、結論的にはどうなのかね？」

「そう、お急ぎにならなくても、大丈夫でしょう。・・・結果から言つて、横領の事実

は見つかりませんが、それ以外の不正は見つかりました。それに・・・ここは、かなりブラックですな。」

「そうか・・・ ブラック、と。」

「提督は、これを受けてどうされるので？」

「策はあるんだがな・・・」

とニヤリと笑った。

それを見て井藤がフフフと不敵に笑った。

「提督もお人が悪い。楠木をやるつもりですか？ ヤツはまだ病人でしように。」

「ははは。 ばれたかね。 ワシとしてはそうしたいんだがね。 ま、ヤツがいつ戻っ

てくるか、なんだがね。」

「ヤツならば、私としても太鼓判を押ししますよ。」

秦の次の仕事が決まった。

そう言つて二人は笑つていた。

◇

ここは横須賀から遠く離れた、秦の実家。

ここに来てから数日経つていた。

もちろん、秦の療養が目的だ。

この地域は、冬になると何回か雪が降る。

そんなに積もることは無いが、今はうつつすらと、一面銀世界になっていた。

居間のこたつに足を突っ込んで、座椅子にもたれたまま眠っている男が一人。寒くないように毛布が掛けられている。

その毛布が・・・スー、スーと男の寝息に合せるように、同じタイミングで上下している。

そして・・毛布の隙間から長い黒髪がはみ出していた。

見てくれもなにも、男とは違う髪だ。

毛布が・・男の身体よりも、盛り上がっている。

そう。

もう一人いたのだ。

座椅子で眠るのは秦。

飲まず食わずだった時に比べ、いくらかは顔色も良くなっていたが・・・。

秦にもたれて、抱きついて眠るのは鳳翔。

秦の療養にと、鳳翔が選んだのは秦の実家だった。

ここなら、海からも離れ、潮の香りもしないから、休んで英気を養うにはいいだろう、と思ったからだだった。

眠る秦の胸に、満面の笑顔の顔を埋めている鳳翔だが、その顔は、秦からだけ見えるように毛布が掛けてあった。

秦の顔は頬が緩んでいるように見える。

その二人を呆れるように、微笑んで見ている睦と母親がいた。

「もうお昼なのに、まったくと、この二人は……」

「まあまあ、この二人が良かったら、ええんや。そやけど、睦ちゃん妹か弟は、まだまだ先やな。」

「ええええ、そうなの？」

そんな会話が交わされている事も知らず、よく眠っている二人。

春まだ遠い冬の日、縁側から差し込む陽が暖かい、小春日和となったこの日。

この二人だけは満足だった。

そして……この二人のまわりだけは、穏やかな時間が流れていた。